

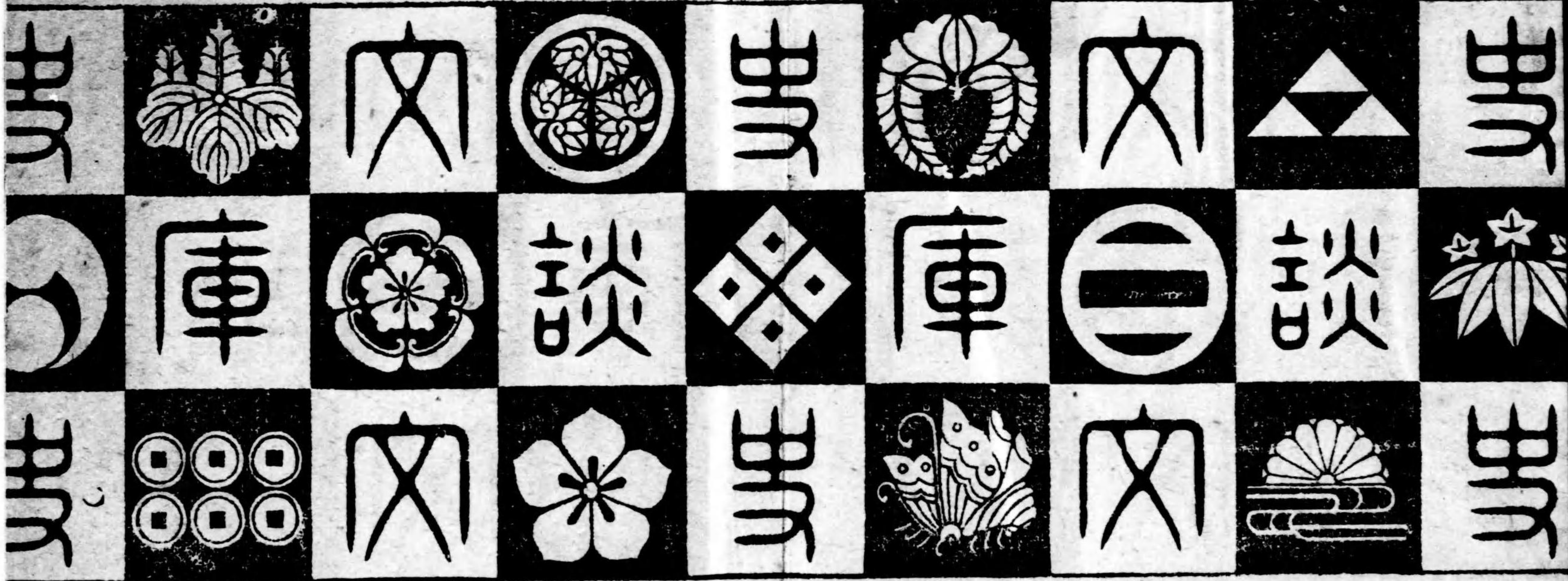
史談文庫 悉術 雲切八郎
第八編



特



始



特100
58

新編 忍術 雲霧 八郎 殿

緒言

上下三千歳、發しては萬葉の櫻、
の鐵なる大和魂、熱烈火の如、
の精華と稱へらる、武士道、之
史を飾る誇りである、史談文庫
依て、人道を標榜し、武士道を
に貢献し、世道人心を裨益せん
の書を讀んで振はざる懦夫あり
讀んで起たざる懦夫ありや

發行
者
蔵

大正 5 年 6 月 7 日
我が國の歴史の主義に
期す、此會
此書を
内交

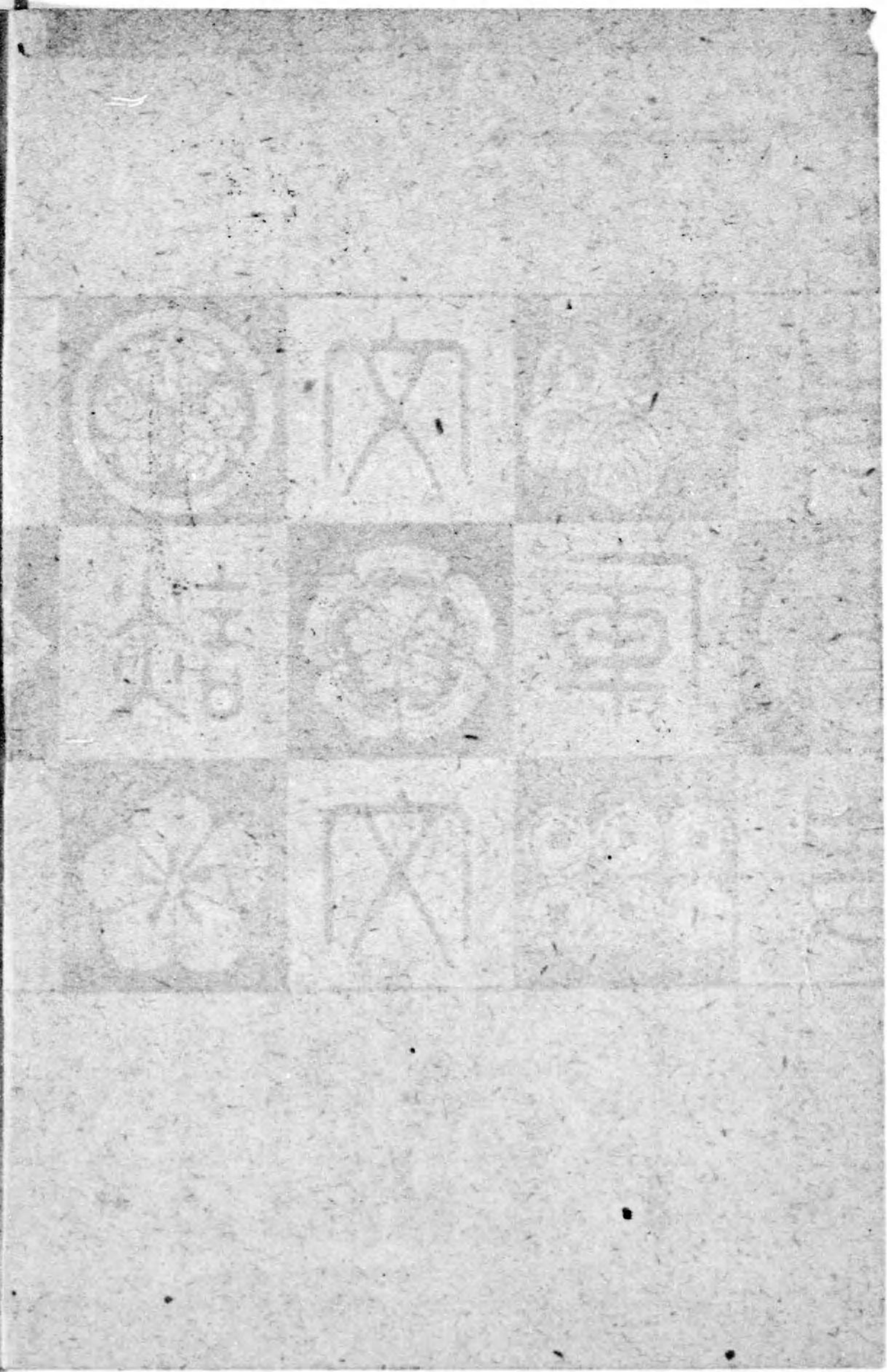




Illustration of a rectangular frame containing faint, illegible text or a stamp.

Illustration of a circular frame containing faint, illegible text or a stamp.

目次

一	柳の下には居ない……………	一
二	此の世の引導渡して呉れん……………	二
三	大軍に恐れたと云はれては耻ぢや……………	三
四	腹が減つては軍が出来ぬ……………	四
五	乃公の人相書を持つて居るぞ……………	五
六	雲切八郎見参……………	六
七	下郎の分際として推参なり……………	七
八	首が千切れる……………	八
九	天下無敵の手の内拜見しやう……………	九
一〇	冥途の見物に出かけたい……………	一〇
一一	順逆二門なし……………	一一
一二	腹をかす奴があるか……………	一二

一三 人捕る龜は人に捕られる……………一二二

一四 睨み倒してくれる……………一三二

一五 一番山賊を退治てやらら……………一四二

一六 此の鐵棒がお見舞ひ申すぞ……………一五一

一七 チト臍くり金でも用意して居れ……………一六二

一八 飴をなめさせて置いたのだ……………一七二

一九 生意氣な名前をつけて居るわい……………一八三

二〇 お前の首を貰ひたい……………一九二

二一 乃公を干し殺す氣か……………二〇四

二二 雲切八郎の仕置場破り……………二一五

二三 雲切八郎龍造寺家に乗込む……………二二五

二四 三文の價値もない……………二三七

忍術 雲切八郎

蒼川生著

一 柳の下に鱈は居ない

世は二十八天下に分れた戦國時代、江洲觀音寺に佐々木六角入道承禎といふ無
 双の大名があつた。隣國には同國小千谷に淺井備前守長政あり、越前には朝倉
 左衛門督義景あり、尾州には織田上總介信長あり、大和には筒井順慶入道あり
 四方に強敵を控へた佐々木六角入道は、四夜油斷も隙もなかつた、何れこう先
 祖は近江源氏の嫡流佐々木四郎高綱の末葉であるから、家來に名ある豪傑も跡
 なくなかつた、夫れさへ隣國の大名と對抗して、少しも遜色がなかつたが、中

にも尾張の織田家とは互ひに鎧を削つて、毎年戦ひを交へて居た、此の佐々木家に秋月六郎左衛門といふ侍大将があつた、夫婦の間に八郎といふ子が一人ある、當年七歳だが、持つて生れた力が強い、夫れにも梶白も随分烈しい、毎日表へ遊びに出ると五人七人必らず泣き込んで来る、母の桃枝も心配して母「コレ八郎、そんなに友達を泣かすものではありません、殊に年上のものを叩いて怪我をさせるとは何事でございます、チ氣をつけませう……」素性が立派だから叱るのも他人行儀、ナカ／＼口汚なく叱り飛ばすやうな事はない、八郎は母に叱られるときは、ハイ／＼と云つて口返事一つした事はないが、表へ出るとモウ夫れを忘れて仕舞つて氣に喰はぬ奴はボカ／＼遣る、其の子の親が喧ましく叱り飛ばすと八「此老爺、子供の喧嘩に親が出るかい……」云つたと思ふとモウ禿頭をボカ／＼と毆つて居る、夫れゆへ觀音寺の城下では八郎の事を鬼若と云ふ異名さへつけて居る、父の六郎左衛門も持て餘し十歳になると、郎

黨の難波小源太、小源次といふ二人の兄弟を傳役につけ、二人に命じて、八郎に梶白をさせないやう氣をつけてさせて居る、此の秋月六郎左衛門といふ、佐々木家で一萬石を次いで居るが、常に貧乏をして居る、ナセ貧乏をするかといふと、六郎左衛門は立派な人物があると、下郎でも仲間でも構はん、直に二百石三百石を與へて自分の郎黨にする夫れが爲め分不相應の家來が澤山ある、中にも千石を與へて居る家來もある、ダカラ一萬石貰つても常に手許が不如意不如意の代りには、立派な郎黨が澤山あるから、眞逆の時に役に立つ、主家の佐々木家よりも、秋月の方が立派な家來が澤山あるといはれて居る位ひ、八郎の傳役となつた難波小源太、小源次の兄弟も親の代からの家來であるから忠義無類、兄弟ながら三百石づつ貰つて六郎左衛門も信用されて居る、力も強し腕も出來、智恵もあるといふ三拍子揃つた豪のものだから、此の二人が傳役になつた、以來は八郎梶白が出來ないから時々ベソを掻く事がある、小若様チト

劍術なり槍術なり、武藝を遊ばしませ、戰場へ出ましては力が強いばかりでは役に立ちません、武藝を十分心得て居りません事には一騎打の勝負の時遅れを取ります八「夫では、小源太教へてくれ小「畏まりました……」十歳の暮から小源太兄「が交るゝ武藝を仕込む、十三歳の時にはモウ八郎立派な腕前になった、折しも尾州の織田上總介信長が不意に江洲観音寺に攻めかゝつた、佐々木家は已を得ず籠城と極つて、夫々準備に及ぶ、織田勢は犇々と観音寺へ取り詰めて、此の時織田方先手の太將柴田權三郎勝家は、秋月六郎左衛門の守つて居る観音寺城の西三丁ばかりの所にある砦を一氣に乗り取らんといふので、其の用意をして居る、處が秋月の忍びの者が八方へ出してあるから、早くも夫れを知つて六郎左衛門に注進した、六郎左衛門ニツコと笑つて、早速悴八郎を呼出して六「明日柴田勢が砦を乗取らんと押し寄せる由、尤もアノ砦は我が兵で固めてはゐるが、明日迄も味方のものではなく、實は敵に取らせて陣所を布か

せて置き、却つて我れわ敵を破る奇計がある、サレが取られるとも苦しうはないが、初度の戦いに味方の柵を破らるゝは、面白くない、殊に我が手並の程を見せ置かれれば、織田勢が佐々木勢を侮るであらう、仍つて初陣の功名に其方をして柴田勢を討たせるのであるから、初陣に立派な手柄をせよ」之れを聞くに八郎雀踊りして喜び勇み八「お父様、承知いたしました、何うぞ計略をお授け下さいまするやう」六郎左衛門此の時赫と眼を怒らし六「ナンと申す計略を授けてくれい、之れ位いの小勢を破るに何んぞ父に計略を授けてくれなどと申す、其方は十歳より今日迄晝は小源太、小源次兩人に武藝を習ひ、夜は此の父が軍學兵法を教へたではないか、何んの爲めに習つた、何に便つて敵を破つて夫れで手柄になると思ふか、我子には不似合である、馬鹿者奴ツ……」叱りつけられて八郎恐れ入り、夫れでハツと平伏した、小言ものべづに聞くと耳馴れて少とも怖くないが、八郎は生れて初めて小言を聞いたのだから少さくなつて

夫れへ平伏して居たが、何に思ひけん、ヌツと首を擡げて八「お父様、承知いたしました、何うか人数の授けて下さいまし父「ウム敵に向ふ計略何んと其方は心附いた八「お父様、明日の合戦は、不意の横矢と覺悟いたしました、六郎左衛門手を打つて大きに感服いたしました父「夫れでこそ我子ぢや、其方の手段は天晴圖に當るであらう、其の餘は臨機應變にいたせ、其方十三歳ではあるが、夫れ丈の事は仕込んである筈である、此の親にして此の子あり之れ丈け云つたきりで、父の六郎左衛門はブイと立つて仕舞つた、此處で秋月六郎左衛門は我子の爲めに郎黨難波小源太、弟小源次、其他駒林縫之助、鬼田大圓坊、近江谷小六郎等屈強の勇士を撰んで總勢八百人を授けた、八郎太いに喜んで其日の宵の程より手配を定め其の夜八ツ半時砦を押し出し、下街道を押しして、ドウ「乗り込んで来たが、ズン「行き過ぎるから、郎黨の難波小源太は小「若様戰場は即ち此の横の松並木でござる、敵が砦を乗り取らんとする時、此の處

に我兵を伏せ置いて不意に横槍を入れますれば、味方必らず勝利でございまする、然るに今此の場所を他處に眺めて、進まれるは何事でございます、早々跡へ引返へして敵の來るのを待ち遊ばせ八「小源太お前のいふ言葉は尤だが、此の八郎は考へがあつて行き過るのだから、心配するな十三歳でも初陣、何うしても勝たねばならぬ、少しも案じる事はない、黙つて尾つて來い……と云ひ捨てた儘、ドン「急ぎ馬を走らせる、此の様子を見た難波小源太は、ブツ「咳き初めた小「オイ「弟若様はお惻怍のやうだが、まだ「小供だ、夫れに片意地で困る、何の辨へもないに、只勇氣に逸つて、敵陣間近く進んで今に難儀をせられるのだ、何うも困つたものだの弟……弟「だの兄貴だのといふと若いやうに聞へるが、弟の小源次が五十二で兄の小源太が五十八歳だから驚く昔の人間は何こも、今の若いものは役に立たないと云つて悪くいふが成程夫れに相違ない、弟の小源次は小「見上、幾等發明でも強いと云つても、

其處が末だ年が行かんから、萬一過ちがあつては成らんから、御主人が兄上や我々を附けてよこされたのだ、爲にならないと思つて、黙つて居る事はない、跡に御主人に申譯がない、遠慮をする事はないから、悪い處はピシ／＼意見をせんければならぬ 兄「サヤア、さうしやうか……」兄弟が相談して居ると、八郎はドン／＼人数を又六丁ばかり前に進めたから、堪り兼ねた兄の小源太は、小「若様、何處迄おいでなさる、そんなに無闇に先へ行つては、退口が難儀でございませぬ、何處迄おいでなさる 八「小源太心配するな八郎について來い、何事もいふには及ばん……」到頭山の下迄來て、廣場の上へ人数を上げやうとするから難波小源太大いに驚いて小「若様何うも飛んでもない事をなさいませぬ此の處へ人数を上げては、敵の的となるばかり、伏勢の出来る處ではございませぬから、此處の松の蔭に伏せてお待ちなさい、手前悪い事は申しませぬ、私共は御主人に従ふて戰場往來をする事七十餘度云はゞ戰のうちには生れたやうな

ものでございませぬ、軍の掛引采配の振り方、お父上様の軍配、何もかも知り抜いた、私必らず手前が申上げる事には間違ひはござらぬ、悪い事は申しませぬ 貴公は腕は立ちますが、戰場は今日が初めて、何にも勝手を御存知ないから、勇に逸り深入をなさる、何うか此處に備へを立て、敵をお待ち遊ばせ、相手は織田の家來でも豪勇無双の柴田權六郎勝家、小唄にもございませぬ。

木綿藤吉米五郎左

掛れ柴田に退き佐久間

と申します、織田家の大將分のうちで木下藤吉郎は木綿、木綿は美しうはないが何んに用ひても調法なもの六郎左は丹羽五郎左衛門長秀の事で、此の人は暫らくの間も無くて叶はぬ人で、總べて上下に渡つて必要なこと米の飯のやうなもの、柴田勝家は勇氣があつて向ふ行きの強い人で、先鋒に此の人が立つたら如何なる堅陣たりとも、突き破るといふのが自慢、退き佐久間は佐久間左衛門

尉信盛、此の人は退陣、譬へば戦に負けて退く時でも、悠々として慌てた體がないから退軍には此の人に限るといふのでございませう、其の中でも向ふ行き強い柴田勝家が先陣であるのに、斯んな處に備へを立て、はサアお討ちなさいといふやうなもので、敵の鐵砲の的となりに来たやうなもので、懸殺しにされて仕舞ひます」と口を極めて諫めると、八郎は怒つて八「黙れ小源太、貴様は我家古參の郎黨ではあるが、今日は八郎の家來でないか、我は若年でも大將だぞ、ナセ度々我が下知に叛くのだ、強いて申すと軍令を以つて首刎れるから、左様心得る」と叱りつける、スルト難波小源太も怒つたく、小「此の餓鬼奴始末にいけない何うなと勝手にしろ、オイ、弟、乃公はシミ、世の中が嫌になつた、何日も柳の下に鱈は居ない、御主人に従つて出陣する時は何日でも好かつたが、此の馬鹿息子を打ち毀して仕舞つた今に懲々するのだ、敵に押取巻かれ、ギュー、つと其の時目が覺めて、此んな意地堅い小倅に譯を言つた

つて分るものぢやない、何んでも懲りて見なくてヤア分らないから、マア黙つて見て居て、泣面搔くのを見て笑つてやらう……」とアツ、怒つて居るとそんな事には頓着せず、八郎は山の臺へ人數を上げて八「ヤア小源太其方は五百の兵を従へ、此の處に伏せて、敵の通り過ぎる時に、中陣を打ち込め」と五百目筒十五挺、並筒百挺を渡し、自分は三百人を従へ、五百目筒五十挺を携へさせ、小源太より五丁南の道端三十間ばかり隔つて備へを立てた。

二 此の世の引導渡して呉れん

處が其の備へを立てた處が一面の畑中で樹も何もないからヨク分る、驚いたのは郎黨の面々だ、△「オヤ之れが伏勢なのだ、伏勢といふものは、敵に姿を見せるものでない、夫れに頭の頂上から足の爪先迄見へるが斯んな伏勢といふのは神武以來ありやしない、之れは恐れ入つた、成程小源太の怒るも無理はない、

何んといふ馬鹿くしい伏勢だらう、何んな鈍間の敵だつて、此處へ来て我々の居るのが氣のつかぬ筈がない馬鹿くしくつて物が云はれない」と皆がくまで眩き出した、然るにイヨく明方近くなると、又其の朝に限つて霧の深いこと、四方朦朧として咫尺を辨ぜずといふ位ひ、兜の頂上から眞底へ傳つてボタリく雨滴が落ちるやうに落ちて来る、此の朝霧の爲めに、何もかも濕つて仕舞つて氣色の悪いこと、隣りに居るものも見へない位ひ、之れを見て同勢は△「オヤく奇體な事があるものだ、何うだい今朝の朝霧は△之れは大變だい之れでは柴田勢が此處へ來たつて、足許に我々が伏せて居る事は、少くも氣がつこまい、何うも恐れ入つたのは八郎様だ、天文なんか何日の間に擧げられたのだらう凡人の及ぶ處ではない○左様だい十三歳の翁百歳の童子と云つて八郎どのは當年十三歳、之れは三歳の翁だ、當手の大將分難波小源太どのは……アイヤ何歳になつたいけれ△當年五十八歳だ○之れが百歳の童子だ、

馬鹿な面をして居るのは小源太どのだ……と口々にいふ、小源太之れを聞いて小「ヤイ何奴だ、馬鹿な面をして居ると云つたのは怪しからん奴だ……」小言は云つたが朝霧の爲めに姿が見へないから誰が云つたのか分らない、此の時小源太は呢と四邊を見て居たがボロく豆粒ほどの涙を流して喜んだ小「アツハ、有難い事ぢや、秋月の家は代々名將 出る八郎君は豪い人物になられるであらう、之れなら勝つ事疑ひなし」と一軍は勇氣リンくとして沈まり返つて控へて居る、此の柴田權六郎の本陣に於ては、豫て宵より用意を整へ静々と人數を繰り出した、先手は佐久間玄蕃盛政の千二百人、二陣に於ては免受勝助、司じく拜郷五左衛門二手の同勢千五百人三番は柴田勝家の一千人、惣勢合せて三千七百人、堂々と繰り出し山の麓を押し通る足許に秋月の同勢が控へて居るのが朝霧の爲めに少しも見へないから、城下端れの砦をさして押寄せるが否や、ドツと関の聲を揚げて攻め掛る、此の時砦のうちには大將秋月八郎

左衛門悠然と控へ、少しも驕がず、岩の柵を開き、鐵砲を撃出し、此處を先途と防戦に及んだ、此の時二陣の免受勝助、拜郷五左衛門の同勢が、先手に續いてドツと繰り出して来る、折柄豫て伏せて居た難波小源太、小源次の同勢五百人、小「スハ折こそよし打てり……」號令の下に、早くも五百目筒十五挺、一時にドツと切つて放し、並筒百挺、同じく一時に千五百人の眞只中目掛けて打ち込んだ、柴田勢は朝霧の深く爲め、足許に伏勢のある事を知らんから、不意を撃たれて何かは以つて堪るべき、忽ちの間に騎馬武者、徒歩立ち共に百人餘り、バタ／＼と血煙立つて打つ倒れ其の外疵を受けるもの數知れず、アツと驚き右往左往に散亂する、免受勝助、拜郷五左衛門は何れも柴田家では聞へし豪傑崩る、味方を制しながら勝「ヤア、汚なき味方の頁方かな、敵の伏勢は僅かの小勢、何條何程の事やあらん、踏み留つて追ひ散らせやう」と頼りに下知をする、之れに勵まされて柴田勢踏み留り突つ込め／＼と盛り返した處へ、難波

小源太大槍を取つて突き進み、柴田勢を四角八面に突き立て／＼、勇を揮つて攻め惱ます、さても猛勇の名を取つたる柴田勢も堪り兼ね、ドツとばかりに崩れ立つた、此の時免受勝助は齒を噛んで怒り立ち、勝「サテ／＼云ひ甲斐なき味方の者共かな、イテ此の上は我が手並の程を見せてくれん……」と十文字の槍を捻つて小源太目がけ突つてかゝる、難波小源太心得たりと、穂先二尺に餘る干身の槍の血に染みたるを取り直し、勝助に渡り合ひ、上段下段と突き合つた双方無双の武術の達者、既に五十餘合戦ふたが、更に勝負がつかない、處へ免受勝助の郎黨一人、眞一文字に翻り來り、主人を助けんと、小源太に向つて切つてかゝる、小源太大きに怒り勝助と合した槍をヤツと巻き落しさま、エイとばかり郎黨を只一突きに突き捲つた勝助眼前に家來を殺され、怒り心頭より發し再び小源太に突つか／＼つた、小源太心得たりと又々勝助と火花を散して捲り合つて居る折しも、柴田の本陣に於いてド／＼と烈しく砲聲が響き渡ると共

に、ワッツといふ関の聲、免受勝助大いに驚き、勝南無三、旗本へ敵が向つたと見へる、ソレ引けッ……馬を返へし本陣へ引揚げる、柴田勢は何れも馬を返へし本陣さして引揚げる、難波小源太勇み立ち、小ハヤ戦争は味方の勝ちになつたぞ、此の勢を逸せず突き崩せくと無二無三に追討をかける、之れが爲め柴田勢は討たるもの數を知らずといふ有様であつた、話し代つて此方は秋月八郎手勢タツタ三百人を従へ、朝霧に紛れて、柴田權六郎勝家の本陣へ近寄つて来て、不意に五百匁の鐵砲、及び並筒の筒口揃へて一度にドツと火蓋を切り其の烟の下より槍先揃へて、無二無三に突つ込んだ、柴田勢は思ひもよらぬ處へ敵が掛つたから大いに驚き騒ぎ、△オヤツ天から降つたか地から湧いたか、人間の降りさうな天氣でもないに……と暢氣な事を云つて居る間に本陣は早や崩れ立ちサンくの敗北となつたけれども大將勝家は戰場萬馬往來の大將であるから、少しも動する氣色もなく床机にかゝり崩る、味方を鎮め勝

備へを立て直し敵を追拂へッ」と烈しく下知をする、處へ十三歳の秋月八郎葉武者には目も呉れず、大將を討んと心得、大膽にも馬を從横に乗り廻し敵勢を突き伏せ難き立て、又は徒歩立ちの兵は馬の蹄に躓倒しズン／＼乗り込んで来た、屹度向ふを見る金の御幣の大馬印しを押し立て、其の下に柴田勝家、金小寶崩黄緘しの鐵、銀の鍬形打つたる兜を被り采配打ち振り／＼、下知を傳へ、床机にかゝつて居るから、八郎は之れを見ると雀躍りして喜んだ、八「イデア敵將御參なれ……」と不敵にも馬を煽つて乗り込んで来る、折柄勝家の前に控へて居た工藤金大夫といふもの徒歩立ちであつたが、夫れと見ると眞一文字に驅けつけ、八郎目がけて突つ掛つた、八郎大いに怒り、八「エイ無禮な奴ッ……」云ひさま相手の槍を叩き落とし、サツと突き出した槍先の爲め工藤金大夫はアツと其の場に差殺された、シテ遣つたりと八郎は、脇目も觸らず、勝家を目がけて乗り込んだ、其の勢い實に凄まじく相見へた時、横合から飛んで来た一人の

勇士がある、身の丈け六尺を越へる大男、徒歩立ちで又渡り三尺五寸といふ陣
刀を取つて突つ立ち上り、大音を揚げ、武如何に小冠者、若年の身を願りみす
大將へ見参など、は片腹痛し、汝如き小倅を相手にするは不足だが、戦場の習
ひ、イデヤ我手にかけて此の世の引導を渡してくれん引導代りに名乗つて聞かせ
るに仍つて、闇魔の聽へ何つて訴へよ、斯くいふ我々は、日本一の豪のもの、
柴田の郎黨松原甚兵衛教高なり、我が太刀の錆となつて往生せよと 大太刀を
取つて切つてかゝる、八郎一言の返答にも及ばず、槍を捻つて、松原甚兵衛に
突つかつた、八郎は十三歳、甚兵衛は四十二歳、殊に大力無双であるから、
八郎に比べては小供と大人のやうなものだ、一上一下、上段下段、暫らくの間
打ち合つたが、更に勝負がつかない、此の時横合より乗り込んで来たのは、難
波小源次だ、小「ヤア若様其の敵某へお渡し下さるべし……之れを聞くと、八
郎ニツコと笑つて、八「ヤア宜い處へ来てくれた、此の葉武者は汝に渡す」と、

云ひさま、引外して、馬の頭をきり、と立て直し、向ふの方へ乗り抜けんとし
た、松原甚兵衛大いに怒つて、松「ヤア汚なし返せ、追はんとする横合より、槍
取り直した難波小源太、小「ヤイ貴様の敵は此處に控へて居るぞ、サア来い來れ
ッ」と突つかつた松原甚兵衛も驚いた、先のは餘り若過ぎる、之れは大分年を
取つて居る、松「イヤ此の爺老奴が、要らざる邪魔立てするかと、切つてか、
ると、小源太物をもいはず、甚兵衛と火花を散して打ち合つた、此の時秋月八
郎に於ては、群がる敵の只真中へ乗り込んだが馬蹄にかけて蹴倒し跳ね飛ばし
サツと大將勝家の馬前へ乗附け、大音を揚げ、八「ヤアく夫れに控へたるは、
織田の先陣柴田権六郎勝家と見受けたり、我こそ佐々木六角承禎入道の味内に
於いて、侍大將を勤めたる秋月六郎左衛門の倅八郎とは我ことなり、十三歳
の初陣ッ、サア来い」と、會釋もなく突つかつた、今は是非なく勝家に於て
も、ヒラリと馬に飛びのり、槍押取つて、勝「推参なり若輩者、芋制にいたし

てくれんと、槍を合せ、時に八郎得たりと、血に染まつた大身の槍を取り直して突つか、つた勝家は相手を若年と侮り、只一突きと思ひの外、上段下段繰り出す槍先は、水月の如く、突き合ふ穂先は、玉兎の波を走るが如く、電光の閃めくに等しく、一喝一聲、秘術を盡して三十餘合といふもの打ち合つたが、更に勝負がつかぬ、勝家心中大いに驚き、只に酒に酔へるが如く暫らく打ち合つて居ると柴田勢は夫れを見て、ドツと繰り出し、勝家を助けて八郎に打つてかゝる、八郎事ともせず、右に當り、左りに拂ひ、千變萬化と秘術を盡して戦つて居る、勝家之れに力を得て烈しく突つ立てたからさしもの八郎も今は大勢に受り捲かれ、既に危く相見へたる折しもあれ、一人の荒法師、身の丈けは是れ六尺五六寸、坊主頭に鉢巻なし、黒糸纏しの大鎧を着し、八角の檜の棒に筋金打つて、百八のイホを打つたるを軽々と掲げ、無二無三に柴田勢を叩き伏せ毟り倒し、一拂ひに十人二十人バツタ〜と叩き捨つる其の猛勇の働きは源平

の昔の西頓武藏坊辨慶にさも似たり、之れ則ち秋月の郎黨にして大力無双と呼ばれたる鬼田大圓坊といふ大入道だ、之れが爲めに柴田の〜はサン〜になつて敗走する、八郎大きに喜び、八〜ヤア、大圓坊であるか宜い處へ来てくれた之れに力を得て大喝一聲、クッ出す槍先は稲妻の如くに閃き渡り勝家身を躲して避けんとする、此の時遅し早くも八郎槍先でつき捲つたからアツといふ間もなく勝家はドンと落馬する、八郎は勇んで聲高く、八〜ヤア〜遠からんものは音にも聞け近くはよつて目にも見よ敵の先陣大將柴田權六郎勝家を秋月八郎討取つたり、後日に功名を争ふ事勿れ〜斯んな事は平素軍談を聞いて居るか〜ヨク知つて居る、之れを聞くと柴田勢は屹驚して、△オヤツサテは親玉は遣れて仕舞つたか、アんな小倅に遣られるとは何うした事ぢや〜と何れも呆氣に取られ勇氣挫け忽ちドツと崩れ立つた。

三 大軍に恐れられたといはれては耻ぢや

流石の柴田勝家も之には驚いた勝「ヤア」救済い俄鬼もあつたものだ、乃公
 な討取つたりとは何事ぞ」と、大慌てに慌てながらムクムクと飛び起き乗替の
 馬に飛びのりながら勝「ヤア」者共勝家は討たれはいたさんぞ無事だ、
 権六郎は死にはいたさん」と聲を咽らして怒鳴つたが、一旦崩れ立つた柴田勢
 ナカ／＼そんな事は耳にも入らん、我れ先にと逃げ惑ふ、處へ免受勝助、松原
 甚兵衛の同勢がドシ／＼引揚げて来る、其の後からは難波小源太が部下を勵ま
 し洪水の堰を切つて押し流すが如き勢を以つて押して来たから、本陣の敗軍
 と二陣の敗軍と一處になつて崩れ渡つた折しも柴田勢の後陣の方より、翻翻と
 空天に翻つて混沌と馬煙を中空に蹴立て一手の軍馬を攻めかゝつた、之れぞ
 剛ち八郎の父六郎左衛門が五百人の同勢を従へ、敵の背後に廻つたのだ、柴田

勢は泣面に蜂、八郎一人で澤山の處へ、親玉の秋月六郎左衛門が背後を遮つた
 から到々柴田勢は大敗軍となつて、ドツと散亂に及んだ、スルト西手に備へな
 立て、居るのが丹羽五郎左衛門の同勢だ、柴田が戦争を始め、城兵の爲にサン
 追立てられ敗軍と聞いて之れを救はんと思つた、屈強の郎黨を先鋒となし、馬印を
 押し立て、進んで来た、其の勢五千餘人、何んしる織田信長は今度こそは佐々
 木を攻め滅ぼすといふ考へだから堂々と備を十二段に立て、入り代り／＼攻め
 立て、處が織田家では丹羽の赤備へと云つて、名高いもの、大將分は皆海老
 殻胴の鎧を着し、雑兵は赤絲の鎧、齒木綿の陣羽織、皆朱柄の槍を携へて居る
 から赤い／＼、持つて居る手拭から禪迄に赤木綿を用ひる、兵糧は小豆飯で
 お菜が胡蘆蓴で、香物は梅干、そんなに赤いものに凝らなくつても宜いが、名
 題の丹羽の赤備へ、今や八郎は十分に勝軍をして、初陣の功名拔群なりとあつ
 て、人数を引揚げんとする處へ、丹羽の同勢が押して来るとふい注進、八郎ニ

ツヨリ笑つて八郎夫れでは直に人数を引揚にいくから速に備へを立て直し丹羽の同勢に一泡吹かせて引揚げやうと、いふと此の時難波小源太は大きに驚き小若様の御計略と云ひ、御度胸と申す、實に何うも驚き入りました、御若年とは申しながら今日の御働き、誠に感服仕りました、味方は既に疲れ武者となつて居ります上に敵はなかくの大軍、殊に新手、何うして勝利の見込がございませう、丹羽の兵と戦つて敗軍いたす時は之れ迄の勝軍も空しく相成りませう、若様初陣の御功名は之れ待いて澤山でございませう、一先づお引取りあつて然るべく存じまする……」サア之れを聞いて八郎夫れは其方の心得違ひ八郎は夫れほどにも思はんぞ、敵が参らねば如何にも人数を引揚げが、今丹羽の新手の大軍押しよせると聞いて退ぞく時には丹羽の大軍に恐れた、いはれるには恥ぢや、夫れでは敵に背後を見せた事になつて笑はれるのではないかと小源太の諫めをイツカナ聞き入れない、折柄加勢に來た木村又右衛門之れは木

村又藏の父だ、之れと計略を示し合せ、手分けをして相待つた、丹羽の同勢は五千人烈風の如く押し來つた處へ早や柴田勢は悉く敗走して遙か向ふに僅かの小勢で備へを立て、休息して居るのが秋月八郎と聞くと、丹羽の同勢は小癩なりと躍り立ち、相手は小勢、夫れに疲れ武者、物の用に立ちさうもないと侮つて、只一戦に敵散らしてくれん」と丹羽の前備へ仁木九郎次郎、瀧川織部の同勢三千人が眞一文字に関を作つて押しかけた、八郎はタツタ五百人を以て二千を相手に闘かつたが、木村又右衛門と豫て示し合せてあるから暫らく戦ふてワザと丹羽勢の爲めに追ひ立てられたる風に見せかけ秋月勢は足並亂してドツとばかり敗走した夫れと見ると仁木九郎次郎、瀧川織部は二ツソレ追討して悉く叩き殺せと短兵急に追かけて來る、餘り烈しく追つ立てられるから是非ない取つて返して戦ひ又叶はずして逃げる、踏み留つて戦つては又追立てられて、ドツと逃げて行く丹羽の同勢は勝ちに乘じて既に五六丁といふもの

進んで来た折しも思ひがけなく耳許にド……ンと一發の砲聲轟き渡つたと思ふと難波小源太二百人を従へ、ドツと喚いて打つて出で丹羽勢の後ろより不意に攻めかゝつた、仁木九郎次郎、瀧川織部の兩人も前後に敵を引受け殊の外の難戦となつた、之れを見ると大將丹羽五郎左衛門長秀は先手を助けんとあつてエイ／＼聲して押し出したる、折しも思ひもあらず、左手の方より鬼田大圓坊二百人を率いて打つて出で丹羽の同勢に攻めかゝるが、五郎左衛門先手を助ける事が出来なく是非なく之れに向つて應戦する此の時丹羽の家來中根内匠、根岸九郎兵衛といふ無双の勇士味方を勵まし中敵は小勢なり何程の事やあらん押包んで打ち取れと返せ進めいと烈しく下知を傳へる丹羽の同勢之れに勵まされて必死となつて慟く折しも例の鬼田大圓坊、赤檜八角の棒を風車の如くに振り廻し、群がる丹羽の勢を小口から打ち伏せ難き倒す勢ひに血煙四方に霧雨の如く、首は胸へ打ち込み、又は胸を打ち、散々に打ち立てられる、之れが爲

めに皆荒膽を挫かれ、舌を捲いて近寄るものは一人もなく、サレバ丹羽の先手及ぶ二陣も本陣も共に崩れ立つたから、大將丹羽五郎左衛門大いに怒り自ら馬を乗り立て向朱羅の如く荒れ廻つて居る折しも、一手の軍兵眞一文字に囁けつけて来た眞先なる馬上の大將は兜のうちより黒髪振り亂し卯の花緘し金小寶の鎧同じ毛三枚鍔銀の天空の兜を頂き、七寸半ばかりの黒鹿毛に、朱塗金紋盡しの鞍を置き、紅白染分の手綱、燃へ立つばかり紅厚總をかけて打ち乗り、手に九尺柄の槍を携へ四百餘人を前後に従へ馬煙りを立て、驅けつけるが否や大音を揚げて、武之れは織田家の二陣備へ丹羽五郎左衛門殿の同勢と見受けたり、我こそは佐々木六角入道承禎の家來秋月六郎左衛門の一子八郎なり、五郎左衛門殿に見参の爲め推参在つた、イザ勝負あれ……と叫ばつてガツと突いてかゝつた、五郎左衛門之れを見て味方を勵まし丹ヤア敵は僅の小勢なり、押取包んで打ち取れいと下知を傳へた、之れが爲め盛り返して、我れ打ち取

つて功名せんと、競ひかゝつたが、八郎は業武者には目もかけず、五郎左衛門を打ち取らんと、サア近付かんとすると、丹羽家の豪傑が八方より追取り圍んで仕舞つたから、大將は近寄る事が出来ない、八郎大いに怒つて、近寄る敵を東西に叩き伏せ、忽ち一方の血路を開いて馬を飛ばし難なく丹羽五郎左衛門の馬前へさして乗り込んだ、此の時丹羽の郎黨四人が一度に四方より切つてかゝつた、八郎推参なりと怒つて右よりかゝる一人を只一槍にて突倒した、其の隙に左より突つ込んで来る一人を、ヤツと叫んで槍まき落す、其の間に又背後から太刀を揮つて斬り込む奴を、槍の石突にて、内兜を突き捲つたから、アツと叫んで馬から落ちる、残り一人が徒歩立ちとなり、八郎の足を掴んで引落さんとする奴を、エツと鎧を以つて蹴り立てたから、鼻柱を健か蹴付けた、アツと云つて夫れへ倒れる、其の働き實に人間業とは相見へんから誰一人近寄るものもない、四人が遣られると、モウ遮る敵もないから、八郎得たりと丹羽五郎

左衛門に突いてかゝつた五郎左衛門素より萬夫不當の勇將であるから大いに怒つて陣太刀抜き鬚して渡り合ひ上段下段と打ち合つた八郎焦つて突き出した槍先を五郎左衛門ヒラリと引外しサツと突き入り、ヤツとばかり、八郎の槍の柄を斜にサツと切り落した、八郎大いに怒つて、太刀抜き放し、電光の如くに切りつけたのが、五郎左衛門の乗つた馬の首を血煙立つて割りつけた、馬こそ災難、ヒ、ン忽ち屏風を返へすが如くに倒れたから流石の五郎左衛門も真逆標に落馬した、八郎得たりと馬より飛び降り五郎左衛門の首を刎れんと近寄る處へ丹羽家の郎黨八方より驅けつけ八郎に打つてかゝる、其の間に五郎左衛門は飛び起きて又もや八郎に斬つてかゝつた、之れが爲め八郎は五郎左衛門を打取る事が出来なかつた、素より先方は豪勇拔群の大將、此方は十三歳の初陣、長く遣つて居れば八郎の身が危い八郎は五郎左衛門と又先を合せ、チャン／＼と遣り合つて居たが、何んと思つたか、丹羽五郎左衛門、太刀を引外してサツと

五六間飛び退り、五ツヤア汝は驚き入つた度胸だ、かくいふ丹羽五郎左衛門之れ迄一騎打をして敵に負けた事はない、其方は若年ながら我を落馬させたのは感ずるに餘りあり、今日は之れにて物別れといたさん、重ねて英氣を養ひ参れ、者共引けッ……丹羽五郎左衛門も八郎の勇氣に感じて兵を納めた、八郎長追ひせずドツと鬨を造つて引揚げて来た、八郎は父六郎左衛門の前に出で、討取つた首を百五十五級といふものを差し出した、其の他雑兵は斬捨てにして首を取るに及ばぬから、其の儘にしたのだから、幾等人殺したか分らん、父の六郎左衛門も我子の初陣の働きに感心して、六其方の初陣の働きは天晴である……と賞めて居る折しも、遙にバツと黒烟が城の方で立ち昇つた、處へ一人の注進は驅けつけ注進御注進、殘念ながら織田方の木下藤吉郎、明智十兵衛の同勢、城の搦手より山を越へて不意に攻めかかり、到頭落城、城は只今燃へ上りました、之れを聞くと六郎左衛門は躍り上つて驚いた、六失策つたり、搦

手は御大將自ら守つて居られるゆへ、大丈夫と思つたが不覺の基、大手の敵を首尾よく破つても、搦手を破られては、何の役にも立たぬ、八郎續けッ……六郎左衛門はヒラリと馬に跨り狂氣の如くなつて駆け出した、續いて八郎も疾風の如く飛んで行、其他秋月の郎黨は我もくと主人の後を追ふて一目散、然るに六郎左衛門が城へ驅けつけて見ると、モウ織田勢の爲め搦手より城には火をつけられ炎々と燃へ上る火炎は凄まじく、第二の注進の言葉に仍れば、大將六角入道承禎は、既に火中に切腹したと聞くと、六郎左衛門は落膽して五ツア、殘念、搦手に油断ありし爲め勝軍を負けとしたが、此の上は一働きして我が武勇の程を敵に示し其上にて殿の御跡を慕はん、コレ八郎汝も聞く通りである近江源氏の末流たる御名家も今は滅亡の外はない、此の上は討死の覺悟である、其方は未だ年も若い、一先づ此の處を斬り抜け、我が家を興せよ、八御父上、私もお供がいたしたいと存じとす、父黙れ父は否でも應でも殿の御供せ

八郎は突つ立ち上り、バラ／＼と廊下に飛び出し屋根に這つて居る松の木傳ふて大屋根へ飛び上り、佶と向ふを見渡すと、翻翻と風に靡くは織田家の紋定打つたる旗馬印と相見へる、八郎は地團太踏んで口惜しがり八ッワームモウ織田が攻め込んだか、父上も今頃は御切腹であらう此の上は此の場を立ちのき主家の敵織田上總介信長一太刀なりと恨まいて置くものか」と凜然と揮ひ立つた、モウ泣いては居ない、素早く屋敷へ降り、佛間に入り込み、母の死骸を取り上げ血腫をペロ／＼甜めて仕舞つて八ッ之れぞ母上の紀念の品、父上より授かつた此の雲切丸の大小一對、之れを守刀として名を揚げ家を興さねばならぬと腰に帶して、佛壇の下を開けると有金は五百兩ほどある、夫れを肌につけてチヤンと身仕度した、ソロ／＼臺所へ行つて飯櫃取り出し、膳に向つてムシ／＼遣り出す八ッ腹が減つては戦が出来ぬ……云ひつ、掻き込んで居る、貝鉦陣太鼓の音は次第に近づく、夫れでも八郎は驚かない、人間も斯うなつたら強い

漸々飯を食つて仕舞ふと、サア之れで宜い、一番行きがけの駄賃に暴れ抜いてやらう、假令織田勢何萬騎來るとも蹴散らして落さねばならぬ……と身仕度甲斐／＼しくスツカリ出来上ると母の死骸は庭前の石燈籠の根元に埋め其の上へ石を据へ暫らく念佛を唱へ八ッ母様お淋しからうが、之れでお別れでございませす、何うか父上のお側へ早く參つて下さいませし、私は名を揚げ、家を興して立派に秋月家を立て、行きます、又一太刀なりとお家の敵織田信長を恨んでやりますから、御安心下さいませし……と生ける人に物云ふ如く口説き立てスツクと立ち上つて廊下の障子を外し薪を澤山持つて来て夫れに火をつけると炎々たる火焰は天井へ燃へ上る八ッア、ア此の家で生れたのだが、自分が焼ち去らねばならぬとは、情けない事ぢや……とハラ／＼と落涙して居る折柄、アア／＼と関の聲、駒の嘶きさへ聞へるから八郎はキツと氣を取り直し大身の槍を小脇に抱き込み支關に乗り捨てた駒にヒラリ飛び乗るとモウ奥座敷の方は一面

の火となつて炎々と黒烟が舞ひ上る、夫れを見た八郎は、名残り惜氣に見返り、漸々門前に出で、東の方を倍と見ると旗馬印は林の如く大軍が雲霞の如く繰り込んで来る様子、城下のものはモウ逃げ去つて人の子一匹も姿は見へない、彼方此方に黒烟が舞ひ上つて、物凄きこと云はん方もない、遙に南の方城の天守を見上げると之れ又火炎は渦巻き立つて今や落城と相見へる、八郎は馬上に悄然として「ア、ア、お父上はアノ火炎の中で御切腹なされたであらうか、夫れを思ふと立ち去りともない、斯んなにいられたも織田信長の爲である、ヤ、ヤか此の儘置くものかと、無念の涙をバラバラと流しながら暫らく立ち竦んで居たが、貝鉦陣太鼓の音に、又もや倍と氣を取り直し「ア、オ、左様ぢや泣いて居る場合ではない、此の上は飽迄此處を落ち延びればならぬ」と我と我が心を勵まし駒の平首をバタ／＼と叩きながら「ア、コレ鹿毛よお前が可愛がつて貰つて居たお父様は死なれた今日は朝から働いてくれたが、モウ一遍ウンと氣張つ

てくれ、その後は遊んで喰へるやうにしてやる、頼むぞ鹿毛よ……」云ふと其の言葉が通じたか、馬はヒ、ーンと嘶いて、前足で大地をトウ／＼と叩く、八郎は勇み立ち「ア、ア、此の上は敵に一泡吹かせてくれん……」とキリ、と手綱を絞ると、馬はヒ、ンタツ／＼と駈け出した、一丁ばかり来て、倍と向ふを見ると織田の三陣明智十兵衛の率ゆる大軍は十重二十重に充滿して居る、八郎は槍を構へて「ア、ア、此の上は突き破つて通つてくれん……」と馬に一鞭くれて、サツと大軍の眞只中に驅け込んだ、△「ソレソレ敵が一騎迷い込んだぞ、遣付ける……」四方より追取り圍んで討つてかゝる、八郎は槍を抜いて、四角八面に當りながら「ア、ア、ア、敵軍確に聞け我こそは佐々木六角承禰入道の家來に於いて侍大將を勤めたる、秋月六郎左衛門の一人八郎なり、一人二人は面倒だ束になつてかゝつて来い……」と大言を拂つて勢ひよく突き込んだ、△「ヤ、ツサテは此嬢が柴田勢、丹羽勢を破つた小童よな、ソレ生捕れい」と

四方より取り圍んだ八郎は少しも屈せず槍を捻つて、突き立て、縦横無盡に暴れ立てる、見る／＼死骸は積んで山をなし、血は流れて川をなす、明智の軍勢も八郎の槍先に當り兼ね、サツと路を開いたから、八郎は一目散、疾風の如く乗り抜けたが向ふを見ると又一隊の軍勢が充滿して居る、見ると千成瓢の旗印は、之れぞ木下藤吉郎秀吉の同勢と相見へた、八郎はモウ相手は撰ぶ處でないから、サツと突つ込むと斯は如何に軍勢は手向ひもせず、サツと路を開いたから八郎も少々拍子抜けがしたが木下と云へば織田の器量人如何なる計略あらんも知れずと、油断なく身構へながら、メン／＼突き進む處が誰あつて抵抗する者が無い、八郎オヤツ明智の勢は無闇に打つてかゝつたが、木下勢は誰一人向つて来ない、之れは變だぞ、ヤ、アツ我こそは秋月六郎左衛門の倅八郎なり、かゝれ／＼……」名乗つて見たが、知らぬ顔をして居る八郎ハ、ア分つた木下といふ大將は器量人だから、乃公を落してくれるのだな……」と始め

て悟つたから忝けないも、口の中眞一文字に馬を乗り立て、漸々城下を後に、山手をさして駆けつけて来た、ヤレ安心と思ふ處へ忽然と一隊の人馬現はれ金の御幣の旗印を先に立て、△ソレ来たぞ、彼奴逃す」と口々に罵り立て四方よりヒシ／＼と取りつめた、八郎ヨク／＼見ると之れぞ柴田勝家の弟權八郎勝久の大軍だから、ハツと驚いた、今は八郎も疲れ切つて居る處へ新手に來られては堪つたものでない、八郎も今は之れ迄悉れる丈け暴れ散してくれんと馬の頭を立て直した折しもあれ、何處よりか一人の老人忽然と現はれ、八郎の馬前に立ち塞がり老八郎心配するな、乃公に續けい……」と云ふより早く馬の轡を取つて先に立つ、柴田勢は夫れと見ると、老人に向つて打つてかゝる老人は面倒なりと、口中に何か唱へると、斯は如何に、空中より忽ち黒雲舞ひ下り四方一面は朦々として咫尺を辨ぜず鼻を摘まれても分らなくなつた、軍兵はダイ／＼騒ぎ立つばかり、其の隙に老人は馬を急がせ、難なく圍みを衝いて何

處こともなく姿すがたは見みへなくなつた、漸やうやく雲くもは晴はれて柴田しばたの軍兵ぐんへいはヨク／＼見みると若武士わかぶしの姿すがたも老人らうじんも早はやや何處いづこへ行いつたかサツパリ分わからない、△ヨヤ取り逃にがしたか残念ざんねん／＼……地團ぢだん太踏たふんでも始はじまらない、此方こなた秋月あきづき八郎やうらうは夢ゆめに夢見ゆめみる心地こゝろ、老人らうじんの爲ためめに救すくひ出だされ歩あつて來きたのが、何んといふ處ところか分わからないが、老人らうじんは、ニコ／＼として老らうサア、八郎やうらう向むかふに見みへる小屋こやが乃公おれの住居すまひだ、モウ追手おしもか、らぬ、觀音寺くわんおんじから此處こゝ迄までは十里じゆりや二十里にじゆりではない、五六十里ごじゆりも離はなれて居ゐる……八郎やうらうへん五六十里ごじゆり、先刻さきまに觀音寺くわんおんじを落おちたと思おもひましたが、何日いつの間まにそんなに歩あいたので……老らうアツハ、八郎やうらう、其その不審ふしんは尤もとである乃公おれが一つクシヤ／＼と口中くちうちうに呪文じゆもんを唱となへると、五里ごりや十里じゆりは瞬また／＼間に來きる、モウ夜よが明あける、夜通よどほし歩あいて此處こゝ迄まで來きたのだ、此處こゝは伊賀いがの名張なはりぢや八郎やうらうエツ伊賀いがの名張なはり、オヤ／＼／＼、シテ叔父おぢさんは……老らう乃公おれか、乃公おれは佐々木家ささぎけには因縁えんこがあるものぢや、若い時分わかじぶんには佐々木家ささぎけに仕つかへて居ゐた百々地ももぢ三太夫さいだいふと

いふものだ……八郎やうらうも父ちち六郎左衛門ろくざゑもんから、三太夫さいだいふの名なは聞きいて居ゐるから八郎やうらう夫それでは叔父おぢさんが、アノ忍術にんじゆつ使つかいの……三才さいオ、左様さようぢや伊賀流いがりうの忍術にんじゆつ使つかい百々地ももぢ三太夫さいだいふである、一夜いちやのうちうちに術じゆつを以もつつて此處こゝ迄まで連つれて來きたのぢや、其力そのちからは秋月あきづき六郎左衛門ろくざゑもんの悴せが／＼朝あさからの合戦あひせんに隨ま分ぶんヨク働はたらいた、初陣しよじんで以もつつて、アレ丈だけ巧名こうめいをしたものは日本にほんにマアあるまい、然しかし惜おしい事ことに夫それも水みづの泡あわとなつた、兩親りうしんには死しに別わかれ、獨ひとり身みとなつて可哀あはれ想さうだから、乃公おれが連つれて來きた、只今ただいま其方そのほうは十三才さいであるから五年ごねんの間あひだ我が手許てもとに居ゐれ、其その間あひだに忍術にんじゆつを十分ぶんじゆ仕込しこんでやる八郎やうらうハイ有難ありがたう存ぞんじます、然しかし叔父おぢさん、チヨイとお尋たづね申まします、柴田しばた勢せいを術じゆつで欺あざむき私わたしを助たすけ出だして下くださる貴公あなたが何どうして忍術にんじゆつで働はたらいて、佐々木家ささぎけの滅亡めつぼうを取りとめて下くださらぬ、之これを以もつつて見みても、忍術にんじゆつといふものはマア宜い加減かげんのものかと思おもひます三才さいアツハ、さう思おもふは無理むりもないが、佐々木家ささぎけは何どうしても滅亡めつぼうる運命うんめいに立たち到いたつて居ゐるのであるから、逆さかも我が術じゆつで

も黙目だ、大厦の覆へらんとする、ヨグ一木の支ふべきにあらず、ナカノ、以つて忍術位いで支へる事が出来るものか、それが出来る位なら、乃公は疾うの昔に大名になつて居るが世の中はさう巧く行くものでない、佐々木家は武運は盡きて滅びたのぢや、之れも天命、何うも仕方がない、兎に角貴様は我が手許に五年間居れ、忍術を譲つてやらう……」八郎も落人の身の上、之れ幸ひに百々地三太夫の言葉に従ひ、三太夫の草庵に足をとめる事になつた。

五 乃公の人相書を持つて居るぞ

佐々木家は全く滅亡したが、其の殘黨の詮議が厳しい、三太夫は八郎を手許に置いて、秋月を名乗らせては、都合が悪いから、雲切丸の名刀を持つて居るに因んで雲切八郎と名乗らせた、八郎の名は江州ばかりでなく、伊賀邊り迄響いて居る、何んしる織田家の鬼と呼ばれた柴田勝家の大軍を微塵に打ち砕いたと

いふのと、年が十三才で初陣であるといふのとで非常に名前が高かつた、織田信長はそうでもないが、柴田勝家は、十三才の小僧に打ち敗られ大分男振りを下げたから意恨が骨髓に徹して居る、飽迄秋月六郎差衛門の悴八郎を詮議し出して召捕れといふ觸を織田家の領内へ配布した處が當時伊賀國は筒井伊賀守順慶入道の領地であるから此處迄は觸も來なかつたが、織田家の名で以つて筒井家へ依頼して來た、佐々木家の侍大將秋月六郎左衛門の悴八郎十三才、右は戰場を落ちのびて行衛が不明になつたからイロ／＼詮議の處、伊賀國へ入り込んだ形跡がある、萬一其の土地に隠れ居る際は、召捕つて差送られたいと申して來た大將伊賀守は根が坊主上り一朝風雲に乗じて大名とはなつたが、夫れほど意地張りの強い大名ではない、後に山崎合戦で洞ヶ峠で日和見をやつた位であるから、今織田の勢が盛んだといふと、織田家から何を申込んで來ても宜しい承知と返答する廢せば宜いのにロザ／＼家來に命じて領内を詮議させる

處が此方百々地三太夫は筒井家から八郎の詮義に及んで居るといふ事を聞くと
 三「何うも油断がならぬ、八郎其方は餘り外へ出ないやうにするが宜からう、
 八「ハイ、私を詮義の爲め筒井家から人數が出てゐるといふ事でございませぬ、
 三「さうだ今日名主に逢つたら、さういふ話をして居た然し名主も其方が詮義
 の當人であるとは知らない様子である、ダカラ餘り外出するな八「ハイ心得
 ました……八郎は心得ましたと返事はしたが昨日からは今日日に二度遊びに出
 て居たのが、三度出るやうになる、大手を振つて歩き廻る八「一つ順慶入道の
 手のものに出遇つて見たいものだ、思ひ知らせしてくれる、斯んな事を云つて歩
 き廻る、百々地三太夫は之れを見て、三「イヤ何うも、度胸の宜い奴だな、アレ
 なら五人や八人の人數に出遇つた處でナカ／＼召捕られる心配はあるまい……
 安心して居る、三太夫は夜に入ると忍術を仕込む、忍術の稽古も武藝同様、鍛
 錬をせない事には出来るものでない、八郎は三太夫に就いて熱心に習ふ、少々

出来出すと一遍遣つて見たいといふ氣になる、生兵法は大怪我の基、武術なぞ
 は、少し嚙つて來ると、直に天狗になるものだ、八郎も夫れだ、八「イヤ一つ
 術を行つて見たいな、待て／＼「アラ／＼歩き廻る、併し町人や百姓に向つて
 忍術なぞを行つては、耻辱であるから強さうな、武士は居ないかと探し廻る、
 或日の事、八郎、名張の町へ出て來て、アラ／＼歩いて居ると向ふより四人連
 の武士が出て來る、旅装束で目付のギヨロ／＼して居る處なぞは何となく物凄
 だから八「イヤ／＼一つ此奴に打つ付かつて、喧嘩をやる、術で驚かす、イヤ
 之れ／＼……「思ひながらアラ／＼と近寄る處が先方の武士は懷中から何か
 持ち出し、夫れを眺めては八郎の顔と見比べ／＼歩いて來る、四人はブツ／＼
 話し合つて居るから八「ハテナ此奴變だぞ、何うやら乃公の人相書を持って居
 るらしい、ヨシ／＼そいふ奴なら猶更ら都合が宜い、一つ打つ付かつてやら
 う……「大膽不敵の八郎は、近寄つたと思ふと、一人の奴にドンと突き當つて

置いて先方の咎めないうちに八「無禮者奴ッ」怒鳴りつけて、ドンと突き捲つた、ヨロ／＼と倒れた、後の三人の奴は大いに怒つて△「ウメ此奴若年者の分際として不埒千萬一體何者だッ」八「アツハ、乃公か乃公は貴様等が尋ねて居る秋月八郎だ△「エツサテは汝が佐々木の殘黨の秋月八郎か此奴飛んで火に入る夏の虫だ、ソレツ召捕れッ……」四人はバラ／＼と飛びかゝつた、八郎は何か口中に唱へながら砂を握んでヤツと投げると、斯は如何に、砂は忽ち澤山の蜂となり、ブン／＼と四人の顔から頭、手足の嫌なく、飛びかゝつてチヨイ／＼刺す△「アイタ……ウーム／＼此奴人を馬鹿にして居やアがる……」八郎を生捕る處か蜂貴めに遇つて大騒をやつて居る處を八郎は躍りかゝつて四人の首筋チヨイ／＼と引握み、傍への川中へザンブ／＼と投げ込む、四人はアプ／＼悶へて居る間に八郎はプイと其の場を逃げ出した八「アツハ、面白／＼蜂形變と云つて蜂を出す術だ、四人の奴は今頃青くなつて居るで

あらう……」八郎はノシ／＼草庵へ戻つて来る、處が三太夫は八郎の様子に目をつけて居たが三「八郎お前は何か途中でやつたな八「お師匠さん分りますか三「分る何うも其方嬉しうな顔をして居る處を見ると途中で誰かと喧嘩をして奥の手を出したな八「アツハ、仰せの通りでございます三「コリヤ八郎アツハ、仰せの通りとは何んといふ事を申す馬鹿奴が、忍術を悉く手に入れる迄は無茶な事をしてはいけんと思つて申してあるではないか八「仰せではございませんが私を詮議して居る四人の奴に出合ひました、私も昵として居れば召捕られますゆへ、手向ひをいたしました三「イヤ違ふであらう、其方が先方へ手向ひしたのではないか八「オヤ／＼、お師匠様はヨリ御存知で……三「知れた事を云へ夫れ位いの事はヨク存知て居る、其方は大切の身體、夫れゆへ萬一の事があつてはならないと思つて乃公は其方が出て行く毎に何日も密につけて居る……といふのは警戒して居るのだ、夫れ位い乃公は其方の身の上に氣をつけ

て居る今日も四人の武士に打つ付かつて突き捲り、夫れから峰を出したてはな
 いか八「ウームイヤ恐れ入りました 三「恐れ居る處はない、其方は秋月の家名
 を揚ければならぬ大切の身の上、父の六郎左衛門と乃公とは仲の好い友人であ
 つたから、其の友人の子たる貴様を何うかして立派なものにしてやらうといふ
 考へで居るのだ、夫れに肝心の貴様が力を頼んで無謀な事をいたすといふと乃
 公の心盡しも水の泡となる道理だ、以後は斯様な事はならん氣をつける……」
 叱られて八郎も頭を掻いて居る、之れ丈け肩を入れて居る三太夫が、熱心に試
 込むから腕前はメキ／＼と上達して五年のうちには忍術の極意を悉く手に入
 れ今は師匠の三太夫と術比べに及んでも決して負けない腕前となつて来た 三「
 サア之れで宜い、モウ其方は十八才、天下を漫遊しても差支へない、秋月の家
 名を興せ、尙ほ又善を助け悪を懲し、人の爲めに盡すが肝心ぢや、之れを忘れ
 るな 八「心得て居ります 三「夫れから織田家に憚りがあるから其の名刀に因ん

で雲切といふ姓を名乗れ、宜いか 八「長まりました……」五年の間三太夫の許
 に居たが八郎が携へて居た金子は少とも減つて居ない、父の肌付の金二百兩と
 屋敷にあつた金五百兩、總體で七百兩持つて居るから大丈夫處が八郎は父の愛
 して居る馬に乗つて逃げ出したので其の馬は今でも三太夫の手許に飼つてある
 八郎諸國漫遊をするに付ては馬を連れて歩く譯に行かん、其處で三太夫に頼ん
 で 八「お師匠様此の馬を八幡様へ奉納して一生飼殺しにして貰ひたう存じます
 三「成程尤である夫ではといふので名張の町端れにある八幡宮の神主に相談す
 ると快よく承知をしてくれた、八郎は大いに喜び金子二百兩を別に飼馬料とし
 て寄進した、馬も持参金つきで引受けて貰ふのだから幸福、神主は直様馬小屋
 を建て夫れへ馬を入れた、八郎は夫れを見届けると 八「モウ心にかゝる事はな
 い此の上は一番尾州に乗り込み清洲城内へ忍び込み織田信長を一太刀恨むかア
 ハ宜くば我が手にかけて懸賞を嗜してくれん……」と師匠百々地三太夫に別れ

て名張を立ちのきノシノ江州觀音寺に入り込み父や母の墓に參詣した上一直線に尾張へさして乗り込んで来た、佐々木家が滅びて五年の間に、織田信長は濃州を手に入れ、伊勢を従へ、江州の淺井を滅ぼし、越前の朝倉を略して、其の勢ひ破竹の如く今や岐阜金華山の城を本城として、清洲安土を支城となし、威を八方に揮ひ京都に出で、足利將軍を押し込め、朝廷の守護職として櫛威赫々飛ぶ鳥落す威勢になつて居る、八郎は之れを見るにつけても八〇ア、ア残念ぢや五ヶ年以前の合戦に佐々木が勝つたら今の織田家のやうに、朝廷の守護職となつて居らうものを、サスレばお父上なども一國一城の主となつて居られるにア、惜しい事をした、夫れにしても金華山の城迄行かれば織田信長が居ない一番岐阜へ乗り込んでやらうと、又もや岐阜へ乗り込み、金華山の城下へさして歩いて来た、尾張屋甚平といふ宿に泊り密に様子を探ると信長公は本城といふ事が分つた八〇ヨ一シ機會を待つて一番遣付けてやらう主家の仇、父の敵で

ある、假令出來ない迄も一太刀なりと恨まればならぬと覺悟をして夫れとなつて附け覗つて居る、處が何うして、機會がない、度々城内へも忍び込んだのであつたが警固が嚴重なものと信長公の枕刀が一天の大君より頂いた小烏丸といふ寶刀であるから、其の奇特で何うしても近寄れない、雲切八郎残念に思つて八〇何うも残念な事だ忍術で次の間迄は忍び込む事が出来るが肝心の信長の側へ近よる事が出來ないとは情けない、此の上は苦肉の計略を以つて、飽迄遣付ければならぬと根氣よく附け覗つて居る然るに或日の事、織田右大臣信長、狩倉の催うしとの觸れ出し、早くも此の事を聞いた八郎は雀躍りして打ち喜び八〇ヨ一シ狩倉とは勿毛の幸ひ此の機會を逸しては又と再び討つ機會はない、先廻りして待ち受けねばならぬと宿を立つてドシノ狩倉の場處各務ヶ原へと乗り込んで来た、此の原は其の時分狐が澤山居た、信長公狐狩りをやらうといふ考へイヨ一其の當日となると岐阜城内より織田右大臣信長公人數を従へ正

々堂々と繰り出し各務ヶ原へと乗り込み一先づ長福寺といふ寺院を旅館と定め其の夜は當寺に宿泊イヨ／＼翌早天より狩倉といふ事に決定して其の準備に及んで居る。

六 雲切八郎見参

早くも此の事を探り知つた雲切八郎は、勇み立つて八ヨシ今夜一番寺へ乗り込んで見やう夫れでいけば明日狩倉の場處で不意に飛び出して遣付ける迄だと二通りに計略を廻らし夜に入るを待つてノシ／＼と長福寺に出かけて見ると流石は織田右大臣の旅館と定めてある丈けあつて實に何うも警戒が嚴重だ、普通の者であつたら逆もよりつけない處だが雲切八郎は忍術の心得があるから一向氣平だノシ／＼長福寺の裏手より寺内へ忍び込んだ素より姿は消して居る、警戒嚴重な中をノシ／＼奥へ入り込む、何んしろ此の時分は柴田勝家は北陸導

を征伐として兵を勸め、羽柴筑前守は近畿中國征伐として乗り出し、其他の大名も夫々各地に出陣して居るから、信長公の手許に居る大名は到つて稀だ、狩倉に供して來て居るのは、多く近習や信長公の櫛本ばかりだ、八郎は今夜こそは信長公の命を縮めてくれんものと、決心の臍を固めて、イヨ／＼奥深く入り込んで見ると向ふに見へるが信長公の寢處らしい八ヨシ、此處迄來れば大丈夫だ……と、イヨ／＼勇氣を勵まして寢處の次の間迄歩つて來た見ると宿直番が四人控へて居る中にはお側去らずと呼ばれた森蘭丸が居る八ヨシ、此奴等を眠らして置けば大丈夫、寢處に入り込む事が出来る」と、大いに喜んで口中に呪文を唱へ九字を切ると三人はコクリ／＼と遣り出したが蘭丸ばかりは何うしても眠らないコクリ／＼と遣り出したと思ふとハツと驚きパツチリ目を開けて四邊を見廻す八ヨシ、ア此奴は容易ならん奴だわい、ヨシ一番當て殺してやらうと思つたのが八郎の不覺ソツと窺いよつて蘭丸の脾腹をヤツと中てや

うとする途端蘭丸が何うした事が腕をウソと拂つたから八郎の拳が其の腕へド
ンと中つた森蘭丸はハッとして驚き振り向いて見ると何の事もない三人は少々放れ
てコクリ〜と遣つて居る蘭「ハテナ今此の腕へ何か當つたやうであつたが一
向當るやうなものも、何も居ないのに……不思議であるわい……」と蘭丸は兩
眼見開いてシロ〜見廻して居たが眠りの術を行なつて居るから何うしても眠
くなる蘭「ウーム毎夜宿直番を勤めて居ても斯んなに眠い事はない夫れに何ぞ
や今夜に限つて……ウーム……」怪しみながら果ては小柄を引抜き逆手に取つ
て膝に立てコクリ遣ると、膝へ突き立つやうにして我慢して、之れを見た八郎
は感心した八「イヤ何うも年は若いが感心な奴だ、之れが有名な忠義者の森蘭
丸といふ奴であらう、此奴さへ遣付けたら後の三人は何の造作もないと思つた
八郎はズシリ太刀を引抜いた其の太刀の光りが燈火に映じてキラリと光つたか
ら蘭丸の目へヒカ〜と來た、蘭丸はハッと驚きシロ〜見廻すと霧の如く烟

の如く異様の姿が目の前に現はれて居るから蘭「ヤ、ツ曲者ツ……」大喝一聲
突つ立ち上つたと思ふと朦朧とした影を目がけて抱きついた八「失策つたッ」
とハッと驚いた、途端に術が破れたから、八郎の本體がアリ〜と現はれた、
蘭「ヤ、ツイヨ〜曲者御參なれ……」蘭丸力に任せて捻じ伏せやうとする、
八郎は蘭丸に羽がい締め合はされて居るから太刀を揮ふ事が出来ない八「ウ
ーム残念……」身を藻掻いてゐる、他の三人も此の騒ぎに驚いてムク〜立ち
上つた迄は宜かつたが今迄眠つて居たから、目をこすり〜、縁に見もしない
で、大周章に慌て、蘭丸の背後から抱きつく兩足に一人づ、搦みつき○「此
ン畜生……」曲者観念しろ……」之には蘭丸も驚いた、八郎に抱き付いて居る
のは宜いが、背後から兩足を掴まれる丁度四人を引受けて居るやうなものだか
ら蘭「ウーム人違いだ、違ふ〜、待て〜……」叫ぶと雖も三人はイヨ〜
死噛みつき△「ウーム〜」此の野郎巧く瞞着して逃げやうとて其の手は喰はぬ

ぞ、ソレツ引倒せ〜…三人が懸命に捻じ伏せやうとする、蘭丸は堪らな
い蘭丸「ウーム〜」違ふ〜…云つたが三人の耳には入らない、△「ウーム」此
の野郎…足へ噛みつく奴がある、蘭丸は弱つて仕舞つた、痛いから、思は
す手を放した、八郎は得たりとばかりヤツと蘭丸に斬りつけると蘭丸も左るも
のヒラリ懸してから背後から組みついて居て奴の頭をサツと斬つた、△「キサツ
ウ、ン〜」ドタリ打つ倒れる、蘭丸は背後の奴が倒れたから兩足に組みついた
奴を振り飛ばし、ヒラリ〜と懸しながら、八郎に飛びつかんとする、太刀は
あるのだから、夫れを取る間がないから無手だ、八郎はイヨ〜と斬り込む、二人
の奴も此の時漸々分つて、△「オヤツ此奴が曲者だ〜」ソレツ左右より組みつ
いて来る奴を八「エ、イ何をツ…」右手に拂つた一刀の爲め又一人は斬り伏せ
られた、返へす刀に左手の一人も遣付けた、八「サア来い一騎打ちだ、蘭丸、合
點だ、云ふにや及ぶ…」此の時はモウ、一丸もモウ太刀を取つて居る、ズラ

り抜き放して、ヤツと斬りかゝる、チャチーン〜火花を散らして斬り結ぶ、
森蘭丸も音に聞へた豪のもの、願せず撓まず、チャチャ〜と遣り合つて居る
然るに奥の間の信長公は、先聲より目を覺し、枕刀を引つけ昵と様子を窺つ
て居たが、信「蘭丸負けるな、曲者を斬り倒せ、蘭丸心得ました…」勇氣盛んに
斬り込んで来て、八郎は失策つた、△「シヤ腹で暴れては居るもの、七分
の弱味がある、夫れに引かへ蘭丸は、御大将信長公が襖を開けて眺めて居るか
ら夫れ丈け強味がある、又先鋭く斬り込んで来る、チャチーン〜、此處を先
途と遣合つて居る八郎は、信長公の顔を見ると憤然として揮ひ立ち、八「サーツ
此の大将の爲めに乃公の御主君まつた父上母様も生害せられたのだ、何うかし
て一太刀恨みたいものだ」と精神を勵まし電光の如くに斬り立て〜今迄は後
退りをして居たが不意に勇氣を盛り返し無二無三に斬りかゝり〜、蘭丸相手
に闘いながら、素早く小柄を抜き取りヤツとばかり、信長公目がけて投げつけ

た信長公ハツと驚き躲しはしたが不意だから肩口へ少々怪我をした信「ヤア不
 敵の曲者奴、予に向つて無禮であらう、蘭丸飽迄召捕れッ……」烈火の如き怒
 り聲、蘭丸はイヨ／＼烈しく斬つてかゝる、八郎は闘いながらヨク／＼見ると
 信長公の白い衣物が朱に染つて居るから「サテハ、肩口へ少々でも怪我をさ
 せたな、まだ氣に喰はぬが之れで我慢をしてやる、アイヤ蘭丸、今夜は乃公の
 不覺だ、重ねて出合つた時信長公の首級は申し受ける、乃公は佐々木六角入道
 の家來秋月六郎左衛門の倅八郎である、ヨク名前を覺へて置け……」と云ひさ
 ま引外して、バツと姿を消して仕舞つた蘭丸は失策つたりと、地團太踏んだが
 モウ其の邊には姿も見へない蘭「残念打ち洩したか……」此の時はモウ外の家
 來達も澤山出て來て信長公の周圍を警固して居るから、其の家來が八方に手分
 して探し廻る、此方信長公は、傷口の手當をしたが、別段太した事もない、夫
 れでも怒り猶已まず信「ウゝ予が佐々木家を滅ぼしたるは之れ戦國の慣いで

ある然るに彼れ八郎なるものは予を恨んで君父の仇となし、附け覗ふとは大膽
 不敵とや云はん、言語同斷とやいはん飽迄詮義いたし召捕つて予が面前に引け
 よ……」以ての外の立腹、蘭丸はヨク召捕らなかつた爲め恐縮して沙汰を待つ
 て居ると之れは氣に入りだから、別段の咎めもない、翌日が狩倉であるに、其
 の前夜此んな椿事が出来したのであるから、中止して岐阜へ引揚げるかと思ひ
 の外殊の外の大名家ナカ／＼夫れ位いでは怯まない、老臣達はサマ／＼諫めて
 ○「斯る場合御見合せに相成られたが宜しからんと存じます」と云つたが信長公
 はイツカナ聞き入れず信「黙れ名もない曲者が現はれたからと申して折角出張
 した狩倉を中止に及んでは此の信長の威勢衰へたるに似たり、是非／＼狩倉を
 催うさんと重ねて申すな」ナカ／＼一旦云ひ出したら聞き入れる氣遣いはない
 翌早天となつた前日より夫々手配萬端が整へてあるから、信長公は長福寺を出
 馬イヨ／＼狩倉は始まつた、山と違つて野原であるから、狩倉は仕易い勢子が

ロイ／＼叫んで、四方より叫り立てる、夫れはサテ置き此方雲切八郎は、一旦長福寺を逃げ出したが、八待てよ相手が信長の事だから明日の狩倉は決して中止する氣遣いはない、丁度幸ひである、何處から隠れて居て、今度は首尾よく信長を遣付けて呉れん」と不敵にも再び思ひ立つて密に各ヶ原に先廻り、原中の萱芒の茂つた中に隠れ込み、今や來れと待ち受けて居る斯る事と知るや知らずや織田の同勢は勢子を勵まし狩り立て／＼逃げ出す狐は小口から射立てる突き伏せる信長公も夫れを見て面白き事に思ひ自ら馬を驅らせ弓に矢を番ひながら、ヒュー／＼射立てる、丁度正午迄に、百匹以上も射取り以下の獲物をあつたから、信長公も上機嫌、一旦午飯を済した上、又もや狩り立てる事となつた處が正午迄と違つて、今度はサツパリ得物が無い、信長公馬を乗り廻して居たが一向狐が出て來ないから少々、ザレ氣味となつて來て無闇に乗り立て／＼只獨り原中の眞只中へ驅け込んで來た、萱芒が馬の脊丈けほどもあるのだから

馬はヒヨイ／＼夫れを飛び越へてズン／＼行く、スルト不意に足許から一匹の白狐が飛び出した夫れと見た信長公は、好き得物御參なれと、弓に矢番ひヤツと射らんとすると、白狐は何うした事が不意に振り向き手を合し腹を押へて拜む信「アツハ、此奴腹が大きい様子では、孕んで居ると見へて、手を拜むのは助けてくれといふのであらう、折角目にとゞまつた白狐助けて堪るものか射取つて者共に誇つてやらう」と豪氣の大將だから今や矢を切て放たんとする一刹那又もや横合よりバツと飛び出したものがある、信長公狐かと思つてヨク／＼見ると豈に圖らんや狐にはあらで人間、然も昨夜長福寺を荒した曲者であるから、流石の信長公もアツと驚きながらも其處は利かぬ氣の大將だから、弓投げ捨て、ズラリ太刀引抜き信「サア推參なり曲者奴ツ……」云ふより早く斬りつける曲者はいふ迄もなく雲切八郎だ、ヒラリ躲しながら、チャチーン受けとめて置いて「ハヤア／＼織田信長、君父の仇覺悟せよツ昨夜は運よくも打ち

洩したが、今日は首級を貰ひ受けて雲切八郎見参〜……」尖先鋭く斬つてかゝる馬上と徒歩立ち信長公も千軍萬馬を駆け廻つた荒大将であるから、馬を乗り違へ〜、必死となつて働いて居る、八郎は隙間もなく斬りかゝつた、ナカ相手が一通りの大名でないから、却々容易には討てない、愚圖〜して大勢の家來が来ては大變だから、八郎氣が氣でなく、エイオ、と喚き叫んで斬り込み〜、サツと飛び込んだと思ふと、エーツ馬の前足を薙ぎ拂つた、ヒ、ーン馬は一聲の嘶きと共に前へ延つたから、信長公アツといふまもなく、之れ又馬上より投げ出され五六間先へコロ〜と轉がつた。

七 下郎の分際として推参なり

君父の仇は俱に天を戴かず、雲切八郎はシテ遣つたつと、乗りかゝり咄嗟一丈刀浴せかけんとする間一髪、何うした事か信長公の姿が見へなくなつたから、

八「オヤツ今此處に居たものが何處へ」と八郎驚いてヨク〜見ると、足許に古井戸がある、其の中で、チャブ〜水の音がするから昵と覗き込むと、果して信長公は井戸の中へ落ち込み、底に水が胸迄あるから、バチャ〜藻掻いて居るのだ、之れを見ると八郎は聲高く八「アイヤ信長公、モ早や命はなきものと思はれる、君父の仇覺悟召され……」呼はりながら飛び込まうとしたが底には信長公太刀を引抜いて持つて居るのだから飛び込む處を突かれたら夫れ迄だ八「イヤ待てよ飛び込むのは劍呑だ、夫れより一番此の上から大きい石を投げ込んでやらう、スルト信長公は押し潰されて仕舞ふ、オ、夫れ〜……」四邊を探し廻つたが、大きい石がない八「之れはいかん小さい石を投げ込んだ處で受ければ夫れ迄だ何處かに石はないか知ら……」無闇に探し廻つて居る、井戸の中の信長公は深く水が底と少々あるので、決句僥倖せ信「ヤア〜家來共予は此處に居るぞ曲者なり救へ〜……」怒鳴つては居るが井戸の中から怒鳴

あのだが内の聲がナカ／＼廣く聞へない、上の方へ聞へるばかりで、一向役に立たぬ、八郎は石を探し廻つたが、一向見當らぬ其のうちに大勢の鬨の聲足音が次第に近寄つて来るから氣が氣でない、彼方此方探して居ると先刻信長公が射やうとした、白狐が忽然と現はれ、ビヨ／＼頭を下げて手招きする、八郎は先刻の白狐か、八郎乃公が飛び出した爲め命が助かつたので何か乃公に恩返しをする氣と見へる、コレ白狐何んぢや何うしたのだ……近寄ると先に立つてビヨ／＼行く八郎従つて行くと、七八間の處に大きい石がある、其處へ來ると白狐は石を指さし、パツと芒の中へ飛び込んだ、八郎は石の在家を乃公に教へてくれたか、忝けない……八郎近寄つてウンと石を持ち上げド／＼井戸の側に戻つて來て、ヤツ投げ込まうとしたが、八郎待てよ假にも君父の仇、夫れに相手は名ある大將で、お負けに右大臣の位のある名ある人物皆殺せば仇討が出来たとは云へぬ、井戸の中へ落ち込んだのを、石を投げ込んで押し潰した

といはれては幾等仇討はしても餘り見つともない、イヤ何うも石で押し潰すのは宜くない……と云つて乃公が飛び込むのもいけぬ一旦此處へ出して改めて勝負を決し其の時討取つてこそ立派な仇討だ、お亡れになつたお殿様にしろ父上母様にしろ井戸の中へ石を投げ込んで押し潰し仇討をしたとあつては決して喜ばれる氣遣いはない、世間のものも又右大臣の御位のある人物を討つに餘り無作法だと誹りこそすれ賞める氣遣いはない、イヤ石もいけん……と云つて何うして引き上げやう……、待てよ斯ういふ時に忍術を以つてやれば造作ないのだが萬一信長公が持つて居る太刀が一天の大君より拜領の小烏丸であるといふと術は威徳に依つて破れる譯だが信長公ともあらう大將が狩倉に來るに眞逆大切な小烏丸は持つて來る氣遣ひはあるまい、ヨ一シ一番術で遣つて見やうと八郎氣がついたから、口中に呪文を唱へて九字を切ると姿がパツと消へた、消へると同時に井戸の中へ入り込む、底では信長公信「ヤア／＼家來共予は此の

井戸の中に落ち込んで居るぞ早く来て救へ〜、曲者あり〜……」怒鳴りながら太刀振り廻して居る、八郎は底へ降りたが刀が小烏丸でないから一向術は破れない、之れ幸ひと信長公をムツと引抱へた信「ヤ、ッ誰ぢや〜……」云つて居る間に難なく井戸を飛び出しパツと姿を現はし八「イザ信長尋常に勝負召され……」信長公もハツと驚いて信「ウゝムサテは井戸から出したのは汝よな、此の上は予が首刎れてくれん、下郎の分際として推参なり八「何をッ……」又もやチャチン〜と火花を散して遣り出した、然るに此方森蘭丸、力丸、坊丸の三人兄弟は信長公の行衛が分らなくなつたので氣が氣でない、縦横無盡に探し廻つて居ると、何處かでチャチン〜と太刀打ちの音がする、馬がヒ、ン〜と悲しげに嘶く聲がするから蘭「ヤ、ッ力丸坊丸、アノ太刀音は不思議である、狩倉に於いて太刀打ちの音がする氣遣いはない察する處昨夜の曲者が、或は我君様を又もや覗い奉り斬り込んで居るのかも知れんソレッ……」兄弟

三人はバラ〜と太刀音を傾りにして漸々歩つて来て見ると果して信長公は昨夜の曲者に出遇つて太刀打ちに及んで居るから蘭「ヤ、ッ我君様、蘭丸でござる力丸坊丸、坊丸も参りました……」と云ふ間も遅しバラ〜と三方より太刀抜きつれ曲者目がけて斬り込んだ、信長公はヤレ安心と太刀を外してホツと息、八郎は此の體を見ると、怒り心頭より發し八「ヤア又しても蘭丸奴邪覺立てするか汝ッ……」今度は蘭丸相手にチャチン〜と遣り出したが、何んしる蘭丸は森鬼武藏守の嫡子で年は十七才だが、武勇兩道に秀でた立派な若武士であるからナカ〜八郎も骨が折れる、お負に力丸十五才、坊丸十三才此の二人も未だ少年ではあるが兄に似て忠義無類、腕も大分出来るから左右より無闇に斬つてかゝる、八郎も蘭丸ばかりなら少しも恐れないが力丸と坊丸が邪覺になつて思ふやうには働けない……と云つて二人を斬り拂ふのは可哀想だから引外し〜蘭丸と鎧を削つて居る、信長公は睨と眺めて居たが信「ヤア蘭丸

丸、何故早く討取らぬ兄弟三人で只一人が討てぬかつ……」之れを聞くと蘭丸は氣を焦ち、エイオーと斬り込んで行く、其のうち大勢の勢子又は家來共は太刀音を聞きつけて駆けつけて来る、斯く多勢に困まれては如何に不敵の八郎も仕方がない「八ア、残念、信長公を救い出しながら、討てぬとは情けない、まだ討取る時節が来ないのであらう、モシ此の場で撃取られては大變だ、蚤にも喰はせぬ此の身體一先づ残念ながら、此の場を落ち延びる事にしやう」と決心の臍を固め、勇氣を勵まし、踏み込みく、ヤツとばかり蘭丸の太刀を叩き落し返へす刀に力丸の太刀も同じく發止と叩き落し坊丸が慌て、斬り込む處を之れ又パッション兄弟三人の太刀を叩き落して置いて乃公の腕前は之れ丈けあるぞといはぬばかりに八郎は腕前を見せつけて置いてパツと姿を隠して仕舞つた、蘭丸等兄弟はハツと驚き「蘭ヤ、ツ残念……」太刀を拾つて追かけやうとする、と信「ヤア待て蘭丸追ふに及ばぬ其方の太刀を叩き落し刺さへ力丸坊丸の太刀

も素早く叩き落す腕前若者ながら天晴の腕前予が井戸の中へ落ち込んだを上から石を投げ込まうとしたが夫れを廢して救ひ出し尋常に勝負を挑むとは武士道を辨へたる立派な心掛け其の志に免じて、見遁してやれよ」と流石は大將、三人を制しながら家來の率いて来た替馬に乗り信「狩倉も之に限り歸城いたさん……」と觸に出させ悠々と岐阜の城へ引揚げた、此方雲切八郎は各務ヶ原を逃げ出し一旦岐阜の宿へ歸つたが八「待てよ此の儘逃げ出しては面白くない、一番城内へ忍び込み置土産をして置いてやらう」と大膽不敵の雲切八郎は信長公の引揚げぬ間に城内へ忍び込み、平素信長公の居間と定まつて居る、書院へ入り込み屏風の白い處へさして、矢立取り出し、サラ〜と

君の仇父の敵の右大臣

ヤハか置くべき首の用心

斯う書いてパイと城内を飛び出し宿へ歸つて勘定済すと、其の儘岐阜の城下を出立して仕舞つた、處が信長公歸城をして書院へ這入つて見ると屏風に何か書いてある、之れを讀んだ信長公はブル／＼と身體を振はして信ウーム恐るべき奴は雲切八郎である、其の儘逃げ出したと思へばモウ城内へ忍び込んで居るヤア者共油斷いたすな……と城内を警戒させたか、モウ八郎は其處等に居るう筈がない、夫れは、サテ置き此方雲切八郎は岐阜の城下を立つて越前に乗り込む積りでブラ／＼歩つて来たのが、糸貫川の水源上で樽見といふ處だ此の邊は山又山の峰續きで、其の間の平地に家が三四十軒位ひある驛だから到つて淋しい、旅人などは滅多に来る處ではないから宿屋などは一軒もない、八郎樽見へ入り込んで来たが三四十軒の家を小口より尋ねたが泊めてくれない仕方がないから八斯ういふ時には一つ名主の處へ出かけて泊り込むに限る愚圖／＼云つたら一つ威しつけてやらう／＼とノシ／＼名主の家へ歩つて来た八頼む……

……男へエ何方で……八乃公は行き暮れて、難澁をして居るものであるが、何うか、一夜の宿を願ひたい男へエ折角でございますが、お断り申します、八コリヤ貴様は當家の主人が男イ、エ下男で……八下男……スルト奉公人ではないか、奉公人の僻に生意氣千萬ナセ主人に取次がない、貴様が勝手に断る奴があるか……早く主人に取次げ男オヤツ此の人は可笑しな事を云ひなさらる旦那が私にさう云つて居るから、断るのぢや私は此の村でも一番の力強よと云はれて居る寅藏といふものぢや、お前さん等が威かしたつて怯ともするのぢやアない、トットとお歸り／＼……片田舎のものは武士を見ても、何れ丈け強いものやら豪いものやら、そんな事を知らないから、一向恐れない八郎は憤とした突然猿臂を伸して、下男の胸倉ムツと搦んだ、寅藏は目を剝いて寅オヤツ、此ン畜生何をしやアがる強力の寅藏さんを知らねへかッ、云ひさま振り放さうとしたが、搦んだ腕は何うしても放れない、寅藏ワン／＼顔を七面鳥

のやうにして氣張つて居る八郎は可笑しくつて堪らない、ヤツト叫んでドシー
ン十八貫の寅藏を手玉に取つて犬轉る投げ、奥を目がけて投げ込むとメリッ
パリッ障子を突き破つて襖を蹴破つて座敷の入口の柱に顔をコッソーン、キッ
ッ、強力の寅藏目を眩して仕舞つた。

八 首が千切れる

此の物音を聞きつけて、奥からバラッ飛び出して来たのは名主の吉右衛門だ
吉「ヤ、ッ寅藏が目を眩して居る、何うした」大變、女房も飛び出す、作
男から下女迄で駆け出して介抱する、名主吉右衛門はヒヨイと見ると座敷にテ
レン座つて居る武士がある 吉「オヤッお前様は……」八「騒ぐな名主乃公は武者
修業者であるが、今夜當家に泊つてやるから有難く心得る 吉「ッヨ冗談ではご
さいません、お前さんが此の男を斯んなになさつたんでせう 八「ウムそれは乃

公が投げたのだが餘り弱いから、氣絶した騒ぐな乃公が蘇生させてやる、その
代り、今夜乃公を泊らせるか、何うぢや 吉「宜しうございます、お泊め申しま
せう、此の村には醫者はなし斯んなに目を眩しては困ります 八「ッシッ待て
ッ……」八郎立ち上つて寅藏の首筋チヨイと掴んで宙に提げた名主を始め一
同はアツと驚き目を見張つて見ると八郎は左手に拳骨を固めて寅藏の横面をキ
カーン、一つ殴りつけると、ウーム何うやら息を吹き返した 八「サア何うだ此
の通り正氣がついた 吉「オヤッ乱暴な事をして居る寅藏何うぢや氣がついた
か……」寅「ウームアイタ……首が千切れる」寅藏奴手足を藻掻いて居る、
八郎は漸々それを降し、ハヤ寅藏貴様は弱い寅の癖に、生意氣をいふから不
可ないマア、其の位にして勘辨してやる有難く心得る……」力自慢の寅藏青
くなつて悄氣込んで居る、名主は鄭重にして夕飯を出す、八郎は馳走になつて
早くより寝込んだ翌日目を覺して見ると雨がシトシト降つて居る 八「此れは朝

つた斯んな所に一寸とも居るのは嫌だがそれかと云つて、出立する事も出来ぬ
 コレ／＼主人、又厄介になるぞ吉「へい／＼」何うか御悠くりなさいまし、到つ
 て淋しい所で、一向お楽しみもございませぬが、何うか御勘辨をなさつて下さ
 いまし八「ナアニ乃公は出家と一所で、時としては樹下石上を宿とせればなら
 ぬから、家の内へ寝られるのは有難い位に思つて居る吉「別つ御馳走もござ
 いませぬが手作の酒を一杯差上げませう、酒を出して御馳走する、八郎酒は未
 だ深く遣らぬから、一合ばかり飲むと、ムツカリ酔つて仕舞つて八「モウ結構
 ぐ……」其の儘横になつてケウ／＼高軒で寝込む、日の暮前となると漸く目
 を覺した見ると山伏が来て居る山「イヤ之れは／＼お武家失禮をいたして居り
 ます、拙者は鎌倉不動院の門下當時近江國は八日市太郎坊を守る修験者大日坊
 満海と申すもの圖らず當地へ參つて行き暮れ只今當家の厄介になつた處でござ
 る八「成程左様でござるか 某も昨日より厄介になつて居る雲切八郎と申す者

でござる……」互いに挨拶する主人吉右衛門は酒肴を出す、満海と八郎は飲み
 始める、此の時山伏は勿體らしく主人に向ひ山「今夜厄介になつた、御禮とし
 て一つあらたかの不動様を拜まして進ぜやうか 吉「へエお持合せでございます
 か 満「イヤ持ち合はせる譯ではないが、今私が呪文を唱へて九字を切ると、忽
 ち不動の尊體が現はれるのぢや 吉「へん、そんな事が出来ますか 山「出来る
 併し滅多に斯ういふ事はしないのだから、何うか村人を大勢集めて来て貰ひた
 い、成べく大勢に拜ませたい 主「心得ました……」名主は下男の寅藏を村へ走
 らせた間もなくソロ／＼と村の者男女が出て来る十二疊の座敷と八疊の座敷へ
 押つ通して人がギツシリ詰つた山伏は正面に立つて山「私が呪文を唱へて九字
 を切ると忽ち不動明王の尊體がアリ／＼現はれる信心のお方は賽銭を上げなけ
 ればいけぬ……」大勢の中には不審の眉をよせて△「イヤ之れは面白いぜ、オ
 イ／＼皆の衆、聞きなかつたか、此の法印などが、不動様を出すそうだぜ、賽

錢を出しなさい、只ぢやア見られぬさうだから……△「ナニイ不動様を見せる
 つて此奴は成程面白いや、一つ拜ませて貰ほうぢやアねへか、ホラ賽銭だ○
 ホラ私も此處に置きますぜ……」と皆鳥目を夫れへ出し始める、八郎は之れを
 聞くと八「アツハ、此奴は喰はせものだな、何んな事をするのであらうと
 見て居ると山伏は水晶の念珠をザラ〜と揉み立て〜一生懸命に、聲を張り
 上げて、山「正面には五大明王、東方には降三世明王、西方には大威徳明王、南
 方には摩利夜及明王、北方には金剛夜及明王、中央には大日大聖不動明王……
 ……」と懸命に珠数を揉み立て〜祈つて居る、此の時雲切八郎は八「南無阿彌
 陀佛〜」と大きな聲で、まぜ返しを始めた、主人は之れを聞くと主「ア、
 之れは困つたな、悪くすると喧嘩になるわい」と心配して居る件の山伏は大汗
 流して一心不乱に祈念を凝したが、一向不動尊の姿が現はれて來ない、八郎は
 笑可しくなつたから八「アハ……」と思はず大聲で笑つた、スルト一人の男が、

○「エ、そらくお武家様ナンでお笑ひなさる八「何んでと云つてアシな馬鹿
 者に構つたら賽銭だけでも損になるではないか、アレは山伏ぢやアない山師ぢ
 や」と一文だつて一個くれるのは馬鹿〜しいではないか……」聞へよがしに云
 ふと山伏は聞き替めて、兩眼怒らせ日「ヤア其處な武家、貴様は若輩者の分際
 として不届千萬な奴ぢや、何が可笑しくつて笑つた八「フハ……可笑しい事が
 あるから笑つたのだ、夫れが悪いか山「此奴云はせて置けば不埒の武士奴、何
 が可笑しいか、其の譯を申せ、と祈りをやめ、肩肱怒らせ喰つてかゝつた、ス
 ルト大勢の百姓達は百「ソレ喧嘩だ〜武士と山伏は何方もアシ同志の喧嘩だ
 面白い遣れ〜」十「然し何方が勝つてあらう、早くやれ、ワイ〜……」見
 物變を好むワイ〜と煽しかけて居る、スルト一人が「此の喧嘩は大方山伏
 が勝ちだな○「ナセだい」ダツテ考へて見れへ、山伏に武士、山だけ餘計に
 あるぢやアねへか」と詰らぬことを云つて居る、此の時八郎は沈着拂つて八「

アツハ、可笑しいから笑つたが夫れが悪いか、お前は見受ける處山伏の姿はして居るが山師だな山「ナニ山師だと聞き捨てならぬ其の一言、何ゆへ以つて山師と申すか」八「アツハ、それは云ふ迄もないこと不動明王を夫れへ現はすと申しながら一向現はれないではないか貴様は不動を現はすより先に賽銭の事を云つて居るが眞實夫れ丈けの功力があるものなら、賽銭の催促をしないでも宜い然るに未だ何んとも分らぬ先から賽銭の催促するのが山師の證據、又第二には不動明王が一向現はれないのが第二の山師の證據、何うだ恐れ入つたか……」イヤ山伏は怒つた「相手を若武士と侮り大手を擴げて掴みかゝつた八郎は突つ立ち上つて八「小癩な山伏奴貴様が果して不動明王を祈り出したら乃公は懷中に持つて居る五百兩餘りの金を皆くれてやるのぢや、サア來い大山師奴……」云ひさま、カツキと組んで力に任せ牛蒡拔きに山伏を目よりも高く差し上げ、ヤツと庭前目がけて投げつけると、斯は如何に山伏の姿は、パツと

消へて仕舞つた、八郎は夫れと見ると八「フ、ム此奴は察する處妖術使いか夫れとも忍術使いに相違ない、ヨ一シ今に見る……」八郎がシロく四邊を見廻して居ると姿を消してソツと背後へ窺いよつた山伏は、突然八郎の懷中に手を突込み、胴巻をズル／＼引出さうとする其の手をムツと掴んだ八郎は、カラ／＼と冷笑つて八「アツハ、貴様は下手の忍術使いか面白い忍術なら此方にも少しは覺へがある、サア術比べ來い」と云ひさまヤツと叫ぶと、ドシーン夫れへ投げ飛ばした、山伏は術が破れて姿が現はれる、八郎隙さず飛びかゝつてウンと押へつけた八「サア何うだ大方貴様は正直な百姓を欺き金銭を奪ひ取る曲者に相違あるまい、サア白狀しろ山「ウム残念……」八「ナニが残念だ、乃公の懷中へ手を突つ返むとは横着千萬、少しく變な術を心得て居るを幸ひ斯んな處へ入り込んで、悪事を働かうとは悪いき奴、サア白狀しろ貴様は何者だ山「アイヌ……、白狀する／＼、手を緩めてくれ苦しい／＼……」山伏は

到頭往生して仕舞つて山乃公は眞實の山伏ではない芥川流忍術の達人芥川雷傳齋の弟子と一旦はなつて居たが、到頭破門をされて、諸國を漫遊、少々習ひ覺へた忍術を以て悪事を働いて居る念珠坊滿海といふ坊主上りぢや、何うか免してくれ八アツハハ、スルト貴様の使つた芥川流の忍術かマダ餘り達者ではないが、そんな未熟の腕前で人を欺くとは所謂生兵法は不怪我の基だ以後改心すれば免してやるが夫れが出来なければ此の處で素首を引抜いてくれる、サア性根を据へて返答しろ……山イヤ悪かつた〜以後は改心を誓ふから、何うか免して貰ひたい八夫れでは免してやる、キリ〜立ち去れと……首筋擱んでやつと投げると、向屏飛び越へ、往來へさしてドシントキヤツ腰を健か打つて藻掻き苦しみながら跛足引き〜逃げ出した、名主や村のものは、先刻よりの騒を眺めて居たが、八郎の腕前に感心して名何うもお武家様、有難う存じます、既の事でアノ山伏に飛んだ目に合される處でございました八ア

ハ……彼奴は忍術使いだから不動明王の姿位は現はしさうなものだが、夫れが出来ないほどの奴だから、マア云はゞ習い始め、ヒイ〜忍術使いだ此の後あることだアンな奴に金を捲き上げられぬやうにするが宜い」と云つて聞かせると、一同は三拜九拜して、八郎の手の内に感じ□何うか手前の宅へお越し下さいまし△イエ私の宅へお越しなつて下さいませ……と八郎俄に彼方此方より引張り蟬、毎日酒肴で饗應され却つて迷惑顔、早く逃げ出したいと密に考がへて居る。

九 天下無敵の手の内拜見しやう

毎日の酒責め馳走責めに遭はされて、雲切八郎も弱つた八之れでは遣り切れない、何日迄も斯んな處に居た處が仕方がない何うかして逃げ出したいものだと思つて主人吉右衛門に向つて出立の事を告げると吉マア宜しいではござい

ませんか手前のうちは何日まで居て下さつた處で一向差支へございませぬ、何
 うか一年でも二年でも五年十年でも夫れとも娘の増になつて……」到頭本音を
 吹き出した此の吉右衛門には一人の娘がある當年十八歳で田舎に稀な美人、其
 の名をお種と云つて村の若いものにワイ／＼云はれて居るが、相手は名主の娘
 ナカ／＼近寄る事も來事ないので氣を揉んで居るものも澤山ある、吉右衛門は
 八郎が泊つた翌日より何うかしてア、いふ若い立派な人を娘の増にしたいもの
 だと、斯う思つてワザ／＼引留めて居るのだ、八郎も夫れを知らぬでもないが
 望みある身の上婦人に迷ふやうな男でないから、顔つき合しても挨拶はするが
 餘計な口は利かない處が或夜の事雨が降つて退屈だから八郎只獨り居間のうち
 で何か軍談の本を讀んで居ると、襖を靜かに開けて入り込んで來たのは娘のお
 種、今夜に限つて立派な衣物を着て大盛装に盛装し込み、茶と菓子とを持つて
 夫れへ入つて來た種「八郎様、お淋しうございませう、父様の云ひつけてござ

います、何うか之れを召上つて下さいませし、妾がお茶を點てませう八「マア
 之れは有難い、然し茶は勝手に點てるから夫れへ置いて行つて下さるやう却つ
 て迷惑……」娘は之れを聞くと恨めしさうに八郎を眺めながらモシ／＼して居
 たが種「父様の云ひつけて下さいませ、今夜はお淋しからうからお話しのお相
 手を申せとの事でございませ、妾は之れでお相手を……」と云つてナカ／＼立
 去る様子が無い、八郎も之れには弱つた、打ち捨て、置いて、軍談を讀んで居
 る、夜は次第に更けて來る、八郎寝やうと思つて八「お種どの、何うか引取つ
 て下さるやう種「イエ／＼妾は朝迄此處に居ります八「オヤ／＼、朝迄居られ
 て堪るものでない……」無理に掴み出す譯にも行かないから、打放つて置く、
 スルトお種は押入から夜具を出して敷き種「サア、何うかお寝みなさいませ……
 ……」云ひつ、秋波を使つて、變は未振を見せる、八郎は困つたもだと思つたが
 素知らぬ顔して寢込んで仕舞ふ、夜中頃に目を覺して見ると、呢と何日の間に

か蒲團の横の方で添寝をして居る、八郎驚いて飛び起き、枕を持つて片隅へ行つてコロリ横になり、グウ／＼鼾の聲高く寢込む、又目が覺める、見ると何時の間にか蒲團が被せてあつて、其の横手にはお種が入つて小さくなつて居る、八「オヤ／＼大變……」又飛び起きて枕を持つて逃るといふ始末夜通し居間のうちをグル／＼逃げ廻つて、碌々寢る事も出来ない、之れが男なら打ち懲してもやらうが、婦女と云ひ主人吉右衛門が今迄泊らせて丁重にしてくれた恩義もあるから打ち懲る事も出来ないし、八郎も大きに困つて、翌日早天起き出で、朝飯済すと、チヨイと其處へ歩いて來ると云つて、パイと宅を飛び出し八「サレ怖やく、アンな情い事はない、三萬の大軍でも物の敷としない乃公だが昨夜ばかりは恐れ入つた、氣の毒だが君子危きに近寄らず此の上は逃げ出すに限る」と其の儘其處を立つて山傳いに泊りを重ねて越前に入り込み、北之庄の手前東郷といふ處へ歩つて來た、スルト路傍の松並木に一人の若武者が色青さめ

て眉間には生疵を負ひ、溜息ついて思案の體、打ち萎れて見へるから八郎は呢と立ち留り眺めて居たが何に思ひけんづか／＼と近寄り八「アイヤ武家、何うやら様子ありげの御姿であるが、武士は相見互ひ、柄先三寸の好意といふ事がござる差支なくば一つ様子を承はりたい」といはれて手の若武士は、八郎の前に頭を下げ若「誠にお尋ねに預かつて忝けない、夫れではお言葉に甘へて申上るが、拙者は花田小太郎と申し、北野庄柴田家の家來でござるが、父は柴田家の武術指南役を勤め、相當に信用もござつたが、先年より北條家の浪人にて濫谷軍刀齋と申す人物、北之庄の城下に參り町道場を構へ、自ら天下の名人と稱し拙者の父を悪口いたし刺さへ先達より父に對して兩三回も試合を申して參る次第拙者子として捨て置き難く殊に父は老年にして連も敵はずと存じ父に代つて試合に乗り込みし處、ツイ不覺を取つて眉間に迄疵を負はされ、残念至極と存すれども如何せん腕前に於いて適はず、歸つて父にも申譯なく、如何はせ

んと斯く思案に暮たる次第でござる……」と涙を含んでの物語りに之れを聞いた雲切八郎は他人の事ながら捨て、は置かれぬから八「イヤ、お氣の毒千萬然し試合に負けるといふ事は其の時々の運不運もある事ゆへ、少しも恥とするに足らぬが、眉間に疵を負はすとは以ての外、宜しい袖スリ合ふも他生の縁、之れを聞き込んだ以上は見遁す事は決して出来ない、宜しい、拙者は天下の浪人雲切八郎と申すもの、一番澁谷軍刀齋と申す奴の道場へ乗り込み、他流試合を申込み一撃の下に打ち据へてお目にかける、御身は一先づ屋敷に歸つて居らつしやい、ナアニ大丈夫でござる」八郎は愚圖くして居る事の嫌いな性質だから、花田小太郎に別れると其の儘ドシ／＼北之庄の城下に入り込み、澁谷軍刀齋の道場へ来て見ると書きも書いたり大きい看板へ墨黒々と「日の下開山天下無敵武藝十八般指南、澁谷軍刀齋」と書き流してある、其の側には、他流試合勝手にすべし念入つて書き添へてある、八郎夫れを見ると門前でカラ／＼と

大口開いて笑ひ出した八「フア！ヨク吐へる犬はヨク逃げる」と譬の通り、斯んな大法螺を吹く奴には到底縁な代物はない、ヨクも之れで柴田の豪傑が打つ放つて置くものだ、ヤイ澁谷軍刀齋、乃公が悪口して腹が立てば之れへ出て参れ大道に於いて試合をいたしてくれ……」と大聲で怒鳴り立てたから折柄通行のものは何事かと驚いて眺つて居る、道場かは軍刀齋が大勢の弟子を相手に稽古をつけて居たが夫れと聞くと大變な立腹、武者窓からヒヨイと覗いて見るとまだ二十歳前後の落者が、人もなげの高言をはき散して居るから甲「ヤア無禮ものめしあひのぞあらば此れへ参れ、天下無敵の澁谷軍刀齋は貴様如きを相手にすべきでないが望みとあらば十萬打ち据へてくれる、夫れとも汝發狂者であらば特別の情けを以つて許してくれる早々詫をして立ち去れ……」之れと聞くと八郎はワザと大聲揚げて笑ひ出した八「フア……乃公の方は發狂はいたさぬが大方貴様の方が氣が變になつて居るのであらう、乃公は天下の豪傑だ、犬小

屋同然の處で試合なんかは決してせぬぞ大方貴様は乃公の威勢に恐れて、此處へ出る事が出来ないものであらう、夫れぢやア天下無敵の看板を持つて歸るからさやう心得ろ、ア一此處は大馬鹿者奴ツ……」怒鳴りながら、つかく進み寄り、楸の一枚板で拵へてある一寸板の看板を取り外しヤツと力に任せて叩きつけるると、バシーン眞二つに打ち折れる、其の折つた奴を、片足でヤツトと踏むと、メリメリと碎けて仕舞つた武者窓から見て居た澁谷軍刀齋は怒るまい事か軍「己れ無禮者奴ツ……」と太刀を驚掴み、バラリ飛び出し軍「不埒者奴覺悟しろ……」ズラリ引抜き斬つてかゝる、八郎は鐵扇右手に提げながら八「へー……兎角試合には慌てぬものぢや、天下無敵の手内拜見しやう、オツトツト、見事く……」テンで馬鹿にしてかゝるから軍刀齋は烈火の如く憤り無二無三に斬り込んで来る八郎ヒラリく引外して居たが八「ヤイ軍刀齋乃公は當柴田家抱への花田小左衛門の弟子で雲切八郎といふものだ、貴様等のやうな下手の

武術家が花田先生に、向ふとは以ての外、蟻螂の斧を以つて龍車に向ふか如きものである、身の程を知らぬ大馬鹿者奴ツ……」と怒らせる積りで無闇と惡口する今や澁兵軍刀齋はカンクとなつ目も眩まんばかり、又先鋭く斬り込んで来る奴を八郎は冗談半分八「オ、と危ないく、腕は出来ないが、又物は斬れる軍「己れ此の野郎……」八「何處い、此處ぢやく」八郎がヒョイく躲して右に現はれ左りに隠れ、無闇無鱈に惱ますから、軍刀齋はマスく急ぎ込んで来る、今でも軍刀齋がヤツと斬り込んで来た一刀を、八郎ヒラリ躲して置いて手早に飛び込んだと思ふと利腕をバチーン鐵扇で打ん殴つたアツトといふ間もなく太刀をガラリと取り落した、シテ遣つたりと、躍り込んだ八郎は、軍刀齋の襟頭掴んで、エイと叫ぶと素早く小脇に抱へ込んで仕舞つた八「サア何うだ口ほどにもない奴ぢや之れで天下無敵とは聞いて呆れるわい、サアツタバタ騒ぐと捨り潰すそ……」門人共を尻目に向け、花田の道場へ駆けつけて来た、

スルト花田小三郎は既に戻つて父小右衛門にも此の事を話し何うなつたかと思つて居る處へ八郎が軍刀齋を抱へて玄關へ駆け込んで来たから小「ヤア雲切殿何うでございしました」八「イヤ花田殿此の通りだ、提げて歸つた……」云ひさま道場の真中へドンと投げ出す、軍刀齋も八郎の腕前には敵ないと思つて小さくなつて居る、八郎は仁王立ちとなつて八「サア軍刀齋、改めて天下無敵の手の内拜見しやう」瀧「ウーム御免を……」八「アー天下無敵も取りやうに仍つては強い事にも取れ弱い方にも取れる、大方貴様の天下無敵といふは、弱い方の天下無敵であらうサア立ち合へ、手の内調べてくれる……」軍刀齋平倒り込んで、仕舞つて軍「何うか、御勘辨を……」手合はさんばかりに平伏して居る八「ウーム、然らば許してくれる、以後花田殿に手向ひすると承知しないぞ、又當城下に居る事ならん、キリ／＼立ち退け」云ひさま襟頭擱んでヤット、門前に投げ出した、瀧谷軍刀齋も斯うなつては城下に居る事も出来ない、夜逃げ同様何

處かへ逐電して仕舞つた、之れが爲め花田の名前はドツと、出る、雲切八郎が花田の弟子であると云つたから花田先生には此んな豪い弟子があつたであらうかと何れも驚いて弟子入りするといふ有様八郎は花田の屋敷に厄介となり、毎日門人に稽古をつけて居る、或日の事花田小太郎が登城をすると、大主勝家は目通りさせ、四方八方の話に及んで居ると、小太郎は雲切八郎を推舉したいといふ氣があるから小「恐れながら申上げます勝「何事ぢや小「目下手前道場へ参つて居ります天下の豪傑雲切八郎なるもの恐るべき手の内でございます何卒御召抱へあらん事を願ひます」と言上に及んだ。

一〇 冥途の見物に出かけたい

勝家之れを聞くと目を見張り勝「ナント申すぞ、雲切八郎なる者が其方の屋敷に居ると申すな、フー、ヤア小太郎汝に申付ける其の雲切八郎なる者を召拵つ

て差出せ、五百石の加増を申付ける萬一取逃すやうの事あらば、家は改易、其
 身は切腹であるぞッー小太郎はハツと驚き小ナニカへ、彼を召捕らればな
 りませぬ勝其方は存じまいが、彼れ雲切八郎なるものは、大膽不敵の曲者に
 して先年佐々木攻めの時、予が先陣を承はりしに、予の陣ト二陣丹羽の陣を
 十三歳の小冠者の僻に、微塵に打ち砕いた事がある、マツタ夫れのみならず、
 昨年是我君各務ヶ原にて狩倉の際、不敵にも本陣長福寺へ暴れ込み夫れのみな
 らず狩倉の場所に於いて斯様く實に大膽とやいはん、不敵とやいはん、彼が
 當城下に参り居ること幸ひ、汝の手に於いて巧く召捕つて仕舞へ五百石である
 ぞッー之れを聞いて花田小太郎はハツと驚き小サア大變な事が出来た、恩人
 たる、八郎殿が我君の仇とは知らなかつた、斯んな事なら屋敷へ連れて歸るで
 はなかつた、ア、何うしたら宜からうと大心配君命だから快よくお受けをし
 て屋敷へ歸り、父に此の事を話して小私切腹いたしますから、お父上は何

うか私の首を持つて、我君に委細の事を申上げて下さいまするやう偏へに願ひ
 上げまする小イヤイヤ夫れは不可ん、此の父が切腹して我君にお詫をする、
 其方は未だ先が長い、假令君の不首尾を蒙むつて浪人しても次第に仍つては出
 世も出来る、決して短氣を出すな小チエ、お父上私が切腹……父黙れ父の
 言葉に従はぬか……互ひに争つて居るのを聞いたのが八郎だ八イヤツ變な
 事を云つて居るわい、切腹くと申して居るが、一體何うしたのであらうと
 夫れとなく立ち聞くと、自分の事といふ事が分つた八アツハ、勝家が乃
 公が来て居る事を知つて、召捕れいと申付けたのか、イヤ夫れ位いて切腹する
 奴が何處の世界にあるものか……と冷笑しながら、ガラリ襖を開けて入り込
 むと、二人は吃驚して飛びのく小之れは雲切殿には……ヨウこそ……八イヤ
 ヤ先刻より切腹くと申されるから何んであらうと失禮だが立ち聞き申した處
 が拙者の身の上に関係した事の由、夫れなら何も切腹には及ぶまいと心得る、

小「エツ切腹には及ばぬとは……八「サレバ何も面倒なる事はござらん拙者を縛つて、北之庄の城内へ引立て、頂きたい、サスレば御身は五百石の加増になるではござらぬか 小「イヤと申して恩人に左様の事が……八「イヤ萬事は拙者の胸にござる 某とて未だ若い身の上今から首打たれて死にたくはない、事を圓滿に納めたいが爲めてござる大夫丈でござるから、何うか繩打つて引いて貰ひたいと云はれて、親子も一寸延びれば一尋とやら、詮方なくも八郎に繩打つて北之庄の城内へ引立てる事になつた 小「誠に恩人に對して相済みませぬが何うか宜しく……八「イヤ心配無用、拙者も無事御身等も無事、双方圓く治まる方法を拙者がつけて御見に入れる、ナアニ心配する事はない……」と八郎は快よく繩にかゝつた、父小左衛門は病氣引籠り中であるから、小太郎が連れて登城する、太守勝家に此の段言上に及ぶと勝家大いに喜び 勝「天晴出來した、然らば約束に依つて五百石加増の墨付を與へるであらう」と其の場で墨付を渡

した、小太郎謹んで頂戴に及び、八郎を係役人に引渡して置いて悄悄引取つた然るに此方八郎は勝家の面前に引出されるとニコ／＼笑つて更に悪びれたる體もない、勝家は椽側に立ち出で、ハツタと八郎を睨まへ 勝「ヤイ秋月の忤八郎汝は大膽とやいはん不敵とやいはん、ヨクも先年子の陣を碎き、剩さへ主君右大臣家をつけ覘つたな、モウ駄目だ、観念して首を渡せ」といはれて八郎はカラ／＼と冷笑ひ 八「之れは又變つた事を承はるものかな、此の八郎は十三才の初陣にして、織田家の鬼大將柴田、丹羽の同勢を打ち破つたのは、初陣の功名として天晴賞めて貰ふは兎も角、恨まれる覺へは更にな、夫れのみならず信長公を君父の仇としてつけ覘ふは之れ當然、勝家殿すら陣を破られたを今以つて恨んで居らるゝではござらぬか、云はんや拙者は君家を滅ぼされ、父を討たれた恨みがござる、ダカラ附け覘ふは之れ當然、殊に北陸七ヶ道の太守と呼ばれ飛ぶ鳥落す勢のある勝家殿ともあらうものが、それしきの事を根に持

つて召捕方を申付けるとは、イヤハヤ箸にも棒にもかゝらぬ、馬鹿大将ヨクも信長公がそんな智慧のないのを信用して、織田の元老の提灯のと云つたものだアツハ、いゝ口を極めて悪口した勝家之れを聞くと、烈火の如く憤り勝「ヤア小冠者の分際として生意氣千萬予が直々手討にいたしてくれる、観念しろッ」と勝家は大體分別のない荒大名であるから、以前に陣を破られた事が今でも腹の底に染み込んで居る、夫れゆへ前後の思慮もなく一圖に入郎を憎いと思つて大将にあるまじき振舞に及ぶのだ、八郎は一向驚かない八「何うか首を刎れて貰ひたい、一つ死んで冥途見物に出かけたいアツハ、いゝ勝家はイヨ／＼腹を立て、小姓の持つた太刀を取るより早くズラリ引抜いてズカ／＼と椽側を降りた勝「宜い覺悟だ、念佛なと唱へて居れ八「アツハ、いゝ雲切八郎念佛は大嫌いでござる、サアスツパリと斬つて貰ひませう、然し前以つて申し置くと花田小左衛門父子が此の八郎を庇つたのは、斯様／＼であるから、之れは決

して罪を被せないやうに願ひたい……勝「ヤア餘計な事を申すな、予は汝さへ討てば宜いのだ、覺悟は宜いか……」目の前に太刀突き出した、八郎は泰然自若としてニツコと打ち笑み八「イヤ何うもヨク斬れさうだ、サアスツパリと遣つて貰ひたい……」首をズイと突き出した勝家はヤツと太刀を引いたと思ふとエイツ斬り降した太刀の爲めに、八郎の首はコロリと前に落ちたと思ひの外、ザブーンといふ音が聞へたから、一同はアツと驚いてヨク／＼見ると斯は如何に首になつた筈の雲切八郎の姿は見へないで、肝心斬り込んだ勝家の身體は泉水の中でアア／＼藻掻いて居るから家「オーヤヤ之りや何うぢや御大将がア／＼ンになつて居る、大變／＼」大騒をやつて漸く泉水の中から引出す、勝家は濡鼠になつてウム／＼唸つて居る勝「ウーム又しても奴は怪しき術で以つて逃げ去せたと見へる、残念／＼……」云ひつゝ、ヒヨイと見ると、八郎は元の處へチヤンと座つて以前の通り繩で縛られて居る勝「ヤ、ツ之りや何うぢや、其處

に居りながら予を泉水の中へヨクも投げ込んだな、ウーム八「アツハ、ハ、イヤ決して投げ込みは仕られど、勝家殿、自身勝手に飛び込まれたのでござるアツハ、ハ、ハ」冷笑つて居ると、今度は勝家大身の槍を持ち出させ勝「ヤア此の上は田楽刺にいたしてくれん、其處動くな……」リウ「と槍を抜いて突つか、リ八郎の胸元目がけて、プスッ突き通したと思ふ、一刹那もや、アツザアーン水音がしたから泉水の中を一同は見ると果して勝家は槍を持つたまま、泉水の中でアア「云つて居る△「ヤア大變く今度はザア「だ」と慌て、引出す、勝家はズブ濡れになつてヨク「見ると、矢張り八郎は泰然と石の上に腰かけて居る、勝家はモウ目が眩んで見へないほどに、カン「になつて怒つた勝「ウーム又しても變な術を使つたな、ヤア「佐久間支蕃盛政は居らぬか早や参れ……」聲に應じて佐久間支蕃盛政はドシ「駈けつけて来る支「叔父上如何なる御用でござる勝「ウーム盛政斯様くだ、汝此奴を遣付ける支「心

得ました……」北國の鬼と呼ばれし佐久間支蕃盛政は、自慢の三十八貫の鐵棒を持ち出して来て、八郎の目の先で振り廻し支「ヤイ小僧ッ兒乃公は北國名題の鬼支蕃盛政だ、此の鐵棒は三十八貫あるから貴様の頭へ御見舞ひ申したが最後首は胴へ凹んで仕舞ふぞ宜いか念佛でも唱へて居れい……」と云ふが早いか上段に振り被り、ヤツと叫んで打ち降した、八郎の身體は微塵になつたかと思ひの外支蕃盛政庭石へ持つて行つて、カチーン鐵棒を打つ附けたから堪らない腕へ響いてアツと思はず取り落した、スルト其の鐵棒が不思議やアーンと空中へ飛び上つて松の木へ引か、つた、一同ア「レヨ「と驚いて居ると支蕃盛政大いに怒り、ヤア此奴は又怪しき術を使つたと見へる、此の上は手捕りにしてくれん」大力無双の佐久間支蕃、大手を擴げてヤツとばかりに飛びか、つた、八郎の身體を抱き締め支「サア何うだ、斯うしたら貧乏搖ぎも出来まい、イデヤ鬼支蕃の手の内見せて呉れん」と云ひさま方に任せて、ウーム目よりも高く差

し上げ庭石の上へさして微塵になれ』と叩きつけた處がワンともスツとも音がしない代りに、ガラ／＼メリ／＼と烈しき物音がする一同はクツ／＼笑ひ出す。支蕃盛政大いに怒り、支／＼ヤイ貴様等何んで笑ふのだ、乃公だからこそ此の通り遣付けたのだ、へ、ン何んなものだい……』自慢の鼻を蠢かしながらヨク／＼見ると豈に圖らんや、庭前の石燈籠を庭石の上へ叩きつけたから、骨灰微塵になつて居る、八郎はと見ると例に依つて庭石に腰繩付きで泰然と控へて、ニタリ／＼笑つて居る、流石の佐久間支蕃も之れを見るとアツと驚き、今迄の廣言は何處へやら地團太踏んで口惜しが、處へメツと出て來たのは、之れぞ柴田の豪傑免受勝助だ、之れも八郎初陣の時、サン／＼の目に遭されて居るのだから其の返報をしてやらうとノソリ夫れへ現はれ免『アイヤ支蕃殿拙者代つて遣付け申さう、此奴には深き恨みがあるのでござる……』勝助が代つて打ち向ひ、太刀引抜いて首を刎れにか、つたが、之れも首尾よく失策つて泉水の中へ投げ

込まれた、最後に現はれたのは北國名題の四本棒と呼ばれた、佐與田周次郎、下田忠次郎、鶴島源藏、竹島伊平、此の四人が目方十八貫目の鐵棒を携へて夫れに躍り出で、四『アイヤ免受殿、我々代つて取り控ぎ申さん、假令奴に如何なる魔術ありとも何條何程の事やあらん、其處お退きあれ……』四人が四方より鐵棒振り上げ、ヤツとばかりに打ち込んだ、ガラ／＼ドシンン四人は一度に引くり返つて、我れと我が鐵棒で頭を健か打つて、四『アイター……ウム』四本棒が二本棒を垂らし頭抱へてキリ／＼舞をやつて居る。

一一 順逆二門なし

出る奴も／＼悉く遣られるから柴田勝家大いに怒り、勝『此の上は飛道具を以つて打ち取つて仕舞へい』と命を下した、之れには八郎も少々驚いたが、八『待てよ、今迄のやうな遣り方ではいけない、一番城内を騒がし逃げ出してやらう

と思つたから、ニタリ／＼と笑つて居ると、鐵砲足輕が十五人夫れへ出て来て
 プラリ居列び、八郎を取り圍んだ、八郎は腰繩のまゝ、口中に呪文を唱へると姿
 がパツと消へたが、外のものには夫れが分らない、矢張り其處に居るやうに見
 へる、見へる筈だ、八郎は素早く烏帽子を抱へて来て自分の身代りに夫れへ置
 いて其の身は椽側に立つてツツと眺めて居る今や鐵砲組は睨いをつけ、一度に
 ツツ……ン」火蓋を切つて放した、人間ならプス／＼中るが岩だから、カチン
 ／＼と中つた奴が、弾き返つて鐵砲組の身體へ中る、所謂反れ玉だ□アツア
 イターウム……」外れ彈丸だから、大怪我はしないが、顔手足處嫌はず中つ
 て十五人の鐵砲組は夫れへ平倒り込んで仕舞つた、夫れを見ると八郎は、態を
 見るとばかり、ノシ／＼奥へ入り込み大廣間の壁へさして、

智慧のない猪武者の權六が
 泥水呑んで目玉ギロ／＼

雲 切 八 郎

斯う書いて置いて、プイと城内を取り出し、ドシ／＼花田屋敷に戻つて来て、
 八「イヤ何うも面白かつた、實は斯様／＼、然し御身等は決して心配する事は
 ない其の時は斯様／＼するが宜しからう……」と計略を授けて置いて其の儘北
 之庄の城下を立ちのいた、八郎はもう少し荒れたくつて堪らなかつたが、花田父
 子の身の上を氣遣つて、之れ位いに遠慮したのだ、然るに此方柴田勝家は火廣
 間の落書を見ると、イヨ／＼腹を立て、花田父子を呼び出し首を刎れやうとし
 た處が柴田家にも忠臣はある、免受勝助は之れを諫め、勝「夫れはお宜しくござ
 りません、花田父子に何の罪がござらう、何うかお約束通り五百石をお與へ下
 さるやう……」勝家も氣に入りの免受勝助の諫めであるから、到頭怒りを柔ら
 げ五百石加増といふ事にしたが花田父子は之れを辭退して決して受けなかつた
 爲め勝家の怒りも解け此の事は遂に何の咎めもなかつた、夫れはサテ置き此方
 雲切八郎は、北之庄を立つて、ノシ／＼敦賀に入り込み、夫より若州小濱へ歩

つて來ると都本寺で右大臣信長公が、明智日向守の爲めに弑されたといふ事が聞へた八郎は丁度家にて飯を食つて居たが箸を投げ出して「ア、残念、君父の仇信長公に今一太刀恨みを返さして思つて居たが、サテは明智日向守の爲めに弑され給ひしか、氣の毒な事をしたものだ」と八郎は好敵手を失ふた心地して暫らく茫然として居たが「八、イヤ何うも仕方がない、夫れにしても明智日向守何ういふ譯で自分の主君を弑したか知らぬが逆も永持ちはずまい順逆二門なり、大逆無道之より甚だしきものはない」と八郎は歎息して居る處が、八郎小濱を出立しやうと思つたが、次第に仍つては京都へ乗り込んでやらうといふ氣があるから、小濱に逗留して、昵と様子を窺つて居ると、二日に右大臣信長公が弑され、夫れから十二日経つと山崎合戦となつて明智日向守は羽柴筑前守に滅ぼされて仕舞つたといふ事が聞へた「八、イヤ何うも羽柴筑前守といふ大將は木下藤吉郎時代より何處となく違つた處があると思つて居た、乃公が十三

歳の初陣の時觀音寺を逃げ出すに當つても木下藤吉郎の同勢ばかりは、知らぬ顔して通してくれた恩がある明智が滅びると、織田の天下を引受けるものは、此の羽柴筑前守より外にはあるまい」と八郎はモウチャヤンと先を見抜いて居る小濱に十四五日も逗留した八郎は「八、モウ京都へ入り込んだ處で面白くない、一つ山陰を漫遊して九州へ入り込み、夫れから歸りに、中國地を上つて大阪へ出やう、肝心の信長公が世を去つた以上は只名を揚げ腕を磨くばかりだ……」と決心して八郎は小濱を出立して、ノシノシ丹後田邊の城下に入り込んで来た、田邊といふのは今の舞鶴が夫れであつた、八郎は城下の丹波屋善兵衛といふ宿へ泊つてプア〜と城下を見物する、此の丹後田邊は六萬石で細川兵部大輔藤孝の居城となつて居る、細川家は清和源氏の家筋であつて、兵部大輔藤孝は日本歌道の名人で、夫れが爲め朝廷の御覽へも目出度く歌道名譽のものといはれて雲上人にも信用がある位だから、僅か六萬石でも天下に聞へた大名であつ

居る武士には武士の作法がある、町人の考へるやうには参らぬものぢや貴様等
 が頼んだからと云つて、オイソレと加勢の出来る譯のものではない兎に角乃公
 は一つ見物しやう其の上で二人の方が勝つとか、又は大勢の方が卑怯な振舞を
 するに於ては乃公も捨て、は置かん心配すな、何處で仇討があるか案内しろ、
 町「畏まりました……」八郎は町人に案内しられて町端れの廣場へ来て見ると
 果して人が黒山の如く立ち騒いでいろく云つて居る町「お武家様此處でござ
 います八「フムさうか……」八郎延び上つて見ると一方には二人、向ふには大勢
 の武士が控へて今にも仇討をしやうと、双方が睨み合つて居る、一體此の仇討
 は何ういふ譯であるかといふと此の時分丹後宮津の城主宮部帶刀禪定といふは
 明智日向守が謀反をするについて不心得にも明智方となつた、夫れが爲め明智
 が滅びると共に、家を取り潰される筈であつたが、武勇拔群の大將であるから
 羽柴筑前守は格別の情けを以つて十萬石であつたのを半分の五萬石に減地させ

て本領安堵土地には別に變りがなかつた處が馬廻役を勤めて居る松本初五郎、
 内山新左衛門といふ兩人は二百石づつ、貰つて居たのが殿様が減地されたについ
 て五十石づつ減つたから百五十石となつた、斯して主君の身代が減つたのだけ
 ら仕方がない處が内山新左衛門が内「時に松本二百石頂戴して居つたのが百五
 十石に減つたとはチト不公平ではあるまいか、ナセなれば國家老は二千石がタ
 ツタ百石位いの減祿、夫れに我々は二百石のうちから五十石とは餘り不公平で
 はないか然し之れも殿様が御減地になつたのであるから致方もないが、吾黨草
 履取を之れ迄通り召使ふといふ譯にもならぬから若黨には暇を出し何事も儉約
 をして行けば、お役の勤まらぬ事もあるまいと心得るが何うであらう松「相だ
 内「然らば組の人々にも此の事を話さう……」アイヤ各々我々兩名な斯く相談を
 したが就ては若黨にも暇を出して上の御用の時は、若黨の代りに足輕を拜借し
 て代りにしたいと心得るが何うであらう……」成程夫れは我にも望む處であ

る』と相談が極つて此の事を上へ願ひ出るも尤であるといふので、即座に問濟となつた處が事の起つたといふのは番頭役に加藤大膳といふのがある、之れが到つて派手を好んで千五百石領して居たのが、僅か百石に減つて別に苦痛にもならんから、相變らず派手にやつて居る、此奴少々小才のある處から人を眼下に見下して、兎角威勢を揮ひたがる、處か今回大徳寺で信長公の法會を筑前守が營むについて宮部帶刀も出かけねばならぬ、其の先發を番頭役の加藤大膳に申付けた、大膳は大いに喜び、自分の組下の松本初五郎、内山新左衛門、外八人の者を招いて大『今回自分は京都へ出發いたすについては拙者は二本道具を立て、道中をする心得、百石取るものは槍一筋に馬一匹といふ定めである、軍役通り若黨草履取りの用意をするが宜からう』と云ひ渡した時、松本初五郎が初『仰せでございませうが、我々は殿様が御減地になりましたについて減祿となり貴公の御減祿と我々の減祿とは相違いたして居りまして二百石のものが五

十石も減りました、依つて之れ迄通り若黨を召使ふ事は出来ませぬから暇を出し、主家の御用で出る時は足輕を拜借して若黨の代りに召連れる事をお願い申上げてお聞き濟になつて居ります、デございませうから貴公のお供をして參れば主君の御用とは違つて路金も自分持といふ事でございませう、依つて若黨草履取りを召し連れるといふ事は困難でございませう、何うか草履取り丈けで御用赦を下さいまするやう』と頼み込んだ。

一一 腹をかす奴があるか

スルト加藤大膳は目に角立て加『黙れ、怪しからぬ一言、百五十石取る以上は若黨草履取りを召連るが當然である、萬一旅費に差支へるとあらば諸道具を賣拂つて參れ』實に血も涙もない不人情の言葉、其處で松本と内山は仕方がないから組の者と相談すると、それでは年寄役の肥田帶刀に願へといふので、此の事

を申入れると帯刀も情けを知らぬ人物であるから、帶其方が我が部下であらば、此の帯刀が支配するが大膳殿の供をして参る以上は大膳殿の言葉に従ひ道中萬端は其の指圖に依つていたすべきが當然であらう、殊に百石以上頂いて居る以上は規定の通り若黨草履取を連れて参るが宜からう……斯ういふ次第だから内山、松本等の組は諸道具を賣拂つて路金に當てるといふ惨めな有様、實に目も當てられない中にも松本、内山は非常に困難、其處で若黨兼仲間を仕立て、供をする、内山新左衛門は岩平といふ仲間を若黨にして出立する事になつた、若黨に仲間がなつたのだから随分間の抜けた事もある、偕て宮津を立つて道中を急ぎ福知山へ来て宿を取つた秋田屋といふ處へ泊つた翌日は未明に當所を出立といふ事になつたが餘りに慌て、出たので内山新左衛門の若黨岩平が腰の物を忘れた、若黨が腰のものを忘れるといふのは不都合至極、二里ばかりも来た時分松本初五郎の若黨の新藏が新「オイ岩平、貴様刀を何うしたのか岩「エツ

アツ之れは失つた、誠に面目次第もない餘り慌て、ツイ失念した、何うも平素差しつけられぬものだから……新藏此の事は内聞に頼むよ、面目ねへから……云ひ捨て、取つて返へした、早くも此の事が一同に知れ渡るといふと、何うも怪しからん事ではないか、如何に日雇の若黨とは云ひながら、腰の物を忘れるなんて實に不憫な奴だ」と一同は笑ひながら園部の宿について、大將分の加藤大膳は山城屋甚兵衛といふ宿へ泊つた、風呂に入つて上り、若黨の内を呼んで加「コレ内、今日供方に變つた事はなかつたか内「へい別段お供方に變つた事もございませぬが、お組の内山様の若黨が福知山を出る時腰のものを忘れました取つて返したといふ事でございませぬ、早々内山新左衛門を呼べ……内「内は内山新左衛門の宿へ歩つて来て、内「内山様にお目にかゝります内「オオ内か、何か御用か内「只今お越しを願ひたいと主人が申して居ります内「ウムお頭が

お召し、イヤ御苦勞、只今参るであらう、松本お頭が呼びに参つたから、チヨ
 イと行つて来る松「マア待て失禮だがヨク考へて行くが宜い新「ナンダ松「ナ
 ンで呼びに來たか貴様知つて居るか内「何れ用があるから呼びに來たのであら
 う松「夫れは知れた事だ其の用が分つて居るか内「分らぬ松「乃公の考へては
 チヤンと分つて居る内「ナンの用だい松「福知山の一件だ、若黨が腰のものを
 忘れたについて大方頭が叱るに違ひない、然し貴様短氣を出してはならぬよ、
 身は親に貰ふたが命は主君から祿の爲めに頂だいて居るのだ假令何のやうな事
 があつても短氣を出すな、堪へ難い處を堪へるのが誠の堪忍であるから内「イ
 ヤ注意有難い何ういふ事があるにしても、了間して参る……」日頃より加藤大
 膳が新左衛門を目敵にして居るといふ事を聞いて居るから萬一又傷に及ぶやう
 な事があつてはならぬと心得て松本初五郎が心添へをした新左衛門は大急ぎで
 加藤大膳の處へ歩つて來ると大「新左衛門見へたか、之れへ参れ内「只今お使

を下さいまして……大「コレ内山、貴様は土産を持つて参つたらうな……内「
 お頭土産と申しますと大「土産といふと若黨岩平の首を持参いたしたらうな……
 内「之れはしたり、何んで私が若黨の首を持参いたしませう大「黙れ何事も
 乃公は知らぬと心得て居るか、福知山を出る時に其方の若黨岩平が腰の物を失
 念いたし取つて返したといふではないか、之れは貴様の耻辱にもなる又貴様の
 耻辱は頭たる拙者の耻辱、拙者の耻辱は御主君の御耻辱ではないか、ナセ成敗
 せぬ内「お言葉ではございますが、先般殿様が御滅地になりました我々も滅祿
 存御存知の通り小身の事ゆへ若黨を召使ふ力もなく夫れゆへ暇を遣はしまし
 て主君の御用にて出る節はお足輕を拜借いたす事にお願ひ申しました處、御聞
 濟になりました事は貴公も御存知でございませう就ては今度貴郎のお供をして
 京都へ参ります、之れでさへ若黨を召抱へる事は出来ませぬ、養ふ事の出来ぬ
 ものを貴公のお供をして、自分の費用で京都へ参るのでございますから、何う

ぞ草履取一人で御用赦を願ひたいと申しました時貴公は何んと云はれました、拙者は二本道具を立て、参るのである然し百石以上取る以上は槍一筋馬一匹を曳くは軍役の定めであるから、若徒に草履取を連れて参れ、入用が不足であれば諸道具を賣り拂つて其の路用に當てるとのお言葉、我々は平素困難の折柄であるから諸道具とても多分にはありません些細のものを賣り拂つて日雇の若徒を連れて参つたのでございませぬが固より仲間兼若黨にて召連れたのでございませぬから、細忽のあるは當然のことお頭と云へば親同然、組下と云へば子でございませぬ親子は深い縁のあるもの、それなら少々粗忽があつたとお目こぼし下さるが當然であらうと存じます、然るに只今のお言葉はチト其の意を得ぬやうに心得ます、大言黙れ自分が過失をいたして置きながら拙者に向つて兎や角云ふ法やある、貴様は少々馬鹿と見へる、假令日雇にもせよ貴様の若黨であれば其の者の粗忽は其の責めを負はねばならぬものだ、又貴様の耻辱は乃公の耻辱

である、然らば成敗するは當然ではないか、萬一斯様な不調法があつた事が聞へては主君の御耻辱である、そうなたら何うする内にお言葉ではございませぬが、他日此の儀について、主君が御迷惑なされる事にも立ち到りました場合には手前腹を切つて申譯をいたします、貴公のお腹は借りませぬ、大言黙れ貸すものに事をかいて腹を貸す奴があるか、貴様のやうな奴を組下に持つて居るのは、甚だ迷惑だ以來謹め歸れ……内山新左衛門憤としたから飛びか、らうとしたが新「イヤ堪へ難い處を堪へるのが堪忍である、身は親に貰ふたが、命は主君より預かつて居るものと松本が臭々も短氣を出すと云つてくれたは此處ぢや」と思つたから新「以來は供方の過失のないやうに心付けます、何卒今回の處は御用赦を願ひます、内山新左衛門涙を呑んで其の儘其の場を立つた、スルト加藤大膳は、大言八内く、直に内山の若黨岩平を呼んで來い、今表から内山は歸つたやうであるから貴様は裏から参つて連れて來い、乃公が成敗してやる

八「畏まりました……」仲間の八内は裏から飛び出し、ドン／＼内山の宿へ歩
 つて来て、八「内山様の若黨岩平は居るか、チヨイと旦那様が来てくれと仰しや
 る岩「へい、直に参ります、八「一緒に来てくれ……」岩平は八内に連れられ
 て裏道を急いで来る庭の切戸が開いて居るそこから八内に連れられて入ると正
 面の椽側せんがわに怒氣満面どきまんめんにあふれて、一刀を携へ控へて居るのは、加藤大膳だ、岩
 平は主人の新左衛門が居ると思つたのが一向見へぬから不審に思ひながら岩
 私わたくしの主人は何處どこに居ります、大「そんな事は貴様が尋ねるに及ばん、夫れへ直れ
 貴様は内山の若黨岩平か、福知山ふちやまを出る時に腰の物を忘れ中途で氣がつき取つ
 て返したといふではない、貴様は何の爲め手當を受けて居る、假令日雇にせよ
 若黨わかたろでありながら腰の物を忘れるとは不埒ふちやう至極、貴様の過失は主人新左衛門の
 耻辱ちじやくである、新左衛門の過失は乃公の過失となる、乃公の過失は取りも直さず
 主君の過失であるぞ、許す事相成らぬ覺悟いたせ、岩「ワロ……何うか御免を蒙

むります、平素から刀をさしつけませぬから此のやうな粗忽をいたしました、
 平に御勘辨ごかんべんを願ひます……」と云ふを聞かす、縁から飛び降りた大膳は、一
 刀抜き打ちに逃げやうとした岩平の肩口から斜に、ヤツと浴せかけた、キヤツ
 倒れる處を首打ち落し、大「之れで宜い八内之を持つて内山の處へ参り成敗とい
 ふものは斯ういふやうにするものだといふて来い、八「委細心得ました……」八
 内は急いで岩平の首を持つて内山の處へ歩つて来た、此方は内山新左衛門忽ち
 歸つて、新「松本貴様の云つた通り云々斯様／＼の譯であつた、乃公は斬つてや
 らうと思つたが貴様の意見に依つて成らぬ堪忍をしたぞ、松「夫れは結構ぢや短
 慮りよをしてはいけん、然し貴様は何んで今岩平を呼びによこしたのだ、新「エツ岩
 平を……乃公は一向知らぬ……フ、ムサテは欺かれたか、松「何を欺かれたのだ
 新「イヤ乃公を此方へ戻して置いて岩平を呼びによこした處を見ると今頃は
 膳の非道の及にか、り相果てたに違ひない、さりとは不憫の事をしたものだ」と

嘆息して居る處へ「八」チヨイと内山様貴公におうけをいたせ」と主人から申付
 かりまして持参いたしましたのは若黨岩平の首でございます、貴公は御成敗が
 出来ぬから頭が代つて成敗したと斯う申されました、何うか首をお受取り下さ
 い新「ウム」確に頂戴いたしました、後刻禮をする爲め罷り出るであらう、宜しく傳
 へてくれ……」其の首を持つて奥に来て新「松本斯うくだ、モ早や勘辨なら
 ん松「最ではあるが先づ乃公のいふ事を聞いてくれ先刻も云つた通り成らぬ堪
 忍をするが眞實の堪忍ぢや、只今貴様は一時の怒りに乗じて大膳を斬つた處で
 其の起原といふは貴様が若黨の粗忽を其の儘にして置いたから斯ういふ事にな
 つたのだ又若黨は日雇のものであつたといふ事が世間へ知れるは必定左すれば
 貴様の耻辱であるから了簡しる途中心をつけて参れば宜かつたのだが、粗忽は
 此方にもある、又之れから後大膳の供にも粗忽がないとも限らん其時十分に返
 報をしてやれば宜い、イヤ今度の處は乃公に任して了簡せい、大膳の宜くない

事は組のものが皆知つて居る、今貴様が返報をしないと云つた處で臆病を笑ふ
 ものは此の組内には誰もない、先づ此處は堪忍してくれ新「ウム」流石は乃公よ
 り年上の貴様だ、イヤ持つべきものは親友である、貴様の厚意は謹んで受ける
 忝けない初「夫れで乃公も意見をした甲斐があるといふもの、マア我慢をせい
 此の後返報をする時節はあるであらう……」と懇々意見を加へて思ひとまらせ
 た、此方は加藤大膳、内山新左衛門が何んと云つて来るかと、心待ちに待つた
 が一向参る様子が無い大「ハ、ア命が惜しいので返報も出来ぬと見へるな、イ
 ヤハヤ意苦地のないものだ」と冷笑ひながら大「何うだ組のもの、内山新左衛
 門といふ奴は腰拔ではないか」と悪口をする、組のもの共は内山新左衛門の心
 の中をヨク知つて居るから氣の毒に思つて、宜い加減に挨拶して居る、翌朝園
 部を出立した、ダンク道を急いで明日は保津川を下らうといふので、其の夜
 は保津の驛へ着いて泊る事になつた。

一三 人捕る龜は人に捕られる

處が此の保津の驛が何んとなく雑沓して居る。大「八内何んだ表がザラ／＼して居るが、八「ハイ何處か此の近傍は賑はいがあるので大變な見物でございます。うで……何でも相撲があるそうでございませう。大「ナニ角力、角力と来ては乃公も見通す事が出来ぬ、何より好きだ、是非見物しやう。此の邊の角力だから素人であらう、コレ／＼御身達も角力を見物しないか。△「はい御一緒に参りませう……」大膳の一行は附近の寺の境内へ來ると、モウ見物は一杯になつて居る。大「除け／＼……」ヒヨイと見ると武家だから、左右に見物が分れる。大膳はズイと入り込み、好な角力だから餘念なく見物して居る。大膳の槍持は、傍への松の枝へ二本道具を立て置いて主人の後から見物して居る。處が遅ればせに歩つて來た内山、松本の兩人は、初「内山待てば海路の日和といふのは此處

だ見ろ、アノ松の枝に立てかけてある、二本道具は加藤大膳の槍だ乃公が必らず返報が出来ると云つたのは此處だ察するに槍持がやりつばなしにして見物して居るのであらう、貴様が一筋さらつてやれ乃公も一筋さらふ新「合點だ……」右の槍を取つた、二人は何處かへ姿を隠して仕舞つた、斯る事とは知らず、時刻が來たから、イザ出發といふ時に大膳の槍持の喜助に武平が、兩「オヤツ此處へ立てかけて置いた槍が見へれへぞ何うしたらう……」二人青くなつて近處を探して居ると若黨の八内が、八「武平と喜助何うした喜「何うも大變な事が出來ました。八「ナンダイ武「此處へ立てかけて置いた槍が無くなつて仕舞ひました。八「ナニ、お道具がなくなつたと夫れは大變だ其の邊を調べて見る。二「へエ……幾等探しても分る氣遣いはない、スルト大膳は、大「コリヤ／＼八内供方がザラ／＼して居るが何うしたのか。八「大變な事が出來ました。大「何が出來た、八「只今此處に立てかけあつた二本のお道具が紛失いたしました。大「ナニ槍が

なくなつたと八へエ喜助に武平が旦那様のお供をして見物して居りますうちに盗まれたのでございませす 大「武士の表道具を盗まれて濟むと思ふか、自身等が預る處の大切な槍をやりつげなしにするからいけない、二人を之れへ呼べ…」
 二「槍々二人は出て来て二何うか旦那様御勘辨を願ひます、何んとかいたしませすから大「黙れ、萬一此の事が内山新左衛門に聞へる時は園部の驛の一件もある乃公が耻辱を受けければならぬ、不埒な奴覺悟しろ…」
 三「到頭喜助と武平の兩人を斬つて捨てた之れを見た組のものは〇何うだい各々人捕る龜は人に捕られるとやら天下は廻り持といふ話があるが内山の若黨を殺したから今度は自分の槍持を殺すやうな事になる △成程、全體お頭が餘り酷いから斯ういふ事になる、内山が聞いたら嘸喜ぶであらう、夫れにしても内山が見へぬが何うしたらう」と、噂をして居る、加藤大膳は道具が紛失したと云つて今更ら調べる譯に行かぬ、夫れでは此の儘で行かうと、残念ながら、行列を立て、渡場より

船に乗り、保津川を下つて嵐山の麓で上陸、松屋といふ宿屋の前に来ると澤山の人が立つて居る、何事か入り込んで見ると、コハ如何に、紛失した槍が二本とも門に立てかけて、チャンと貼札がしてある。
 一今日途中に於て持槍二本捨て置き候もの有之、拾取り候事實正也、武士の大切な槍に候へば上下の武士覺へ候もの之れあり候者は、尋ね参らるべく、其の主人に對談を遂げ、其の人の槍に相極り候へば持槍の仔細に依つて相渡し可申者也

内山新左衛門

之れを見た内山の友達は〇何うだい各々、大變なものを拾つたな…大膳はアツと、驚いたが其の儘宿を取つて八内を呼びよせ大「貴様之から内山の處へ行つて斯様くいふ譯であると云つて、槍を受取つて來い 八旦那様向ふで神妙に渡せば宜しうございませす…大「渡さぬ事はなからう其の仔細を述べ

て受取つて参れ 八「夫れでは行つて参りませう……」 八内が内山の宿へ出て来て 八「お頼み申します、内山様にチヨイとお目にかゝりたうございます……、
 亭「へイ、内山様お使が見へました新「さうか……イヤ之は八内、何か用か
 八「他の事ではございませぬ、主人が保津で角力見物をして居ります時、槍持
 が松の枝に槍を立てかけて置きました盗まれました夫れが只今貴公のお手許
 にございます二本の槍が夫れでございす何も捨てた譯ではございませぬ實は
 盗まれたので……、何うかお渡しを願ひます 新「黙れ貴様は何才になる……、イ
 ヤサ其方は幾才になる 八「へエ 新「へエではない盗まれたとは何んだ、盗んだ
 ものなら明白に書いて貼札はいたさぬ、乃公が拾つたのだから、其の仔細を書
 いて出してあるのだ、貴様が来たのでは渡す事は出来ぬから立ち歸つて大膳殿
 にそう云へ 八「へイ 新「早く歸れ……」 驚いて八内は引返へす 大「何うした八
 内 八「旦那様、斯様く……」 大「さうか夫れは困つたな夫れでは逆も尋常に

は渡すまい 八「旦那様、松本様をお頼みになつては如何でございませぬ、内山様
 とは兄弟同様の間柄でございませぬから、何とか穩かに話が纏りませう 大「ウム
 成程夫れは宜い處へ氣がついた早々初五郎を呼んでくれ 八「畏まりました……
 八内は又引返へす此方は松本初五郎 初「内山アレ丈けの事を云つてやれば逆も
 貴様に談判した處で渡す氣遣いはないと思つて乃公を呼びに来るに違いない、
 其の時は出かけて行き取つて押へて詫状の一通も書かせてやる、そなたは時
 は槍を返してやれ、そうすれば一分で立つであらう 新「リム、マア萬事貴様に
 任せ、チツとは腹がスーとした……」 話して居る處へ、八内が又歩つて來
 た 初「ヤア、八内何か用か 八「旦那様がチヨイとお目にかゝりたいと申されま
 す 初「さうか只今参るよ……内山待つて居れ只今詫状を持つて來るから……」
 松本初五郎が大膳の處へ歩つて來た 初「お頭御用で……」 大「之れは初五郎、御
 苦勞く……」 今日け平常とは違つて至極言葉使ひも丁寧だ 初「何か御用でこ

さいますか 大「別儀ではない 實は内山新左衛門に二本道具をさらはれた。お前
と内山とは別段の間柄であるから何うか申受けてはくれまいか 初「貴公は私に
何んと仰しやるのでござる 大「イヤ内山の爲に二本道具をさらはれたから貰つ
て呉れといふのだ 初「お黙りなさい、ヨクそんな事が拙者に云はれたものだ、
貴公は失禮ながら園部の宿へ何んといはれた、内山を馬鹿と迄いはれたではご
さらぬか、殊に貴公は我々の爲にはお頭ではござらぬか、然らば組下のものを
ヨク氣をつけて我子の如く慈しむが當然でありませう、今度殿が御滅地になつ
たについて我々迄滅祿されたは致方もござらぬが、勝手元不如意の爲め、若黨
を廢して草履取一名を召連れて、お供をしたいと申したに、飽迄喧ましく格式
通りにせよと云はれたに仍つて、我には諸道具を賣拂ひ、日雇の若黨を連れて
參る事になつたのでござる固より日雇の若黨ゆへ刀をさした事がござらん、夫
れが爲めツイ忘れたは無理からぬこと、夫れを其の節貴公が情けを以つて聞い

て下さつたら我々組下のものは幾等喜ぶか分りますまい然るに其の者を手討に
なさるとは無慈悲といはうか情け知らずといはうか、そんな心を持つて居らる
ゝから今日のやうな不都合が起るのでござる、又内山の若黨が腰のものを忘れた
は慣れないからであとから、粗忽とは申しながら之れは無理からぬこと然るに
貴公が武士の表道具たる槍を失ふとは怪しからん事で、假令家來の過失にせよ
貴公の過夫、此の上もない耻辱と存じます、又貴公の耻辱は組一統の耻辱であ
る、組一統の耻辱は主君の御耻辱と存じます、仍つて此の申譯にお腹を召した
ら宜しからう、然らば私が内山より二本道具を貰ひ受けお供物といたしませう
然し頭たる貴公が腹を切るのをば、組下たる我々が呢と見ても居られますまい
仍つて之れを何處迄も貴公が内山に對して謝罪をなさるが、當然であらうと存
じます、園部に於いて若黨を手討にしたは心得違ひであつた、何うか今日の
處は了簡して貰ひたい、以來不都合のないやう心がけるといふ書付をお出しな

さい夫れを持つて内山より槍を受取つて参りませう、夫れとも二本道具を此の儘にしてお腹を召さるか……大「ウーム面目次第もない、何卒謝罪状は出すに仍つて槍を取り返してくれ 初「さう穩かに仰せになれば、私らでも事は好みませぬ槍はお手許へ戻るやうに取計らひませう……」大膳も残念とは思つたが據なく謝罪状を認められた其の状を受取り直に引返へして 初「サア内山、斯ういふ説状を取つた、其の槍を持つて行くぞ……」初五郎は二本槍を持つて大膳の處へ参り 初「以來心得違ひのないやうになさい、人我に辛ければ我れ又人に情しと申すといふ事がござる人の上に居るものは下に仁慈を掛けなければ立ちません失禮ながら以來はお謹みなさるが宜しい」と懇々意見を以て槍を渡した、大膳はイヨ／＼残念に思つたが此の場合に何うも仕方がない、其處で其の後は無事に京都に出かけて、後から來た宮部帶刀の勢を合して大徳寺の焼香に乗り込んだ焼香場の出來事は云ふ迄もなく、柴田瀧川が怒つて秀吉と喧嘩別れとなつた

之れはワザと筑前守秀吉が計略を行つたのであるから、柴田瀧川は其の秀吉の手段に乗せられたといふ事になる、處が諸國の大名も二派に別れたが、又しても宮部帶刀は柴田方となつて國へ引取つた夫れはサテ置き國へ歸ると組のものは〇何うだい、お頭も園部には器量を下げたな嵐山とは間違いであつた、我身をつめつて人の痛さを知れとは此の事であらうと然し之れも此の儘では濟せる者ではあるまい、何か此の意趣晴しが内山や松本に來るであらう」と噂をして何にか果せるかな、加藤大膳が甥の加藤左仲太に向つて、事情を話し、此の耻辱を雪ぎくれよといふ事を頼んだ固より叔父思ひの左仲太の事であるから、左「必らず御心配召さるな、叔父上の御無念は晴せます」と引受けた、此の加藤左仲太といふは美男子であるから、殿様より男色の寵愛を受けて居る、昔はヨク此の男色の行はれたもので男色の盛んなるは武士道の花であるなどと云つた位ひであつた、サレド武勇絶倫と呼ばれた宮部帶刀は、美男子の左仲太を寵

愛して少しも側を放さぬ位ひで之れを幸ひと或日左仲太は左と恐れながら、殿様に申し上げます」と言葉巧みに内山新左衛門、松本初五郎兩人が滅祿について君を恨んで居るといふ事を眞實しやかに讒言に及んだ。

一四 睨み倒してくれ

天下の豪傑も三尺の劔には恐れぬが三寸の舌は恐ろしいものである、宮部帯刀は非常の立腹で宮不埒千萬、予を誹るやうでは家風を亂すに相違ない、早々彼等兩人には暇取らせい……」と殿命を下した使者は兩名の屋敷へ立つた使其方等は武士道の心掛け宜しからざるに仍つて、永の暇を取らせる……」とあるから兩人は残念に心得て初内山、残念だ、斯る仰せを承はるは察する處大膳の甥、左仲太が、君に向つて叔父より頼まれ讒言に及んだものと見へる、然し之れはまた確な證據がないから、先づ残念ながら退身をして友達の方から

探つて貰つて全たく大膳が左仲太を頼んで斯ういふやうな沙汰が下つたとあらば知行の仇であるから彼を討果してやらうでないか新成程夫れは面白い夫れでばといふので、二人は組のものに向つて新サア各々永々厄介になつたが、お聞き及びの通りであるから我々當所を立ち退かれればならぬ〇何とも申様がない只今も組のものと申して居たのだが之れはお頭加藤大膳奴、意中から出で左仲太が讒言をしたに相違あるまい、付ては御身達は何處へ参る積りぢや……新乃公は斯様くした處へ立退く初拙者は此の城下に親類があるから其の親族の者の里方の方へ参つて暫らく厄介になる積り〇然らば我々詳しく事情を探れて知らせるから……二何うかさうしてくれ、此の知行の恨は決して忘れぬ、アんな奴を捨て、置いては人民が迷惑する二心得た、夫れでは些少なから餞別しやう」と組のものは心ばかりの餞別をした、兩人は屋敷を疊んで宮津の城下を立ちのき今日は何とが通知があるか、明日は沙汰が来るかと待ち受

けて居る。其の年も暮れて翌年の春を浪々のうちに送りた内山と松本は今に音信があるであらう」と待ち受けて居る拵柄其年の三月飛脚が来て、書面受取つた開いて見ると同じ組であつた山下八左衛門から送つたものだ開封して見ると果して佐仲太が大膳より頼まれて、殿様へ譏言したものであるといふ通知兩人は大いに喜び内山新左衛門は直様、松本初五郎の處へ歩つて来て相談に及んだ上機会を待つて大膳を討ち果してやらうといふ事になつて附け覗つて居る。處が悪事をするやうな奴はナカク油断がない二人も根氣ヨク機会を待つて居る然るに天なるかな、此處に加藤大膳は、殿の代参として城下端れの八幡宮へ参詣といふ事になつた夫れに極ると、組のものより、兩人に通知する兩人は雀躍して喜び勇み兩「イヨ〜、時節到来である、面白い假令相手に何百人居ようとも遣付けて仕舞へい」と其の當日を待ち受けて居る、イヨ〜當日となると加藤大膳は供揃へを立てたが、何れも腹心ものばかり、二十名ばかりを召連れ

て城内をくり出し、城下端れの八幡宮へ参詣、此處で首尾よく代参を済して、イヤ歸らうと又もや行列を立て、大膳は馬上悠然と構へ込み、いしも八幡宮と城下の間なる松並木へ歩つて来ると不意に行手を遮つた兩人は、之れぞ余人にあらず、内山新左衛門と松本初五郎なり、兩人は身仕度甲斐しく扮装、次第に仍つては斬死をしようといふ考へであるから相手が多勢でも、そんな事には一向恐れなく、天地に響く聲張り上げ新「ヤア〜夫れへ参つたは、加藤大膳ならずや汝の毒舌にかゝり浪人なしたる内山新左衛門に松本初五郎の兩人である知行の敵、イザ尋常に勝負〜」と呼はつた、馬上の加藤大膳は、之れを聞いてハツと驚いたが、多勢を頼んで、ヤア汝等兩人主君を誹謗した爲めに永の暇と相成りしを、此の大膳が爲せし事と思ひ、勝負を望むとは不埒千萬、ソレツ者共援るな……」聲に應じて加藤の供方はワイ〜騒ぎ立つた、處へ乗り込んで行つたのが雲切八郎だ、之れを見ると八「ハ、ア知識の仇討か、イヤ此

奴は無理もない、然し相手は大勢、此方は二人、十分腕が出来て居れば勝つて
 あらうが二十人と二人では難かしいかも知れんぞ 町「ダカラ私が加勢をしてあ
 げて下さいとお進み申しますので、アノ加藤大膳といふお人は、宮津の城下で
 もナカク人氣が悪ふございます、又アノお二人は斯様々々したお方で人氣が
 宜かつたのですが、讒言に依つて浪人なされたのでございます 八「ウム左様か
 然し武士の仇討に加勢といふ事は餘程考へものだ、ナセといふにヨシヤ負けた
 處で加勢を受けるといふは其の人の腕がないので耻辱に當る、ダカラ大抵は助
 太刀をするのは婦人とか子供とかいふやうなもの又は相手に大勢の助太刀があ
 れば其の時に限るのだ 町「ダカラ相手には大勢の助太刀があるではございませ
 んか 八「マア待てよ乃公が飛び込んで、助太刀と名乗つては面白くないから一
 つ折を待つて加勢をしてやらう 町「何うかお二人に怪我のないやうに願ひます
 ……」大勢の者は、ライク云つて居るイヨク仇討は初まつた、チャチーン

二人は一人で十人づゝを引受け火花を散して斬り結んで居るから、肝心の
 加藤大膳に斬り込む事が出来ない、エイオーと喚き叫んで四角八面に暴れて居
 る、八郎は兩人の腕前を見て居たが 八「ハ、ア兩人もナカク出来るが、十人
 の奴を斬り拂つて加藤といふ奴に向ふ事は、チヨイと難かしいかも知れん、十
 人に斬り殺されるかも知らん 町「夫れでは満らないではございませんか何うか
 早く加勢をしてあげて下さいまし、ア、危ないソレダンク後退りを始め
 た、ア、手傷を受けたのらしい…本人よりも見物がピクピクして居る、八郎
 夫れを見ると 八「フ、ム之れは不可ん大分弱つて来たらしい一つ助けてやらう
 ……云ひつゝ、口中に何か唱へながら人に知れぬやうに懷中で九字を切ると忽ち
 ウーンといふ聲と共に人數彼是れ五六十人各自に太刀又は槍を閃かして、ダツ
 くく其場に現はれ出で舞々と加藤大膳始め二十人を取り圍み二人に加勢
 とまじと勢と示した、夫れと見ると兩人は勇み立ち 内「ヤア何れの御方は

存ぞれど武士道の意地に依つての仇討、何卒御見物下されたし」と呼はつた、
 流石は武士、加勢を頼むとはいはない此の時雲切八郎は大音聲「ハヤア、
 人心配するな尋常に勝負いたせ、加藤首め二十人の奴は、一人も逃しはせぬ、
 小口より討取つて仕舞へい」と口で加勢をする、瘦犬も處で吠へるといふ位い
 大勢の加勢を得たので、内山、松本の兩人は元氣を盛り返し、内何人が存ぞれ
 ど、忝なき御加勢、假令斬り死にいたす迄も、何卒腕の加勢は御免蒙むりたし
 と呼はりく、小口よりザツク、と斬り立てたが何んしろ相手は大勢三人や四
 人斬つた處で四方より無闇に斬り込むから、容易でない、愚圖々々して居て、
 城内へ聞へ大勢が繰り出したら、夫れこそ、イヨ、事か面倒になると思つて
 二人は氣が氣でない、八郎夫れと見ると「イヤ之れは捨て置く事が出来ぬ、
 ヨーシ一番加勢をしてやらう」と又もや口中に何か唱へると一匹の虻が飛び出
 した、ブーン飛んで行つたと思ふと一人の耳の穴へ潜り込む、△「アツ大變々々

痛い……、耳の穴を刺されては痛いに極つて居る、ウロウロして居るうち
 内山新左衛門は躍りかゝつて斬り倒す、虻は又もや他の奴の鼻の穴へ潜り込み
 △「カ、刺す。△「ウ、ハツクシャーン、アイター……」慌て、居る處をバ
 ツサリ遣られる、虻は小さいが、誰も加勢して居るといふ事は知らない二十人
 は今や、十八人迄遣られて残り二人となつた、内山新左衛門は夫れと見ると、
 新「ヤア松本頼むぞ、乃公は加藤大膳に打つてかゝる、初「オ、合點だ……」此
 の時迄大膳は馬上に太刀引抜き、ウム、氣張つて居たが味方が次第に遣られ
 るから氣が氣でない、馬を煽つて逃げ出さうにも、四方を甲冑武者で取り圍ま
 れて居るから何うする事も出来ない、ウロウロして居る處へ内山新左衛門が飛
 鳥の如く飛び込んで来て、ヤツと馬の足を斬り拂つたから堪らない、ロ、リン
 馬は屏風倒しとなつた、馬上の大膳「ウロウ」と轉がつて五六間先に打つ倒れた
 が。△「ウ」と跳ね起き新左衛門目がけて斬つてかゝる、チャチャー、、打ち

合はしたが、大膳に七分の弱味があるから、次第々に斬り捲くらる、處へ二名の奴を斬り倒して躍り込んだ、松本初五郎は、エイと叫ぶと其の儘浴せかけた太刀が、大膳の肩口深く斬り込んだ、アツと叫んで延反らうとする處をエイッ今度は内山新左衛門が横に拂つた一刀の爲め、胴體が二つになつて、其の儘即死をする、八郎は目出度し〜と聲を上げると大勢の見物もシタリ〜と嘯し立てる、途端に大勢の甲冑武者はバツと消へて仕舞ふ、一同の群集はアツと驚く見ると木の葉が澤山四邊に散亂して居る、不思議々々と云つて居る、八郎が忍術で斯んな事をしたといふ事は誰あつて知るものもない、内山新左衛門も松本初五郎の兩人は八郎の側に依て二誠に何うも御援助有難い仕合せにござる、手前は内山新左衛門 初 某は松本初五郎でござる、何卒御姓名を伺ひたい存する 入 ナニ、別に援助も加勢もいたさぬ、其のお禮には及ばぬ、然し知行の仇討とは珍らしいから、及ばずながら加勢いたした迄でござるサア早く引

取られよ、今にも城内より大勢が繰り出しては事が面倒と相成る道理早く〜急ぎ立てられて二人は二三夫れでは後刻お宿へ伺ひませう、いづれへお泊りで…… 八 イヤ拙者は未だ宿を取つて居ない、此の城下へ來たてのホヤ〜だ、兎に角御身等の處を、聞いて置けば又參る事もあらう新ハイ實は此の向ふの在所に名主の七左衛門と申すものがござるそこに居りますゆへ是非々々御越し下さるやう 八 ハイ承知いたしました早く〜 二人は手傷を受けて居るが大分疲れて居るから、其の儘挨拶して立ち去る、八郎は樹の根に腰をかけ、大勢の群集に向ひ 八 アイヤ皆のもの、今に城内より討手が參るは必定、其の時は乃公が此處に斯う腰をかけて居て假令何百人參らうとも睨み倒してくれらるから見て居れ…… 之れを聞くと群集は動搖めき滲つて △ アイヤアノお武家は充分強い事をいふが或は睨み倒すか知れないぜ ○ ナア二人間を睨み倒すなんてそんな事が出來て堪るものではない、大方アノ人は何うかして居るんだらう、大

分變だぜ……」サマ／＼に噂をして居る。

一五 一番山賊を退治てやらう

不敵の雲切八郎は、暫らく待つて居たが、何に思ひけんソロ／＼木の上に攀ぢ
登り小手を騎して向ふを見渡し八「ヤア来たぞ／＼面白いタツタ五六十の同勢
か、イヤ夫れ位いではいけない、早く来い……」云つて居る處へ、ドット繰り
込んで来た人数五六十人、各自に太刀を閃かし△「ヤア何處へ行つた／＼モウ
歸つた後らしい、残念々々……」一同は地團太踏んで居る折柄、頭の上の樹の
枝に聲あつて八「ヤア／＼汝等の来るを待つ事久し、我こそは、内山、松本の
名代として汝等に一泡吹かせん爲め、此の處に控へて居るのだ、さらば手柄に
討取つて見らう」と云ひさま木の上からバツと飛び降りたと思ふと大勢の頭の
上をピヨ／＼飛び出した△「アイタ……、ウームー大騒ぎとなつた何んしろ

飛鳥の如くピヨ／＼頭の上を踏んで飛ぶのだから堪らぬ十七八貫もある男に
思ひ切り頭を踏まれては大抵のものは潰れて仕舞ふ△「ウームアイタ……頭が
曲つた／＼……」五六十人の奴が或は頭が曲り又は踏み潰されて満足な奴は一
人もない、只ワイ／＼と大騒をやつて居ると、八郎は向ふの方へヒヨイと降り
立ち口中に何か唱へると、斯は如何に頭の上からザア／＼と火の粉が降り出し
た、六十人の奴は首は曲る踏み潰される、お負けに火の粉責めに遣はされては
堪らない△「アイター頭が焼ける／＼ワイ／＼先を争ふて逃げ出した八「アツ
ハ、面白／＼、面白／＼、アイヤ群集、何うだ乃公の手の内は……△「お武家様は
ドロン／＼をやりませぬ八「ドロン／＼とは何んだ△「魔法を使いますね八「
アツハ、魔法とは驚いた、マアそんなものだ、假令何百人来ても怯ともす
るのぢやアない、モウ来る氣遣いはあるまい、貴様等も歸れ／＼……」八郎は
ヤツと叫ぶとバツと姿が消へた群集はアツと驚き、ワイ／＼騒いで行つて仕舞

ふ、城主宮部帶刀は之れを聞いて烈火の如く怒つたが、相手が何處へ行つたか
分らないから、到頭加藤大膳は殺され損にして仕舞つた、此方雲切八郎はノシ
名主七左衛門の宅へ步つて来て内山新左衛門、松本初五郎の兩人に合ひ事
の次第を物語つた上、八「御身等も此處に居るは宜しくない、之より何處かへ仕
官をするが宜からう、新「イヤ仰せではござるが、最早仕官の望みはござらん、
何卒此の上は貴殿の家來にして下され度、偏へにお願ひ申し上げる、八「夫れは
いかん拙者は本年十九歳まだく家來を持つ身分ではない萬一某が天下に名
を揚げたる節は家來にいたしても宜いが、夫れ迄はお断り申す、初「夫れでは何
うか召連れて天下を漫遊して下さるやう、八「夫れは困る、家來を持つ身分でな
いものが人を連れては尙更ら歩かれぬ、御身等も浪人して定めし金に不自由で
あらうから失禮だが少々は進上申さうと云ひつ、金五十兩づゝを二人に與へ
る、二人は目を丸くして驚いた、新「御加勢をして頂いた上、斯様な大金迄頂戴

いたしては……八「ナアニ大丈夫、某の身分は斯様々々織田家の御尋ねもので
あつたが、右大臣が世を去つたから、モウ天下晴れて歩く事が出来る、聞く處
に依れば大徳寺の焼香場で、柴田勝家、瀧川一益、神戸三七郎等は秀吉の處置
を憤り席を蹴つて去つたとやら、今に合戦が起るであらう此の合戦は戦はぬ
先から勝負は見へ透いて居る新「へエ、戦をしたら何方が勝ちませうか、八「
云ふ迄もなく羽柴筑前守が勝つ事は、火を見るより明であるから御身等も羽柴
筑前守に仕へるが宜からう、宮部帶刀も柴田方となつて、いまに家が潰れるに
違ひない、そんな主人を持たうより良禽は樹を撰んで棲む、良き樹を撰ぶに限
る、此の五十兩のあるうちに、上方へ出て筑前守に仕官の口を求めが肝心で
ある」と懇々云つて聞かたせ上、八「郎は飄然として其處を立ち退きノシ、但
馬國に入り込み陰州の國境蒲生峠の麓へ來ると、ズンブリ日が暮れて仕舞つた
八「サア斯んな處で日が暮れては大變だ何處から泊らうか、夫れとも此の山を

越さうか、今日は大分歩いたから、足が疲れて居る、一つ何處かで野宿をしようかな……」と云つて一向野宿するやうな處はなし、泊るやうな家も見當らぬエ、儘よ、ホツ／＼山を越さう、八郎は忍術使ひ幾等闇うても平氣だ、目は猫のやうに利く、だから鼻を摘むやうな闇夜を屈せず、ノツシ／＼と山を登つて行く一里ばかり來たと思ふと路傍に地藏堂がある、八「イヤ此奴は有難い、今夜は此處で悠くり足腰延して寝る事にしやう……」と八郎は地藏堂に入り込み腰の握飯を取り出して、ムシ／＼遣つて居ると、エ、ホイと何か登つて來るやうな氣配がする四邊が森として居るから其の掛聲が手に取る如く聞へる、次第に掛聲が近寄つて來て地藏堂の前に來るとヒタリ止つた、ドシンと何か卸した様子、子八「ハ、ア誰が來た……」思ひながらムシ／＼遣つて居るとミシと椽側に腰をかけた兩人の男は「○「オイ紀州紀「ナンダ越中越「何うも考へて見ると詰られへなア紀「何が満られへ、妙な事をいふぢやアないか越「妙ではないよ、斯

んな綺麗な女を巧く仕事をして此處迄連れて來たもの、山寮へ連れ込んで頭へ渡したら何うなるだらう紀「夫れは頭が妾にするとか何とかするだらう越「ダカラ乃公等は引合はねへといふのだ紀「成程、夫れは違ひねへ、之れもヒイ／＼の手下ぢやア始らねへや、一つ頭に談判しやうか越「何う談判するのだ、紀「駕籠は此處へ置いておいて、二人が岩屋へ歸つて頭梁に之れ／＼斯う／＼いふ女があるが、幾等に買つて下さると持てかけをした、マア之れ位いの女なら何處へ出しても三百兩や四百兩のものはあるから三百兩位いで買ひ取つて貰ふんだ、夫れが出來ないといふやうな事なら、そんなケチ臭い頭なら、此方から暇を出して此の阿度女をサン／＼慰さんだ上、賣り飛ばして仕舞やア、一擧兩得、何の事はねエ兩手に粟の掴み取りといふものだ紀「成程其奴は巧い然し越中、頭は元は武士だといふから、へ々な事をやると首がねへぜ越「籠棒奴、乃公がそんなへたをやつて堪るものかい、マア安心して附いて來いよ紀「合點

ぢや、夫れでは駕籠は此の儘にして置くかな 越「知れた事よ、令頃誰が此んな
 處へ来るものか、此處へ置いたつて大丈夫だ」其儘相談して二人は引返へし、
 何處かへ行つて仕舞つた、格子の中で此の話を聞いて居た八郎は八「フ、ムサ
 テは此の山奥に山賊が住んで居るのだな、ヨ一シ一番山賊を退治てやらう」と
 地蔵堂を出て見ると椽に一挺の駕籠が置いてある八「ハ、ア此の中に女が居る
 と見へる待て〜山賊退治は二段にして女を助けてやらう」と籠駕の戸を開け
 て八「コレ女中〜……」聲をかけたが中の返事もない、ウム〜唸いて居る
 様子だから、ヨク〜見ると猿轡を喰まされて居る八「何うも可哀想に、斯ん
 な目に合して……」手を突つ込み、婦女の身體に手をかけ、ズイと引出して見
 ると手は後ろに縛れらお負けに猿轡をはめられて居る、八郎は手早く猿轡と縛
 めの繩を解いてやり八「コレ女中決して心配する事はない、乃公は山賊ではな
 いから安心いたせ、圖らず今宵此の地蔵堂に泊り合せ其方の災難を知つたのだ

シテ其方は何處のものだ……」尋ねられて娘は漸く顔を上げる、見ると十七八
 歳で色の白い美人だ女「ハイ、誠に有難う存うじますお墨は確とは分りませぬ
 がお武家様と心得まする命の大恩人、何んとお禮を申上げませうやら、妾は此
 の在の蒲生村の名主で仁左衛門の娘、鯉と申します、今日親類に法事がござい
 まして、夫れへ参り夜に入りましたゆへ、下男一人を供として、歸る途中で二
 人の駕籠屋が参り乗つてくれと申しますから、イエ〜駕籠はいらぬと申しま
 したが中々聞き入れません、果ては下男を川の中へ突き飛ばし、妾を後手に縛
 り猿轡をはめた上駕籠に放り込み、斯んな處へ連れて來たのでございます八「
 フム夫れは氣の毒な事ぢや、然し此の場から歸れと云つた處で女獨りでは逆も
 歸る事は出来まいしと云つて乃公が送つてやるといふと山賊を退治る事が出来
 ぬ……然し其方を此處へ置くといふも無利であらうマア宜い山賊は後廻しにし
 て其方を宅へ連れて行つてやらう、サア起て女「ハイ何から何迄有難う存じま

す」と女は喜ぶ、八郎は女の手を引いて「八」サア早く行け……」ズン／＼麓の方へ降つて行く八郎が立ち去ると、サーム何處かで春延びをする聲がある、ア、ア……大伸欠の聲が聞へる、夫れと同時に地藏堂の背後よりフツと立ち現はれたのは大兵肥満の大男、矢張り之れも武者修業者と見へ、地藏堂の横手には筋金入りの棒が立てかけてある、一升徳利が轉がつて居る男「ア、ア、酒に酔つてヨク寝込んだものだ、今人の聲がしたやうであつたが、目が覺めたか、待てよ、何でも夢のやうに覺へて居るのは年の若い武士が、駕籠の中の娘を助け出し麓へ降りて行つた様子、或は彼奴が山賊退治をやる積りかも知れん、萬一奴に出し抜かれては、折角山賊退治に来て、馬鹿を見ねばならぬ、萬一そんな事があつては此の金棒に對して相濟まぬヨシ……今聞いて居れば、山賊が戻つて来る様子、一番此の駕籠に乗つて居て驚かしてやらう、とノシ／＼起き上つて駕籠の側へ歩つて来た、鐵棒を駕籠の隅から隅へ繩で縛りつけて置いて、

自分は駕籠の中へ潛り込み、小さくなつて胡座をかき、戸をピシヤリ閉め切つて武「ヨシツ、之れで大丈夫だ、早く泥的が来れば宜い……」と昵と待ち受けて居る、處が小賊はナカ／＼出て来ない武「何うも待ち遠しい事だ早く来て呉れないと眠くなるわい……」云つて背後へもたれて何時とはなしに又グイ／＼眠入つて仕舞つた。

一六 この鐵棒がお見舞申

處へさして小賊二人、漸々戻つて来た△「何うだい紀州紀ム、越「細工はリウ／＼仕上げを御覧じろだ、何うだ巧く行たのではないか、此の阿魔女をへイ之れでございませと云つて差出したら、右から左りへ三百兩だよ越「紀州、手前はヨクマアアンな事をバア／＼云へたものだな併し三百兩は、剛勢だ紀「オ、駕籠は此處にある／＼越「サア一つ遣付ける紀「合點だ」二人は椽

から駕籠を下さうとすると、グウ〜と駢の聲が聞へる。紀「オヤツ、越中、阿
 魔女が駢をかいてゐせ、色消しぢやねへか、アんな優しい顔をして、越馬鹿を
 云ひねへ、猿轡をかませてあるに、駢なんか搔かけるかい。紀「ダガ、アノ通り
 ……」勇士豪傑は轡の音に目を覺す、駕籠の中の武士は此の物音に不圖目を覺
 したから駢はヒタリ止んだ。越「ナンとも聞へねへぜ。紀「夫れでも今聞へて居た
 んだよ、大蛇が知らん。越「馬鹿大蛇が斯んな處に居て堪るものかい、サア文句
 はいはねへで早く擔げ〜。紀「オツトせ…」。越「ウームドツコイシヨ、オヤツ
 馬鹿に重くなつたぜ。紀「ウーム然し重くなる譯はねへのだが、駢の聲がしたッ
 氣の勢かも知れねへ、サア肩を入れる、ウーム、ドツコイシヨ、二人はヨロ
 くしながら漸々擔ぎ上げた、夫れは無理からぬこと、鐵棒丈けでも三十八貫
 あるのだから重い筈だ。紀「イヤ此奴は重いぜ…」、マア何んでも宜いや、サア
 氣張れ〜。越「ウーム〜ウインドコイシヨ…」。危い〜。紀「越中、手前と乃公

とは力自慢ぢやアねへか、チト確りしろよ…」。漸々擔ぎ上げ足並揃へて日口
 く歩き出した、漸やく五六丁來たと思ふと件の武士は一番驚かしてやらうと
 思つてウンと駕籠の中で氣張るといふと何んしろ三十八貫の身體が氣張つたか
 ら夫れ以上になる、出來の弱い駕籠は堪らない、マリ〜メリ〜と到々底が
 抜けて仕舞つた、山賊兩人はアツと驚き、其の場へ平倒り込んで仕舞つた、件
 の武士はカラ〜と冷笑ひ。武「アツハ、此奴は底の弱い駕籠だわい…」。
 と云つて猿轡を伸してチヨイ〜と首筋引揃んで、ガイと引寄せた、驚いたの
 は二人の小賊だ、重いと思つたも道理、肝心の三百兩の玉は何處へやら、大き
 い武士と變つて居るから小「ワウー之りや何うだ、お助け〜。武「ヤイ騒ぐな
 貴様等は酷い事をする奴だ、命は助けてやるから之から岩屋へ案内しろ。小「ウ
 ンへ〜長まりました…」。仕方がないから兩人は先に立つて歩く、其の後から
 件の武士は鐵棒をズシン〜と突き鳴らしダン〜と分け登つて來る何なく地獄

谷の山寨に乗り込んで来た。×コ、此處でございませす。武「ウム宜し早く此處を開けさせる。小「宜しちございませす……」小賊の奴はモウ観念して居る、門の月をトーンと叩いて。△「オイ、開けてくれろ……」スルトオーと答へて山のやうな大男が樞の棒の大きい奴を提げて、ノツと立ち出で、門の潜りから首突き出し。□「誰だい。越「公乃だ。紀州に越中だ。□「ウンさうか、其の後に居るのは誰だい。小「ウーム。□「誰だい、手前等の背後に立つてるのは二「ウーム之れは其の……ムニヤ、ムニヤ、三百兩の變りだ。□「ナニ三百兩其奴が持つてるのかい……」云つて居ると件の武士は餘程短氣と見へて。武「ヤイ、泥棒、乃公は貴様等の頭に用向があつて出て来たのだ、サア早く開門して案内しろ、之れを聞くと門番の男は吃驚して。門「オヤツ。紀州に越中、手前等何んだつて斯んなものを連れて来やアがつたのだ。紀「ナンだつてと云つた處で先刻話した駕籠を擔いで来やうとしたら斯様々だよ。□「エイ手前等は本當にへまな野郎だ、ヤ

イ武士、手前は何の用事があつて来やアがつたか知られへが下手に出やアがると命がねへぞ。武「アツハ、夫れは此方からいふ事だ乃公の用事といふのは他でもない、貴様等を片端から此の鐵棒で、引導渡してやるんだ。泥「ナニ、サヤ山賊退治をしやうといふ考へだ。武「云ふ迄もない事だ、今一人若い武士が来るのだから夫れ迄に乃公の手で退治て置きたいのだ、サア覺悟しろ。門「此奴生意氣な事を吐しやアがる見りやア瘦浪人の分際として太い事を云やアがる乃公等の頭に會ひたくば、表事乃公の首を刎れて通れ。武「ナニ貴様の首を刎れて通れ、小癪な一言望みとあらば不憚ながら此の世の引導渡してくれ、其處動くな。云ふより早く鐵棒振り上げ、ヤツと頭を一つ打つとキヤツ、惱天碎けて夫れへ、平倒り込んで仕舞つた、之れを眺めた兩人の小賊はアツと驚き、其の儘雲を霞と逃げ出して仕舞つた、斯んな奴に目もかけない件の武士は、門の扉をさして鐵棒を一當てウンと打ちつけると、門はホツキと二つに折れて、門

はギ、一文字に開いた、折しもあれ此の物音に驚いた山賊共は、二十名ばかりバラバラ各自に獲物を提げ、飛び出して来て、件の武士を犇々と取り捲いた山「ヤイ、手前は何者だい……」と怒鳴りつける、件の武士は少しも恐れず、武「黙れ貴様等のやうな虫ケラ同然の奴に用はない、サア頭に用向があるのだ貴様ワイく騒ぐと此の三十八貫の鐵棒がお見舞ひ申すぞ、之れを聞いた小賊共は大きに腹を立て、山「汝ッ、大きい事をいふ奴だ、乃公等の手で成佛させてくれるから、覺悟に及べいと、前後左右より打つてかゝつた、件の武士は高笑ひして武「オヤッ、貴様等此の鐵棒が怖くないと見へるな、夫ぢやア無益の殺生だが一々引導渡して呉る、覺悟しろ……」ビユ〜鐵棒を振り立てた、夜とは云ひながら、雲間を離れた十三夜の月は、煌々として四邊を照して白晝の如く輝き渡る、武士は一打ちに三人五人と當るを幸ひ、縦横無盡に薙ぎ立て突き立て叩き伏せる其の勢は、阿修羅王の荒れたるも斯くやと思ふばかり、山

賊共は此の勢に怖氣して山「ウワー、強いぞ〜、敵はん、逃げる〜……」と、先を争ひ逃げ出した、最早手向ひする奴もないから、件の武士はズン〜門内へ入り込まんとする折しも門内よりノシ〜と搖ぎ出たのは、之れぞ山賊の張本荒熊鬼夜叉丸だ、見るから物凄い面魂、五尺餘りの大太刀を引ズランばかりに帶し、件の武士をハツタと睨まへ山「ヤイ瘦浪人、其方は何處の何奴だヨクも手下を手込めに遣したな、斯くい小方公は常岩屋の主人山賊の張本荒熊鬼夜叉丸だ……」之れを聞くと武士はニツコと笑つて武「ウム貴様が山賊の張本荒熊鬼夜叉丸といふ奴か、流石は頭梁となる丈けあつて、ヨクも尋常に名乗つて出たな乃公は諸國修業のものであるが貴様等のやうな山賊退治は大の好物だ、今宵は一番索首叩き潰してくれから、覺悟しろ夜「黙れ此奴乃公から名乗つて居るに、ナヤ貴様は姓名を名乗らぬ武「乃公の姓名を聞きたいが貴様等の山賊風情に聞かせるやうな粗末な名前持たぬが、折角だから云つて聞か

せてやる、乃公こそは明智三羽鳥の随一人、安田作兵衛國次といふものだ、右大臣に槍をつけたのは天下に乃公一人しかないと夫れゆへ今は天下のお尋ね者と相成つて居るが、ナニ夫れ位に恐れる乃公ではない、サア之れ丈け云つて聞かせたら最う澤山であらう參れ鐵棒の味を賞翫させてくれん……」張本は之れを聞くと怯とした夜「ウーム、サアは貴様が明智の三羽鳥安田作兵衛國次かヨシ相手に取つて不足なし、サア来い」と五尺に餘る大太刀をギリ引抜いた安田作兵衛は猪虎才なりと、鐵棒真向に振り被りエイと喚いて打つてかゝる、互ひに秘術を盡して千變萬化、虚々實々双方劣らず負けず打ち合つたが、更に勝負がつかない、安田作兵衛も之には少々驚いた作「オヤヤ、此奴恐るべき手の内だ、乃公に向つて互角に抵抗するとは、氣に入つた奴、汝ッ何をツ……」マス、烈しく討つてかゝる、此方の張本も安田作兵衛は天下の豪傑といふ事は百も承知の事であるから、此處を先途と打ち合ひ、勇氣を勵まし闘つて居

る處へさしてドシ、乗り込んで来た一人の武士は、之れなん余人にあらず、先刻娘を麓に送り返した雲切八郎だ、此の體を見ると八「オヤツ乃公より先に山賊退治に乗り込んで居る奴があるな……彼の鐵棒に退治られては乃公が折角乗り込んだ甲斐がない……ヤイ、鐵棒々々其の張本は乃公に渡せ、作「黙れ貴様より乃公の方が先口だぞ、乃公が此奴を退治なのだ、貴様は其處で見物しろ、八「ナニイ見物……見物なぞが出来るか愚圖々々いふと貴様も一處に退治してくれるぞ作「ナニイ乃公を退治る天下の豪傑安田作兵衛に向つて何んといふ事を吐す八「ナニ貴様が右大臣家に槍を附けた安田作兵衛國次か作「如何にもさうだ、ナンと驚いたか八「黙れ、誰が驚くものかい、安田作兵衛と聞けば、イ、捨て置けん作「ナニ乃公と聞いて捨て置けんとは何ういふ譯だ八「ヨツク聞けよ織田右大臣信長は乃公の御主君又は父の仇だ、夫れゆへつけ親つて居たに貴様が本能寺で撃つた爲め乃公が折角親つた年來の仇敵がなくなつた、シテ

見れば貴様にも恨みがある此の上は張本は後にして貴様と一騎打の勝負しやう
 作「ナニ此奴理屈を申す奴ださういふ譯なら一番乃公が相手になつてやらうや
 イ張本貴様は暫らく生き永らへさせてやるから待て張「黙れ乃公も實は貴様に
 恨みがあるのだぞ作「ナニ何んで乃公に恨みがあるのだ張「ヨク聞けよ八
 ヤイ、張本乃公の眞似をするな張「貴様の眞似はしないが、乃公は今こそ荒
 熊鬼夜叉丸と名乗つて山賊となつては居るが、元は江州淺井の家來で、侍大
 將磯野丹後守の忤磯野支蕃之正といふものだ、父は姉川に戦死して、主家は滅
 び其の意恨止み難く、飽迄織田を呪はんと、斯く山中に籠り味方を集め、軍用
 金を募つて居るうち、諸本能寺に於いて、折角の怨敵織田右大臣は明智の爲め
 に弑されたと聞いた時の失望落膽、此の上は一生山賊で暮し氣樂に世を送るか
 さもなくば世に望みなき此の身を切腹して相果てんと存じたが、如何せん部下
 の者に遮られ遂に山賊で一生を送り世の中を太く短かく暮さんと考へた此の磯

野支蕃之正、サア此處で逢つたは天の與へ安田作兵衛の首を取るか乃公の首を
 渡すか二つに一つの勝負しやう、雲切八郎貴様は其處で見物しろ八「オヤ、
 そんな由緒のある人物であつたか、スルト貴様と乃公とは同じ江州で同じ主
 家は織田の爲めに滅ぼされ、又同じく父も討死をしたのだ、シテ見れば親類同
 様二人が此の安田作兵衛を遣付けて切めてもの怨みを晴さうではないかオオ
 、宜からう、ヤイ安田今聞く通りだ、貴様は逆も助からの命だから、觀念して
 首を渡せ作「オオヤオヤ此奴は山賊と若武士とが同盟したな、何うやら風向が
 變つて來たわい、ヨシ乃公も安田作兵衛國次だ、サア參れ、二人一度にか、
 つて來い八「何を吐す二人も一度にか、つて堪るものか、ヤイ磯野貴様が一時
 相手にして其の後は乃公に渡せオオ、合點だ「磯野支蕃之正と安田作兵衛は
 チヤン、バラ、とマス、烈しく打ち合つて居る。

一七 チト臍くり金でも用意して居れ

雲切八郎は昵と樹の根に腰かけ見物して居たが、小賊共がワア〜岩屋の中で
舞き立ち、飛び出さうとする。八「ヤイ〜貴様等は引込め〜出る幕ぞやア
ないぞ〜」怒鳴られてモシ〜して居る磯野支蕃之正も強いが一段安田作兵
衛の方が強い、今や支蕃之正シリ〜と後退りを始める、スルト八郎は八「ヤ
〜磯野々々貴様は暫らく休息しろ乃公が相手になつてやる。支「夫れぢや貴様
に譲るぞ〜」「パーと引外して飛びのく、入り代つて八郎が向つた、山賊退治
が安田退治になつて仕舞つた。八「ヤイ安田貴様が幾等強い豪いのと云つても
乃公には逆も敵はん、サア此の上は引導渡してくれ参れ。作「何を吐す此の野
郎貴様は山賊に加勢して乃公に向ふとは怪しからん奴だ、小僧ッ兒の分際にし
て天下の大豪傑安田作兵衛に敵對せんぞとは生意氣にも程がある、イデ此方

から引導渡してくれ、サア来い。八「云ふにや及ぶ参れ〜」作「オヤッ貴様は
其の鐵扇が獲物が、八「知れた事を云へ乃公は鐵扇も不用な位だが、マア〜
武士の作法を思つて鐵扇丈け持つて出てやるのだ、貴様等を相手にするのに何
がいるものかい。作「ウーム此奴口が横にさけたるまゝ、大言を拂ふにも程があ
るウーム思ひ知らせてくれん、サア来い安田作兵衛カン〜になつて怒つて鐵
棒眞甲に振り上げ、只一撃二打ち下した、八郎はヒヨイ〜と躲す安田作兵衛
間隙もなく打ち込む、八郎はチヨイ〜と姿を前にありと思へば忽然として後へ
とあり之には作兵衛も弱つたと見へ、三十八貫の鐵棒をビユ〜と盲目滅法に
振り廻す、八郎はパツパと消へる頭の上をチヨイ〜と踏んで飛ぶ。作「ウーム
此奴鳥みたやうな奴だ、武士の頭を土足にかけるとは何事だ此の野郎思ひ知れ
ッ〜」無闇矢鱈に打つてが、つたか、八郎が忍術の極意で以つてヒヨイ〜
姿を消し、鐵棒の先へチヨイ〜止るので、流石の安田作兵衛も今はフウ〜

大汗を掻いて三十八貫の鐵棒も大分重くなつて来た其の疲れの来た處を八郎は
 鐵扇で鼻の先をチヨイと突く耳をグイ／＼引張る果ては槍の先に唾をつけて、
 作兵衛の口の中へ入れる、イヤ作兵衛目も眩まんばかりに怒つたが、次第に疲
 れて来て、鐵棒夫れへ投げ出し、堂乎と尻餅ついて作「ウーム苦しい水を持って
 八「アツハ、何うだ安田の叔父さん、恐れ入つたか、此の首を貰ふのは安
 い事だが、マア夫れ丈けは勘辨してやる作「ウーム水を持って暫らく休んで又相
 手にしてやる、恐れ入つて堪るか……」小賊が水を持って来る安田作兵衛グイ
 と飲んで、胸をト／＼叩いて居る、磯野玄蕃之正は之れを見ると「ウイ安
 田モウ夫れ丈けに弱らせたなら怨みも晴れたから許してやる、此の上は乃公と一
 番勝負をやり直さう八「オイ磯野待て、モウ宜いお互いに怨みはない貴様も山
 賊なぞは廢せ、淺井の豪傑磯野丹波守の忤ともあらうものが、山賊の群に入り
 込んで居るとは以ての外だ支「ウム、マア夫れはユル／＼聞く事として、怨み

が晴れた以上は奥で一杯遣らう、サア二人とも来い……」兩豪傑は山賊退治に
 来て其の山賊と酒を飲み始めた、手下の奴が料理をする、魚はないが、獸物の
 肉を持ち出して来て、猪の天麩羅、狸の刺身、兎の吸物なぞ拵へ三人は舌鼓打
 つてグイ／＼飲み据へて居る、此處で磯野玄蕃之正も兩人の意見に従つて山賊
 を廢す事になつた有金は手下に悉く分配してやつて、懇々意見を加へて善心
 に立ち返させ退散させ、翌日となると三豪傑は岩屋を焼き拂つて、一先づ麓へ
 降り宿を取つて相談を始めた八「安田は天下のお尋れものと云つても、明智日
 向守の家來であつて主の爲めに盡したのであるから之れは至當だ已を得ん話し
 大手を振つて歩いて差支へない、又我々は織田家を目敵にして居たのであつた
 が肝心の右大臣が死んだから其の怨みの持つて行き處がないシテ見れば、モウ
 天下に怨むものはない支「併し乃公は違ふよ、姉川の合戦は織田徳川が合體し
 て来たのだから假令織田右大臣が死んでもまだ徳川が生きて居る、ダカラ徳川

を怨む積りだ。八、夫れは貴様の勝手だ。吾、二手が浅井と朝倉を引受け、浅井へは織田が當つたのであつたが、徳川も織田と合體して居る以上、之れを怨むのは至當であらうと考へる。作、如何にも夫れは尤である、然し乃公の考へでは徳川はどの心の許せない奴はないと思ふ、却本能寺の變があつた時、徳川は泉州堺迄出陣して居た夫れが都の大變を聞くと、慌て、伊賀地を越へて三河へ逃げて歸つたであらう、之れが何うも分らん、乃公は明智の家來でありながら、之れを疑ふのは可笑しい譯だが、斯うであらうと思ふ、家來と我が主君の日向守とは互いに何か話し合つて居るに相違ない、モシ明智が首尾よく遣つたら家康は織田の爲めに一合戦せねばならぬ、夫れに慌て、逃げて歸つたのは、確に明智と話し合つて居た證據で、ワザと恐れて逃げて歸つたやうに見せかけて居るが、其の實は泉州に愚圖々々して居ると否でも、應でも戦はねばならぬ、ダカラ明智に巧く目的を達せしめる爲め逃げて歸つたのではあるまいかと、乃公は心得て居る。八、

成程夫れ位いの事は家康としてあつたかも知れぬ、彼は心の許せない人物であるといふ事は乃公も小供の時分から聞いて居る、或は左様であつたかも知れぬ、いと三人は話し合つて居る、大體此の徳川家康が都本能寺の變の時慌て、逃げて歸つたのは、當時卑怯者との評判が専らあつたが、之れは家康に深い考へのある事であつて、明智が巧く遣つたら天下を半分分けにして三河以東は徳川が持ち、以西は明智が持つて二人が協力して遣つて行かうといふ深い思惑があつたのだ、其の證據は光秀が山崎で敗れ、小栗栖で土民の爲めに討たれたといふは、實は陰武者が討たれたので、光秀は密に三河へ逃げ込んで徳川家康の元に庇まはれて土岐主水と名を改め、客分となつて、濱松城に居た、處が秀吉公が後天正十五年小田原を征伐する時、濱松へ立ちよつた家康がイロ／＼馳走をして土岐主水を響應の役として其の席へ出した、之れは秀吉公も大分年月が経つて居るから、モウ知るまいといふ氣なのだ、スルト石田次部少輔三成が之れを見て密

に秀吉公に向ひ「三〇恐れながら、光秀が此の席に居ります」と申上げた、秀吉公は聞かぬ振をして居る、三成が三度四度と言上すると、秀吉公は「ニツコと笑つて『秀吉假令光秀が今迄生きて居ても死んで居るも同然だ』と高笑ひをしたといふ事がある、秀吉公の度胸は之れで分る、後天正十六年光秀は濱松城内で死したといふ事である、之れが事實でないとしても、家康と光秀とは深い相談があつたのは争はれぬ事實で萬一光秀を打つ放つて置くと此の事が洩れて家康の身の上が危ぶくなるから生涯庇ふたものに相違ない、家康といふ大將は斯ういふ人物であるからナカ／＼容易ならぬ心夫ゆへ三豪傑も疑つて斯う云つたのであつた、夫れはサテ置き三人は一旦別れる事になつて、其の日は飲み据へ、翌朝になると作『雲切貴様は忍術使だから、チヨイ／＼金儲けも出来るであらう、チト金をかせ八〇ハ、貴様はないか作『奇麗なものだ、一文もない、ダカラ山賊退治をやつて山賊の金を分捕つてやらうといふ考へなのであつたが

貴様が邪賢して夫れもおツヤンになつたのだ八〇ヨシ／＼夫れでは貴さう……金子五十兩出して渡した作『ヤア忝けない、五十兩とは大したものだ、乃公は此の頃五十兩の金を持つた事がないのだ、サア磯野行かう、乃公も路金がない作『オヤ／＼、此奴山賊の親分の辭にナンダ間抜け奴チト臍くり金でも用意して居れ、乃公は皆手下の奴に分配てやつて一文もないのだ八〇夫れでこそ磯野丹波守の忝だ不潔な金は一文も持たない處に價値がある、ヨシ食してやらう……』又五十兩出してやつた作『オヤ／＼一體貴様幾等持つて居るのだ八〇乃公は國を出る時七百兩持つて居たのがあるのだ、大分使つたがまだ此處に百兩ほどある作『成程貴様はまだ子供上りだから酒を飲まない、夫れで金がナカ／＼減らないのであらう、イヤ忝けない、夫ぢやア別れるぞ、貴様は山陰道を九州へ出るのだな、又合ふ事にしやう』と安田作兵衛と磯野支蕃之正とは連れ立つて出立した、跡に雲切八郎は八〇イヤ何うも安田作兵衛といふ豪傑も

山賊から金を捲き上げやうなぞと考へて居るやうでは宜い加減のものだ、然し
面白く男天下のお尋ねれもので威張つて居る處が氣に入つた、と、笑ひながら蒲生
峠の麓を立つて因州に入り込み鳥取の城下で二三日見物、夫より伯州へ入り込
み羽衣の城下へさして歩つて來た、此の羽衣の城主は南條伯耆守元國と云つて
ナカ／＼豪勇を以つて聞へた荒大名であるから、八郎は羽衣の城下で宿を取り
ブラ／＼處々を見物して居る或日の事、八郎城下外れの八幡宮に參詣して我身
の武運長久を祈り夫より境内をブラ／＼散歩して居ると一人の若武士年頃十五
六歳で身装とても餘り立派ではないが何か心配氣な様子で、拜殿に來て一心不
亂に祈念を始めた、八郎は夫れを眺めながら、境内をグル／＼と一度廻つて、
繪馬堂を暫らく見物、夫より元の處へ戻つて來て、ヒヨイと見るとまだ件の若
武士は神前に願つて居る、八郎「オヤ／＼永い祈禱だ何れを祈つて居るのか知らぬ
が……念が入つて居るわい……オヤ／＼泣いてる能々の事があるのであらう、

ハテナ……」立ち留つて見て居ると、漸々祈念を終つたと見へ、涙を拭いて拜
殿を出た、立ち去らうとするから八郎は呼止め「八郎アイヤ暫らく……武ハ
御用でも……」八郎如何にも用がござる、失禮だが拙者は旅の浪人で雲切八郎と
申すものでござるが御身は先刻より見受ける處只武運長久を祈られるばかりで
はないやうに心得る、何か様子ありげに存するからお呼止め申したが、武士は
相見互い差支へなければ、一つ打ち明けて下さりますか及ばすながら柄先三寸
の好誼を以つてお話相手になつても宜しい、いはれて件の武士は、シロ／＼八
郎を見て居たが安心した顔色にて武誠にお尋ねに預つて恐れ入ります私此
の羽衣の城主南條家に仕へて槍術の指南役を勤めて居た淀橋源左衛門の倅源一
郎と申すものでございまして、父は目下病氣、永々の浪々に見る陸もない次第
父の病氣全快と今一つは父の意恨を晴したい爲め、斯く毎日時刻違へず、八幡
宮へ參詣して居るのでございませぬ、涙ながらに物語る八郎之れを聞いて八

ナニ病氣平癒の祈願は分つて居るが父の意恨とは一體何ういふ譯でござる、實は昨年迄父は立派な道場を持つて居て、月のうちで一六三八の日に城内へ指南に参るばかりで手當二百石頂き都合よくいたして居りました、夫れゆへ南條家に對しては家來といふではない、只槍術の指南を頼まれて参るばかり、其の縁故で私は殿様の御近習となり、忠勤を盡して居りましたが、丁度昨年九州島津の浪人で種ヶ島左京といふものが當地へ参り父の道場へ試合に乗り込み、其の時の約束に父が負けたら、道場をソツクリ渡す、又先方が負けたら弟子になるといふ定めでございました。

一八 飴を嘗させて置いたのだ

八「成程、夫れは面白い、シテ其の結果は……源「其の結果父は先方の者に欺されて負けとなりました」八「ナニ欺されて負けました夫れは何ういふ譯で……源「

先方は大きい木太刀でございましたが其の木太刀の中に仕かけがございまして不意に鐵の丸が飛び出し、父の眉間に當り夫れが爲め負けとなりました八「ハ、アスルト聞いて居る振り棒といふ獲物だ源「ハイ振り棒とか振り杖とか申すさうでございませうが父は不意を喰つて到頭眉間を破られ其の血が眼に入つて負けとなりました八「フム最初から振り棒とは申して居なかつたのだ源「夫れが申して居れば油斷もいたしませぬが、何んとも申しませぬゆへ遂に父の負けとなり道場を引渡しました處が父は眉間を打たれた爲め其後はアラ／＼病となつて今に床について居りますやうな次第、南條家からも二百石の手當が止つて、今は種ヶ島左京が二百石頂いて居るとやら、私も子として安閑とお役を勤めて居るのが面目次第もございませぬゆへ退身をして今は専ら父の病氣介抱にのみ盡して居りますが、丸一年ばかりの間に諸道具や僅の金は使ひ果し斯く貧苦に暮して居る次第、何うか御推察下さいまするやう」と物語るを聞いた八郎は根が

利かぬ氣の男だから八「夫れはお氣の毒千萬、尋常の勝負なら知らぬこと卑怯にも振棒を以つて、勝つといふは眞の勝負ではないヨシ」拙者に考へがある之より乗り込んで打ち据へ、道場を取り戻して進ぜよ、安心さつしやい、一先づ御身の屋敷へ出かけやう」と、八郎は源一郎に連れられ、町端れの浪宅に來て見ると見るもいぶせき埴生の小屋、八郎は入り込んで見ると、タツタ二間で奥の間に父が寢て居ると見へてプンと藥の匂ひがする源「父様、只今歸りました父」オ、源一郎戻つたか源「ハイ只今八幡社の境内で斯様々々お連れ申しました……」八郎は枕許に近寄り源左衛門に挨拶する、眉間の疵は癒へて居るが餘病を引き出したと見へ、瘦せ衰へて見る影もない、八郎は之れを慰め金子十兩を置いて其の日は宿へ引取つたが翌日になつて、プツリ立ち出で、種ヶ島左京の道場へ來て見ると餘り立派な道場でもない八「ハア之れだな、待てよ今乗り込んで此の道場を取り返へすのは安い事だが、夫れでは面白くない、待て

く乃公に一つ考へがある……」八郎は立ち歸り宿の亭主に相談をして種ヶ島左京の道場の一丁ばかり手前に大きい立派な空家がある、之れを借り受け、表へ持つて行つて「天下無敵流武術指南雲切八郎」と大きい看板を出した、奇を好むは人情の常「オイ天下無敵流の先生が出來たよ一つ行つて見やうか」宜からう……」南條家の家來や種ヶ島の門人がドシ／＼歩つて來る、山師と違つて實際腕があるのだから、五六日経つと門人が早や十五六人も出來た、八郎考へがあるから屋敷の庭を道場にして野天でパン／＼門人を稽古する幸ひ雨が降らぬから之れで出來るが、モシ雨でも降つては大變だ、チト手入れてもするかと思ふと、一向手入れをしない屋敷のうちには破れ障子で道具一つもなくガラ明きた、八郎宿から辨當を取り夜具を運ばせて居るから平氣だ、然るに種ヶ島左京、此の頃天下無敵流の先生が近處に出來たといふ事を聞いて冷笑つて居ると實際の腕が出來るから自分の門人もモリ五六人取られ、次第に減る様子だか

ら大いに怒つて左「怪しからん奴だ、一つ小ツビどく打ン殴つてやらう……」
 と例の大木太刀を提げて、ノシノシ乗り込んで来た左「頼むく、八「ドレ……」
 「八郎は先生とも玄關番とも小使とも掃除番とも一人で引受けて居るのだ
 が掃除などはした事がないから、汚ない事夥しい八「何に御用でござる左
 拙者は種ヶ島左京と云へるものであるが一本の立合を願ひたい、主人が在宿な
 ら取り次いで貰ひたい八「如何にも承知いたした、暫らくお控へを……」八郎ズ
 オと奥へ入り込み羽織を引かけると、ノシノシ出て来て八「イヤ之れはく……ヨ
 ク參られた、拙者當道場の主人でござる、ウツフオン種ヶ島左京も呆れた左
 オヤ、今取次に出て来た奴だが、此奴が雲切八郎といふ奴であつたのか斯ん
 な若者が乃公に立つかうとは生意氣千萬な奴だ、ヨシノシ例の流義で一つ遣付
 けてやらう……」と思ひながら左「御身が天下無敵流の先生か、拙者は種ヶ島
 左京である、一つ立ち合を願ひたい八「之れはく……」ヨクお越し下さつた、然

らば、一本お試合申さう、イヤ道場へ……」左京何んな立派な道場へ連れ込
 かと思つたら斯は如何に野天の庭へ連れ出した八「イヤ何うも拙者の道場は此
 處でござる處で左京先生左「何事だ八「拙者道場の掟として、萬一拙者が負け
 た時は此の道場をお渡し申す、夫ればかりでなく五十兩をつける又貴殿が負け
 たら、貴殿の道場を申受ける、ソツクリ諸道具つきでござるぞ左「ワーム此奴
 乃公のいふ事を先に云やアがる、イヤ承知いたした八「然らば五十兩之れへ積
 まつしやい左「心得た……」左京は従て来た弟子を返して五十兩を取りよせ
 夫れへ積んだ、八郎も五十兩を出す、百兩が椽側に置いてある、八郎は木太刀
 を持つて、ズイと進み出で八「イヤ、左「イヤ、」双方位取りに及んでエイ
 ヤツと睨み合つた、腕に覺へのあるものと見ると、大抵相手の手の内は分る、
 八「ハ、ア此奴は高の知れた手の内だ、此んな奴に二百石の手當を與へるとい
 ふは餘り馬鹿々々しい、ヨシノシ一つ嬉しがらせて置いて後で吃驚させてやら

うと八郎パンくくと打ち合して居るうち小手に隙を見せると得たりとばかりバ
 シーン打ち込んで来た鐵の丸が出る迄もなく、八郎は小手を打たれて八〇參つ
 た、残念……左アツハ、まだく之れでは一軒の道場は持てぬ、夫れで
 は約束通り此の道場を拙者貰ひ受ける……左京は五十兩儲けて嬉しさうに鼻
 を齧かして居る、八郎は計略圖に當つたと、ペロリと舌を出し八〇イヤ夫れで
 はお任せ申す御免……アイヤ門人衆今云つたやうな次第であるから何うか此
 の後は左京大先生に就いて指扇を受けさつしやい、大きに御免……アイと宿
 へ戻つて来る、左京屋敷のうちを調べて見ると疊は破れ道具は何に一つない、
 左〇イヤく斯んな汚ない道場とは知らなかつた、併し屋敷は乃公の今居る處
 よりは、大分大きい、此處へ道場を建てたら立派なものが出来る、ヨシく五
 十兩で、三十兩は道場の建築料二十兩で疊建具を拵へやう、夫れで此方へ引移
 つてやらう」と不意に思ひついて、大工手傳を入れて建築を始めた、此方八郎

は宿へ歸つて八〇アツハ、一ヶ月位いはかゝるであらう、マア夫れ迄待つ
 事にしやう……毎日淀橋源左衛門父子の處へ出かけ、之れを慰め、醫者にか
 けて手當を十分にしてやると、源左衛門の病氣はスツカリ快くなつた、處が此
 の事が城下へ知れると、雲切八郎の評判が到つて悪い、源一郎は夫れを心配し
 て源雲切殿、此の間左京と勝負をなさつたさうでございませうが……八〇アツ
 ハ、アレが、アレはチヨイと左京の奴に飴を嘗めさせて置いたのだ、今に
 取り返してやるから、安心さつしやい、ナアニ此方に考へあつての事だ……
 平氣で居る、一ヶ月程経つと左京は道場を新築の方へ引移り十分手入れをして
 諸道具も買い込み屋敷のうちが、ピカピカ光るやうになつた左〇イヤ有難い、
 今迄の道場とは、價値が違ふ……大勢の知己や南條家の重役などを呼んで新
 築引越しの酒宴を催はし看板なぞは櫛の一枚板で、立派なものを掲げた、夫れ
 を見定めた、八郎は八〇イヤ出来た、モウ乗り込んで宜からう……一

日ノシく歩つて来た八〇頼むく門〇ドレ、オヤ雲切先生では……八〇如何にも八郎だ、他流試合に参つたから、左京に取次いでくれ門〇ヘーン……門人は變な顔して奥へ引込む、聽て種ヶ島左京が出て来た左〇ヤア之れはく五兩の先生でござるか八〇如何にも左様、拙者一ヶ月ばかり以前に試合をして打ち負かされ残念で堪らない、夫れゆへ又もや五十兩を工面して罷り越した、是非立ち合を願いたい左〇ナニ残念だから五十兩苦面して参つたとな、夫れは珍客イザ先づ之れへ……又五十兩儲かつたと思つて、左京大喜び道場へ通ず八郎見ると、八間四面柱なし太鼓張りといふ立派な道場が出来て居る、其他諸道具もチャンと新調して眩ゆいばかり、ピカピカ光つて居る八〇オヤく五十兩で新調したのか、アノ時の五十兩も取り返さんといふと都合が悪いから二度勝負をしてやらう、ヨシく……考へながら八〇イザ参らう……五十兩夫れへ積む左京も五十兩出した、以前は縁側だが、今度は三寶に乗せて、チャン

と道場の正面に掃へてある、左京は又五十兩になつたと思つて大喜びパンく、と打ち合した、八郎は宜い加減に扱いながら、ヤツと小手を打つ左〇ウーム参つた八〇之れは失禮、五十兩は此方へ……懷中へ捻じ込んだ其の早さ左京は残念で堪らない左〇ウーム今のは怪我負けた、モ一つ立ち合はう八〇承知いたしたが、然らば今度は百兩積んで拙者が負けたら、御身の弟子にならう貴公が負けたら此の道場を元々通り戻して貰ふ、元より諸道具は一切ついて、御身は身體一貫で退散したら宜からう左〇ウームケ怪しからん事を……ヨイシサア来い……左京奴五十兩取り戻されたので、ウームく唸りながら今度は大太刀を持ち出して打ち向つた、八郎は平氣八〇イヨイサテはアノ大太刀が鐵丸を仕込んである振棒だな、ヨシく……左あらぬ體でエイヤツと睨み合つた、三寶の上には二百兩積んである、之れを儲けると、八郎は百兩儲ける事になるのだ八〇ヤ、ツ……左〇ヤ、ツ……パンく、と打ち合つて居るうち、左京の大太

刀の先からブーン唸りを生じて鐵丸が飛び出し、咄嗟八郎の眉間へバシーン、中つたかと思ひの外、斯は如何に、左京はアツと叫んで引くり返つた、八郎が鐵丸が飛び出したと思ふと、ヤツと弾き返したのだが、夫れが早業であつたら他のもの、目には見へなかつた左京の眉間よりは、タラ／＼と血が流れて居る、八郎は素早く二百兩を懷中へ捻じ込んだ上倒れて悶へて居る左京を踏みつけ八〇ヤイ左京思ひ知つたか、貴様は卑怯にも太刀の中へ鐵丸を仕込んで夫れで以つて、今迄勝つて居たのであらう、貴様のやうな奴は武士の風上にも置けない代物だ、思ひ知つたであらう、サア約束に依つて出て行け 左〇ウーム残念…… 八〇何が残念だ、貴様は先年淀橋源左衛門を此の鐵丸で打ち負かせ、道場を奪ひ取つたであらう、我身つめつて人の痛さを知れ、人我れにつらければ、我れ又人に辛し、キリ／＼立ち去れッ……」首筋擡んでヤツと投げ出すと左京はブーンと門前に投げ出されドシーン 左〇ウーム残念……」怨めしうに道場

を見返り／＼跛足引き／＼何處かへ立ち去つた。

一九 生意氣な名前をつけて居るわい

八郎は直様淀橋源左衛門父子を呼び迎へ「八〇サア道場は取り戻して進めた、立派に看板をかけてやらつしやい、今に御身の價値は出て来る……」淀橋父子は嬉涙を溢して喜んだ源〇誠に貴殿の御恩義、何時の世にか報すべき…… 八〇イヤ／＼武士は相見互い失禮だが源一郎殿は、まだ未熟のやうに心得る依つて拙者が暫らく逗留して御指南申さう……」八郎が源一郎に仕込む、丁度半ばばかり逗留して仕込むと源一郎熱心だからメキ／＼と腕前が上達した、或日の事八郎は源一郎を連れて、八幡社へ参詣した、源一郎の爲にはお禮参りだ、参詣済んで今二人が鳥居を出て、プラ／＼一丁ばかり歸りかけると、ソ／＼と人聲、何んであらうとヨク／＼見ると、一頭の馬が疾風の如く驅けつけて来る、

往來のものには右往左往に逃げ惑ふ或は蹄にかゝつて、蹴り倒されるもあり、又は逃げ迷ふて倒れるもある、大混雑であるから、八郎は源一郎と共に之れを見ると八源一郎殿待たつしやい……云ふが早い口中に何か唱へて、ヤツと叫ぶと飛鳥の如く八郎の身體はヒューと飛び上り、消へたかと思ふとモウチヤンと馬の脊中に乗り跨り手綱を絞つて、ウーム締めつけたから、馬は駆け出す事も暴れる事も出来ない、其の儘鎮まつて仕舞つた、八郎はヒラリ飛び降り、拳を搦んで突つ立つて居る處へバラ／＼と駆けつけて来たのは、五六名の武士フウ／＼息をはずませながら武誠に何うも有難い仕合せ、實は此の馬は、南條伯耆守様の御乗馬でござつて只今八幡社へ御参詣の途中圖らず御乗馬が何に驚いたか殿様を振り落して置いて此の始末、別に殿様にお怪我はなけれど、非常の御立腹幸ひ往來の人々も怪我人といふてもなく、貴殿のお蔭で無事なるを得てかゝる喜びはござらん、我が君に申し上げたく失禮ながら此方へお越し下

されまじきや……」到つて言葉も丁寧であるから八郎は一儀に及ばず、馬を渡した上八源一郎然らば御同道仕る家來に連れられて、一二丁來ると路傍に床机を据へさせ、南條伯耆守は落馬したのでウム／＼怒つて居る處へ馬を曳いて来たから、伯耆守は突つ立ち上り伯耆主を振り落すやうな馬は、有つて益なし手打ちにいたしてくれ……」咄嗟太刀を引抜かんとする家來はハツと驚いて居る、夫れと見ると雲切八郎はバラ／＼飛び込み、伯耆守の腕を押へて八源失禮ながら畜生を手打ちに遊ばされた處でお手柄にはなりませんまい」落馬なさるはまた馬術が御未熟かと心得ます、某は只今此の馬を取り鎮めたる旅の浪人雲切八郎と申すものでござる、此の馬を十分乗りならして御覧に入れまする間、御手打の儀御留まり下さるやう」と述べ立てると、南條伯耆守は呢と八郎の姿に目をつけて居たが、年は若いは何んとなく犯し難き風が見へるから、一個の豪傑ならんと心得太刀を控へて伯耆其方が先年織田右大臣を覘つた雲切八郎である

か八「御意にございます……」伯耆守も雲切八郎といふ名は口知つて居る、斯んなもの、いふ事を聞かなかつたら、何をするか分らないと、小氣味悪く思つて伯耆守莞爾として伯「然らば、手打ちは廢すであらう、城内へ参れよ……」八郎は南條伯耆守に連れられて羽衣の城内へ歩つて来た、此處で八郎は直ちに庭前へ馬引出し、夫れに乗つて我流ではあるが、馬術を見せると、伯耆守は感心して伯「天晴である、杯を取らせる……」大廣間に案内させて杯を與へる八郎は面目を施して其の日は引退つたが、翌朝になると、城内より使者が立つた、八郎出かけて見ると、馬に乗れとの命、心得ましたと昨日の馬を曳出させて乗る、丁度十五日ばかり、毎日々々城内へ出かけて乗り立て、居ると辭がスツカリ止んで仕舞つた伯耆守は大いに喜び伯「ヤア八郎、汝は予の家來にならぬか八「恐れながら、私は父の家を興さればならぬ身の上でございますゆへ、今暫らく諸國漫遊いたしたく、此の儀は御断り申上げます……」何んと云つて

も聞き入れないから伯「然らば汝の望みを何なりとも叶へて得させるであらう八「ハッ有難き仕合せに存じます夫れではお言葉に甘へて申上げます、何卒城下に町道場を開いて居ります淀橋源左衛門に先年通り御手當を下し賜はり度、又悴源一郎を元々通り御近習役に御召抱へ給はらん事を、謹んで願ひ上げます實は淀橋父子は斯様々々でございます」と種々島左京の事から逐一申述べると伯耆守は八郎の義氣に感ずると共に、淀橋父子の身の上を不憫に思はれ伯「宜しく承知いたしました、源左衛門には三百石の手當を興へる元々通り城内の若武士に指南させ又悴源一郎は近習に召抱へ百五十石を取らせるであらう」と快よく承知となり、墨附を下賜となる、八郎は夫れを受取り淀橋の處へ来て父子に手渡しすると父子は嬉涙にくれ父「誠に再生の御高恩、何日の世にか報じ申すべき有難き仕合せに存じます」と禮を述べ八「ナニ之れといふもまだ御身達の武運の盡きざる處、以來は南條家へ忠義を盡されるが宜しからう」と注

意を與へ、其の夜は祝いの酒宴を催うし、翌日八郎は城内へ出かけて、身の暇を告げ南條伯耆守より饒別として黄金二十枚を頂き、羽衣の城内を立ち淀橋父子に送られて城下を出立、町端れに来て、別れを告げ、八郎はプラーリくと、道を歩みながら、伯耆の國を後にして雲州へ入り込み、松江の城下へ差して歩つて来たが、此處は當時堀尾山城守吉晴の居城で十八萬石、大守山城守は大坂へ上つて不在、別に變つた事はないから、夫より石州へ入り込み、津和野の城下へ歩つて来た、此處は龜井能登守の領地で四萬石、小名ではあるが、武張つた家柄、八郎は津和野の城下へ來ると何處かへ宿を取らうと、プラーリと歩いて居ると一軒の居酒屋がある、丁度正午時分だから八「オ、丁度幸ひだ此處で中食をして宿屋を尋ねて見やう」とズイと入り込み八「酒を出してくれ、飯も食いたい亭」心得ました……」酒肴を出す八郎は酒を飲んで仕舞ふと飯を遣り出した處へ二十八九歳の女が、内の方から出て來た目を泣き腫らしクシクシ

ヤクリながら表へ出る様子、スルト亭主は亭「モシ奥さま餘り御心配なさつてはいけません、貴女が御病氣にでもなられると、取り返しがつきませんが、マア〜クヨ〜」思はないで、無い昔と諦めて何うかお身體を大事になさいまし女「お前がさういふておくれたから、妾は心丈夫になつて嬉しい、夫れでは歸ります……亭「ハイ〜、又今夜邊り私がお伺ひ申します……」女は表へ出て行つた、亭主は見送つて居たが亭「ア、ア、お氣の毒なものぢや……」と兩眼を腫叩きながら内へ入り込まうとする先刻より見て居た八郎は何だか様子ありげに見へるから八「コレ〜亭主、只今の女はアリヤ何うしたのだお前の身寄のものか亭「へエ私が以前御奉公をして居た宅のお嫁様でございますが、今は本町の呉服商人津和野屋仙吉といふお方の御家内になつて居られます八「フ、△何うやら様子がありさうだが、何んでさめくと泣いて居るのだ亭「お武家様私も思ひ出すと腹が立つて仕方がございません、彼のお方の御亭主仙吉様は